

第Ⅲ章 遺 跡

1 遺 跡 の 概 観

A 平城京造営以前の地形と整地

調査地は、奈良盆地北端部の、北から南に緩やかに傾斜する沖積地に位置する (Fig. 15)。この一帯は1960年代までは豊かな水田地帯であったが、その後急速に開発が進み、今では奈良市の新しい中心部となりつつある (Ph. 81)。ここでは1962・1963年撮影の航空写真を図化した1/1000地形図 (Pl. 45) をもとに、水田であった当時の微地形を観察することにする。

水田面は、調査地北西の平城宮入隅部が標高63.0m前後と高く、東および南に漸次低くなる。発掘知見を加えてやや詳しくみると、三条二坊一・二・七・八坪では、一坪の北西隅部が標高約62.0m前後と最も高く、一坪の中央やや東寄り (調査地区割68ライン付近) から二坪北西部にかけて第1の段差 (標高61.5m前後)、八坪西半 (同35ライン付近) から二坪東辺 (同54ライン) にかけて第2の段差 (標高61.0m前後)、八坪南辺から七坪の西半 (同35ライン付近) にかけて第3の段差 (標高60.5m前後) があり、七坪東南部の菰川沿いが標高60.4mと最も低くなる。ただし、第3の段差は八坪南辺から七坪北東部をへて菰川の東で東南方向に続いており、七坪北東部から八坪東南部がやや高く、この西が低い谷地形になっていたことがわかる。

水 田 の
微 地 形

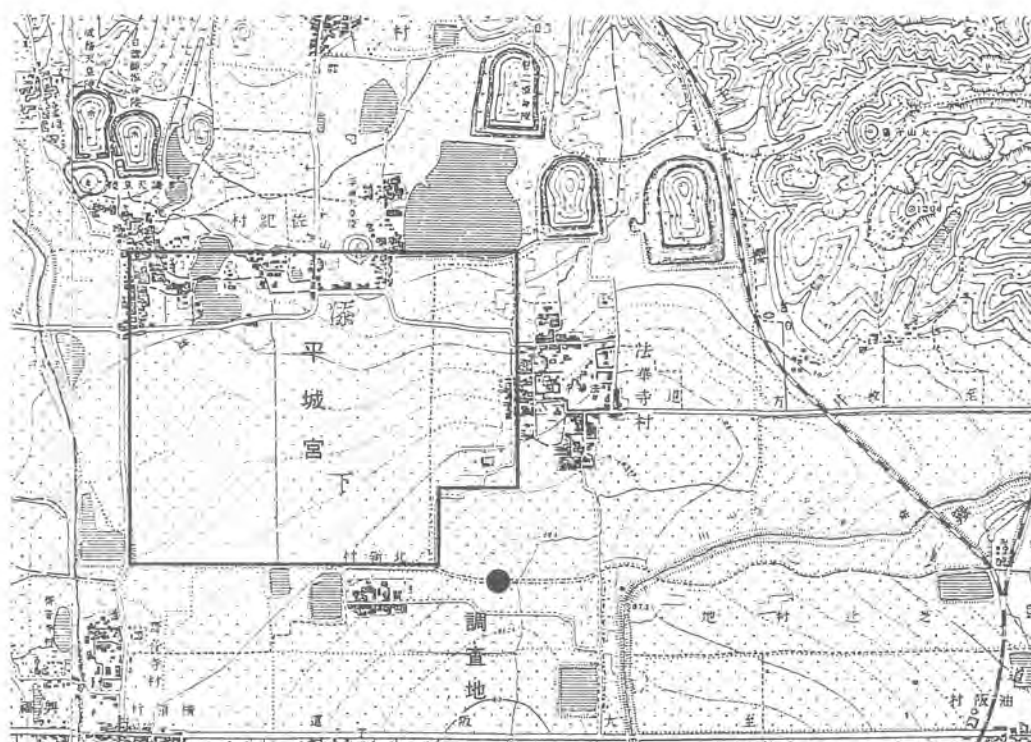


Fig. 15 調査地周辺の地形図 (1885年陸地測量部仮製二万分一地図を使用)

調査地東辺には北の奈良山丘陵に派生した菰川が南流している。菰川の現流路は、丘陵裾部のいくつかの流れをあつめた後、一条南大路沿いに西流し、一条南大路と東三坊大路の交差点付近から東三坊大路沿いに南流、ついで二条々間路沿いに西流、東二坊大路沿いに南流、二条々間南小路沿いに西流し、今回の調査地である左京二条二坊五坪の東北隅付近からは東二坊々間路沿いに南流している (Fig. 2)。つまり、菰川の現流路は、奈良時代の条坊に沿う位置にあり、平城京造営に際して計画的に付け替えられたものが今もつづいているのである。

菰川の旧流路 (Fig. 16) ところで、今回の調査では七坪東南部で菰川の旧河道と考えられるを流路SD1560を検出した。幅4~16m、深さ約1.5mであり、埋土には弥生時代から8世紀初頭の遺物が含まれている。この流路の下流は南の六坪に延びており、上流は市庁舎敷地 (左京三条二坊十五・十六坪) で発見された流路につづくものと思われる。六坪の発掘成果と今回の七坪での知見をあわせて考えると、この流路は六・七坪では平城京造営当初にはほぼ埋まりかけているが、これを幅3~7m、深さ0.9mのSD4150に掘り直し、敷地内の水路として使用している。その後、奈良時代中頃近くまでにこの水路は埋め立て、七坪内には建物が建つが、六坪では坪の中央に位置するよう旧流路上に園池が造られ公的な宴遊空間となる。¹⁾ 一方、上流の市庁舎敷地では、流路は幅4~6m、深さ約1.5mであり、5~7世紀の遺物が出土した。しかし、ここでは奈良時代になってから掘り直された形跡はない。²⁾ これらのことから、東二坊々間路を境にして東側では、菰川は他のルート、結論から言えば東二坊々間路の東側溝として付け替えられたと考えられるが、この点はまた後で触れる (第Ⅲ章-2参照)。

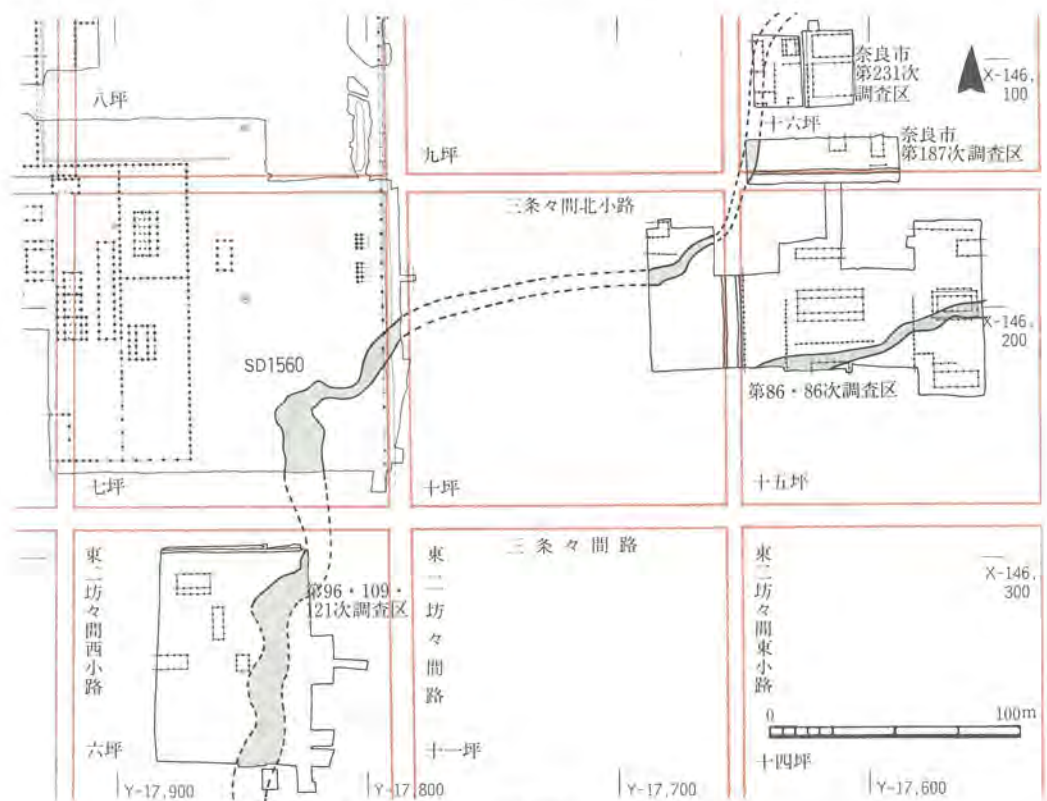


Fig. 16 菰川の旧流路 1 : 3000

1) 奈文研『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』1986
2) 奈文研『平城京左京三条二坊』1975

今回の調査では一・二・七・八坪にわたる4町の宅地のうち、七坪はほぼ完掘したものの、残る坪は未発掘地も多い。また、第197次調査区などでは、土壌改良のため土層を確認できない状態であった。このように4町敷地全体の地形を復原するには不明の点も多く限界があるが、得られた情報の範囲内で復原を行うと、以下のようになる。

4町の宅地の奈良時代の地表面は、地山面そのものからなる部分と、地山上に盛土・整地した新しい造成面とがある。その広がりを見ると、盛土・整地された範囲は4町の南半中央部、平城京造
営時の
盛土・整地殿舎が集中する中央の板塀に囲まれた地区に概ね重なる(Fig.18)。奈良時代当初、4町を一つの宅地とすることが決まった時点で、敷地内の建物配置を決め、中心の殿舎を配置する部分をやや高く、平坦に造成した結果であろう。盛土に使用した土を敷地外から運び込んだ可能性は低いから、敷地内で土を動かしたと考えられる。そうすると、地山が地表面となっている部分を削って、盛土部分に運んだことになる。つまり、盛土に使われた土量を、削られたと考えられる地山部分に戻してみると、旧地形は復原できる。4町敷地に対して盛土された部分の面積は約1/3であり、平均盛土厚は約20cmである。この土を残る2/3の土地から均一に動かしたと仮定すると、削られた土の平均厚は10cmとなる。

平城京造営以前の地形 (Fig. 17) 一坪西北隅が最も高く、標高61.1mであり、七坪東南隅が最も低く、59.5mである。七坪東南隅には菰川が蛇行して流れ、ここに向かって全体の地形がゆるやかに下がる。平均勾配は約0.5%である。地表面は粘土、シルト、砂などの沖積土で

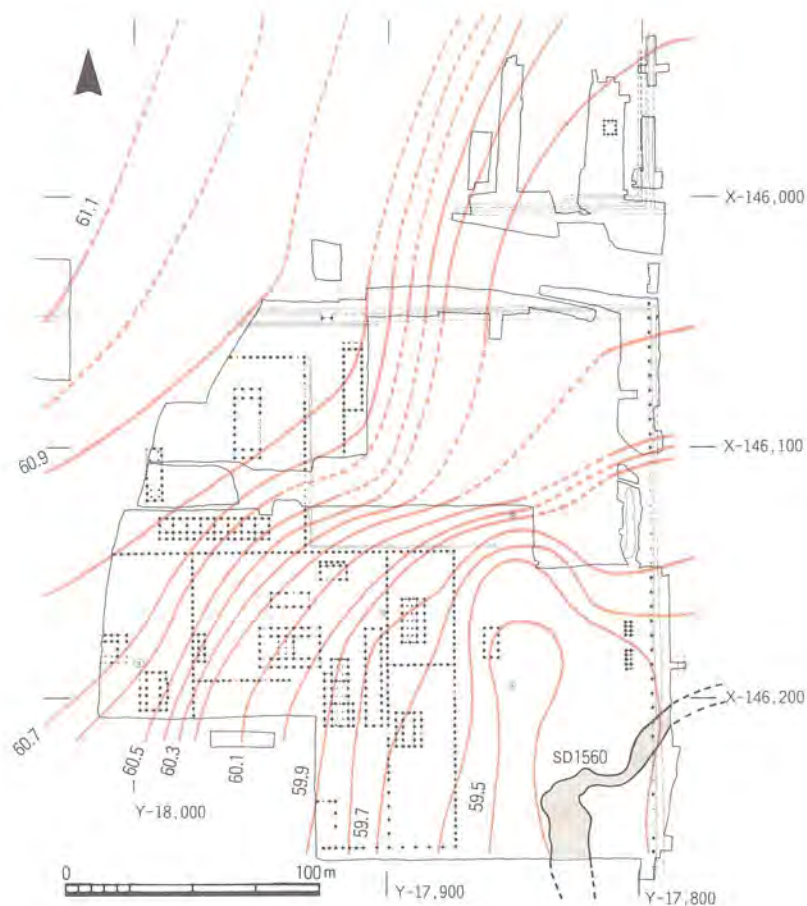


Fig. 17 平城京以前の地形復原

1 : 3000

あり、軟弱な地盤である。この西北から東南に向かう地形の下がり、自然流路と考えられる幅1～7mの砂の堆積土が同方向に平行する形で数多く確認できることからわかる。また、この上面には古墳時代の建物や溝が造られているが、その方位は等高線に平行する。つまり、真南北に対して約45度傾いた方位となっている。これも地形の傾斜を間接的に物語るものであろう。その後、7世紀と推定される時期に、二・七坪北辺から一・八坪中央部にかけての地域に南北約90m、東西約70mの規模の居館が営まれる。この居館の造営に伴う整地土が二坪東辺から七坪中央部にかけての範囲に拡がっており、その厚さは10～20cmである。

平城京造営当初の地形 (Fig. 18) 地形の基本は造営以前と変わらないが、4町の南半中央部が盛土・整地され、従前より平らに均される。この盛土に要した土を敷地内の周囲から平均的に運んだとすると、盛土された中央の殿舎地区をはさんで北西側は従前より傾斜がゆるやかとなり、東南側はややきつくなる。整地土面の標高は三条二坊二坪の中央部西端で約60.6m、東端約60.1mであり、一坪の地山面が調査区北西で約61.0m、北東・東南・西南部で60.4～60.6mであるのと比較すると、南東にゆるやかに傾斜していたことがわかる。八坪南辺の整地土面は西が標高60.4m前後、東寄り60.0m前後と東にやや低くなる。七坪では東南部に整地土がほとんどなく標高59.6m前後と低いが、中央部の整地土面は60.1～60.0mであり、二・八坪からゆるやかに傾斜する。二条二坊五坪では北西端が60.3m前後、南端の西が60.1m前後、東が60.0m前後と北西から東南にゆるやかに傾斜する。

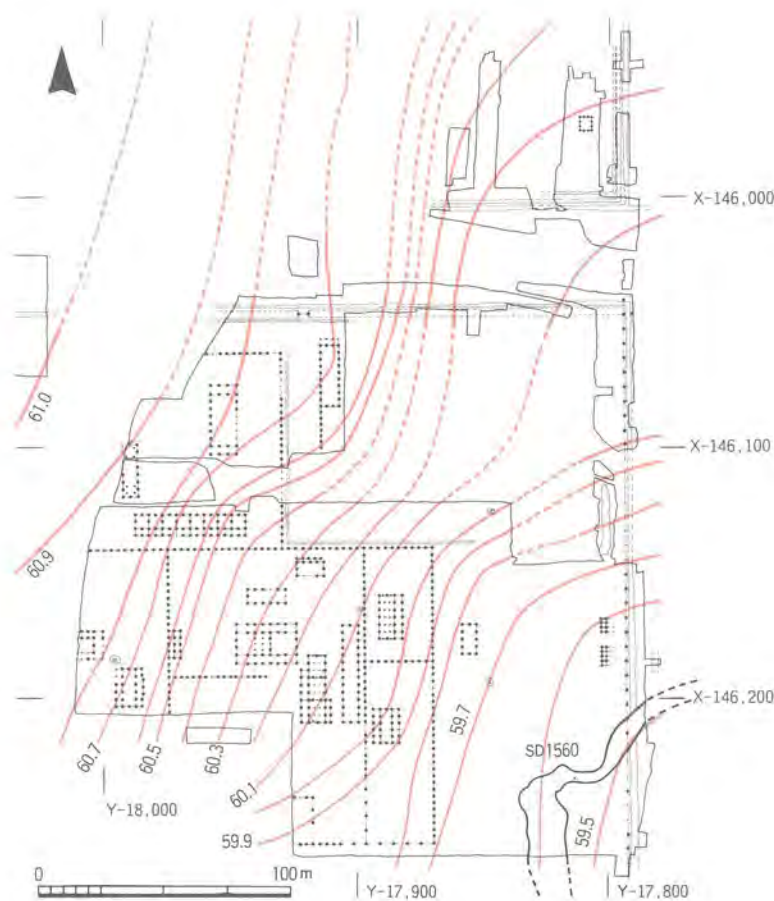


Fig. 18 平城京造営時の地形復原 1 : 3000

B 土層と遺構の相対年代

i 土 層

調査地の土層は、対象面積が広く、場所によって若干の差異はあるが、盛土を別にして、基本的には上から、水田耕土（約20cm）とその床土（10～20cm）、灰褐色砂質土、暗灰色土、暗灰褐色粘質土、暗灰黄色粘質土、地山の順になる。

灰褐色砂質土は平安時代末頃の遺物を含む層である（上層遺物包含層）。三条二坊一・二・七・八坪ではほぼ全体にあり、とくに七坪では中央部から東と南に次第に厚くなり、東辺では厚さ20cmになる。二条二坊五坪付近では、中央部がなく、南辺近くで厚さ10～15cmほどが残る。灰褐色砂質土面で検出した遺構には、土坑や耕作作用の細溝などがあるが、建物としてまとまるものはない。

暗灰色土は奈良時代末頃ないしは平安時代初め頃までの遺物を含む層である（下層遺物包含層）。調査区によって土に若干の差異があり、一時期に形成されたものではないようだが、層を分けて発掘することは困難であった。三条二坊一・八坪では耕作等によって削平され、窪みなどに部分的に残る程度であるが、二坪の南半や八坪の南辺および七坪の北・西辺では厚さが10cm前後、七坪中央部から東南部が20cm前後ある。二条二坊五坪付近では中央部から東および南で部分的に残る。

暗灰色土面で検出した遺構には、土坑の他に、溝や建物がある。溝は三条二坊一坪の北面築地の南雨落溝の上層溝SD5094B、一・八坪間の坪境小路両側溝の上層溝SD4901B・4911B、二・七坪間の坪境小路両側溝の上層溝SD4229B・SD4231B、七・八坪間の坪境小路両側溝の上層溝SD4359B・4361B、七・八坪の南北大溝SD4165、建物は一坪のSB5085、七坪のSB4100・4170、八坪のSB4791などである。後述するように、これらの遺構はD期以降に比定でき、一部の暗灰色土の堆積はC期末頃からはじまったと推測できる。

暗灰褐色粘質土は平城京造営に伴う整地土である。三条二坊一・八坪や二坪北半ではほとんどなく、二坪中央部および八坪南辺以南から次第に厚くなること、七坪では整地は主に西から東にむかって行なわれていること、二条二坊五坪では地山（砂地）の凹みに残る程度であることなどが判明している。

奈良時代の遺構の大半は、この整地土面や、次述する7世紀頃の整地土、もしくは地山面で検出した。地山面で検出した遺構には、第178次調査区のSD4150の前身となる、弥生・古墳時代の遺物を含む旧河川SD1560や小さな旧流路、第193次調査区古墳時代（5世紀後半）の掘立柱建物SB5203や斜行溝（濠）SD5230と、第193B・D区の奈良時代の建物SB4710・4740、第186次西区の奈良時代の建物SB4631・4632、第193次B区のSB5201・5202などがある。後者の奈良時代の建物群のうち、SB4631・4632・5201・5202などは整地土がなく整地以前か否か判断できないが、SB4710・4740は整地土（淡黄灰褐色粘質土）がこの上を覆っており、整地に時期差があったことがわかる。整地下で検出した奈良時代の遺構は他になく、部分的な第2次整地と考えている。

暗灰黄色粘質土やこれに対応すると思われる灰褐色粘質土は、第184次調査区の西半部から

第178次調査区の北西部にある、厚さ約10～20cmの整地土である。調査時点ではこれも平城京造営時の整地土とみていたが、第184次調査区で一部を検出した7世紀頃の居館の濠と推定する東西および南北方向の大溝（SD4411・4412）が暗灰黄色ないしは灰褐色粘質土をベースとしている。したがって、これらの土は居館造営に伴う整地土と本報告では考えている。この濠の上半部は地山に近い黄褐色粘質土などで埋め戻しており、さらにこの上を奈良時代の整地土が覆う。なお、第193次B区で検出した、古墳時代（5世紀後半）の居館濠と考えるSD5230や掘立柱建物SB5203は地山上で検出した。

ii 遺構の相対年代

遺構は、土層や重複による先後関係、配置計画、出土遺物から、後述するように奈良時代をA～Gの7時期に区分している。ここでは、重複による先後関係に重点をおいて、遺構の相対年代について述べる。遺構は数が多く、しかも複雑に重複しており、三条二坊一・二・七・八坪と二条二坊五坪とを分け、溝、堀、建物、土坑の順に記述する。

a 三条二坊一・二・七・八坪の遺構

溝（Tab. 3） 遺構の相対年代を決める大きな基準となるのは、溝と堀であり、まず溝からみる。一・二坪間をのぞく、一・八坪、二・七坪、七・八坪各間の坪境小路両側溝SD4229・4231・4359・4361・4909・4911は上下2層ある。しかも、下層溝（SD4231A）より古く上層溝（SD4231B）より新しい建物SB4220や堀SA4491があることから、側溝の上下層は小路がない時期においてその前後の2時期になる。さらに、後述するように、下層溝より古い建物や堀は3時期あってA～C期、下層溝と上層溝がD期とF期以降、この間の時期がE期に比定できる。一・二坪間の小路両側溝SD4589・4591は、2時期には明瞭に区分できず、二坪東面築地の西雨落溝SD5258より新しいことからF期以降になる。

2時期ある
小路側溝東二坊々間
路西側溝の
上限と下限

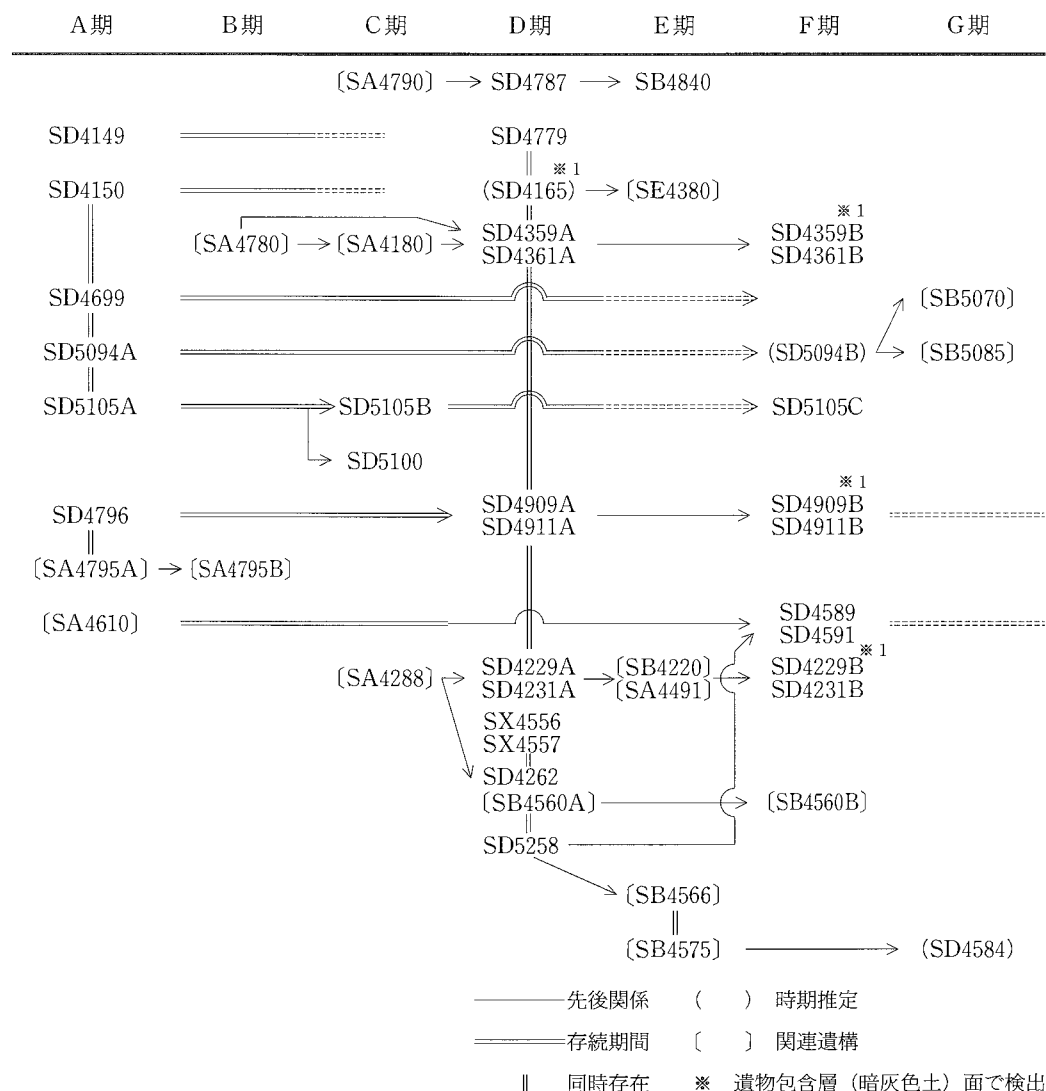
東二坊々間路西側溝SD4699と東側溝SD4701は、奈良時代当初（A期）に開削され、東二坊々間路上の旧河川SD1560は埋め戻す。坪境小路側溝SD4359A・4361AはSD4699に注ぐが、SD4359B・4361Bは西側溝の埋土を横切って東二坊々間路東側溝SD4701に注ぐ。したがって、SD4699の廃絶はF期より前になる。SD4699の北方では、二条大路南側溝SD5105、一・八坪の北面築地SA5095の南雨落溝SD5094がSD4699に注ぐ。SD5105・5094の堆積土は少なくとも2層はあり、SD5105A→濠状遺構SD5100とSD5105B（C期）→SD5105C、SD5094A→SD5094B→SB5070・5085（F期）となり、SD5105BはE期に埋め戻したSD4699を横切ってSD4701に注ぎ、SD5105Cは少なくとも一坪付近ではG期直前に廃絶する。七坪東南部の旧河川を掘り直したSD4150は、SD4699から導水するが出土遺物からC期には廃絶しており、以後の遺構のベースとなる。

D期の標準

七坪を分割する道路SF4290の北側溝SD4262は、二・七坪間の坪境小路東側溝SD4229Aと一連であり、二坪の東面築地の門SB4560は2時期あって、古いSB4560Aと暗渠SX4555A・5556・5557は二・七坪間の坪境小路西側溝SD4231Aと一連であり、ともにD期である（SB4560BとSX4555BはF・G期）。また、二坪東面築地の西雨落溝SD5258は、一・二坪間の坪境小路両側溝のSD4589B・4591B（F期以降）より古く、後述するようにE期と確定できる建物SB4566

より古いことからD期になる。

七坪の南北大溝SD4165は、七・八坪間の坪境小路南側溝SD4359Aと一連であり、後述する井戸SE4380（E期）より古いことからD期に限定できる。これと位置が一致する八坪の南北大溝SD4779も、D期になる可能性が高い。八坪のSD4787はC期の堀SA4790より新しく、出土遺物からD期には埋っていたと判断できる。七坪のSD4433はSD4359Bと一連でF期以降、



Tab.3 遺構の相互関係一覧1（三条二坊 溝）

二坪の南北大溝SD4584は後述するようにF期と確定できる建物SB4575より新しく、G期になる。なお、D期になる七坪内の方形区画溝については、建物の項で触れる。

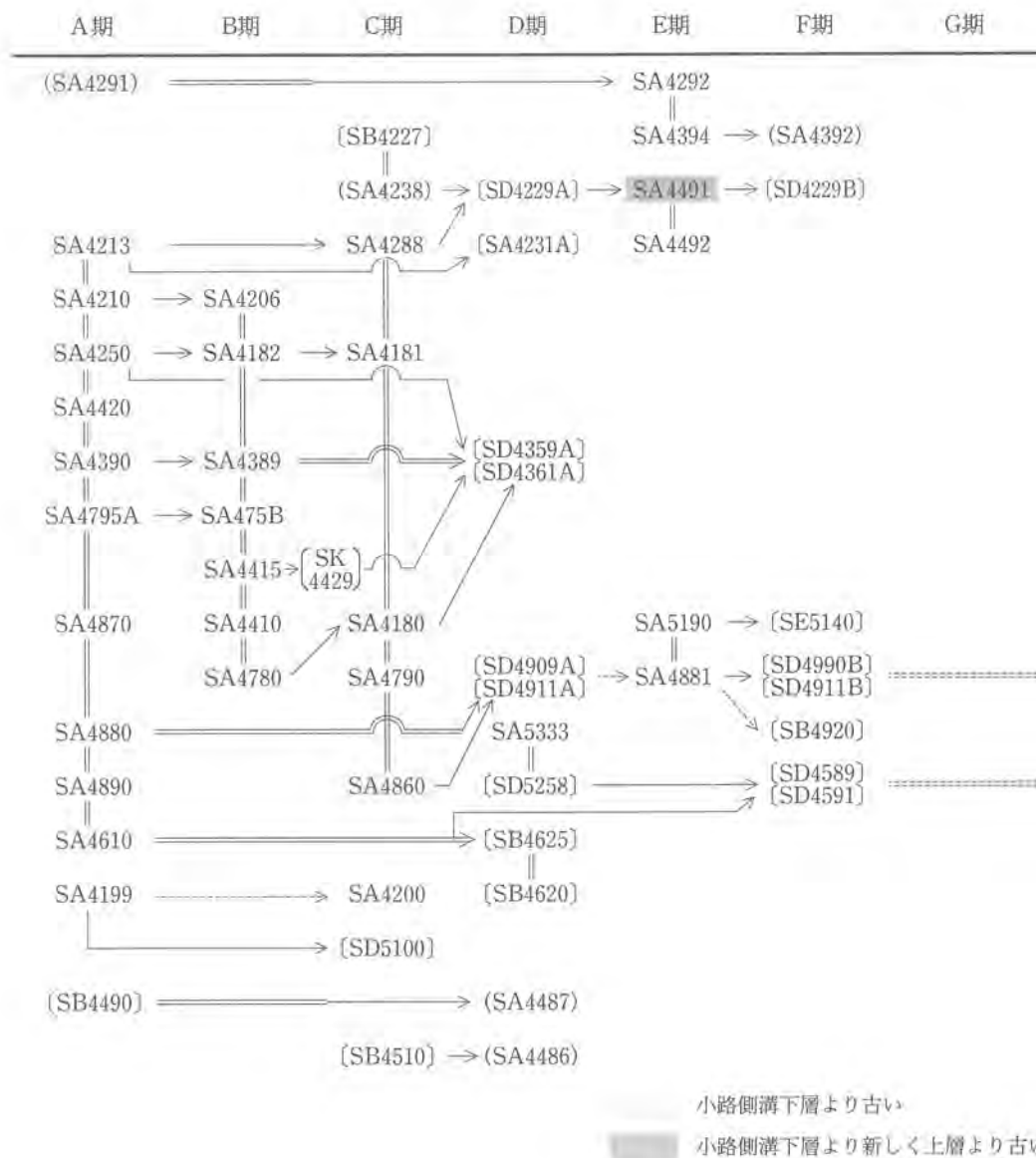
堀（Tab. 4） 堀では、敷地内部をいくつかのブロックに仕切る区画堀が、相対年代の決め手になる。D期の坪境小路下層溝より古い区画堀は、3時期の重複があり、先後関係からSA4210・4213・4250・4390・4420・4610・4795A・4870・4880・4890（A期）→SA4182・4206・4389・4410・4415・4780・4795B（B期）→SA4180・4181・4288・4860（C期）となる。

C期以前の掘立柱堀

区画の構成上から、A期のSA4610・4870・4880・4890はC期まで、B期のSA4389はC期まで存続する。八坪西辺のSA4860（C期）に近接するSA4961は、一・八坪間の坪境小路SD4909B（F期以降）より古いことしかわからないが、配置計画や出土遺物からA期に比定している。

比較的規模の小さな堀では、二・七坪間の東西堀SA4238が小路西側溝SD4229Aよりも古く、C期以前となる（C期に比定）。同じく二・七坪間の東西堀SA4291は、小路両側溝SD4229A・4231Aより古く、SA4292より古い（前者をA・B期、後者をE期に比定）。七坪北東部のL字状の堀SA4491・4492は、小路側溝SD4229Aより新しく、SD4229Bより古いことからE期になる。一・八坪にまたがるL字状の堀SA4881・5190は、坪境小路側溝SD4911Bより古く、後述するようにF期の井戸SE5140より古い。下層溝との関係はSD4909位置に柱穴が残らず不明だが、一・八坪にまたがり、しかもA～C期に存続する遺構（SA4870、SB4800・4820）と重複することから、一・八坪を共用するA～C・E期のうちでE期以外に比定できない。二坪部分のSA

D期以降の堀立柱堀



Tab.4 遺構の相互関係一覧 2 (三条二坊 堀)

4620は、建物SB4625と一連であり、SB4625がC期まで存続するSA4610より新しいことから、D期以降となる（D期に比定）。七坪の北辺を限る掘立柱塀SA4486は、C期の建物SB4510より新しく、七坪の東辺を限る掘立柱塀SA4487は、B期まで存続する建物SB4490より新しい（いずれもD期に比定）。

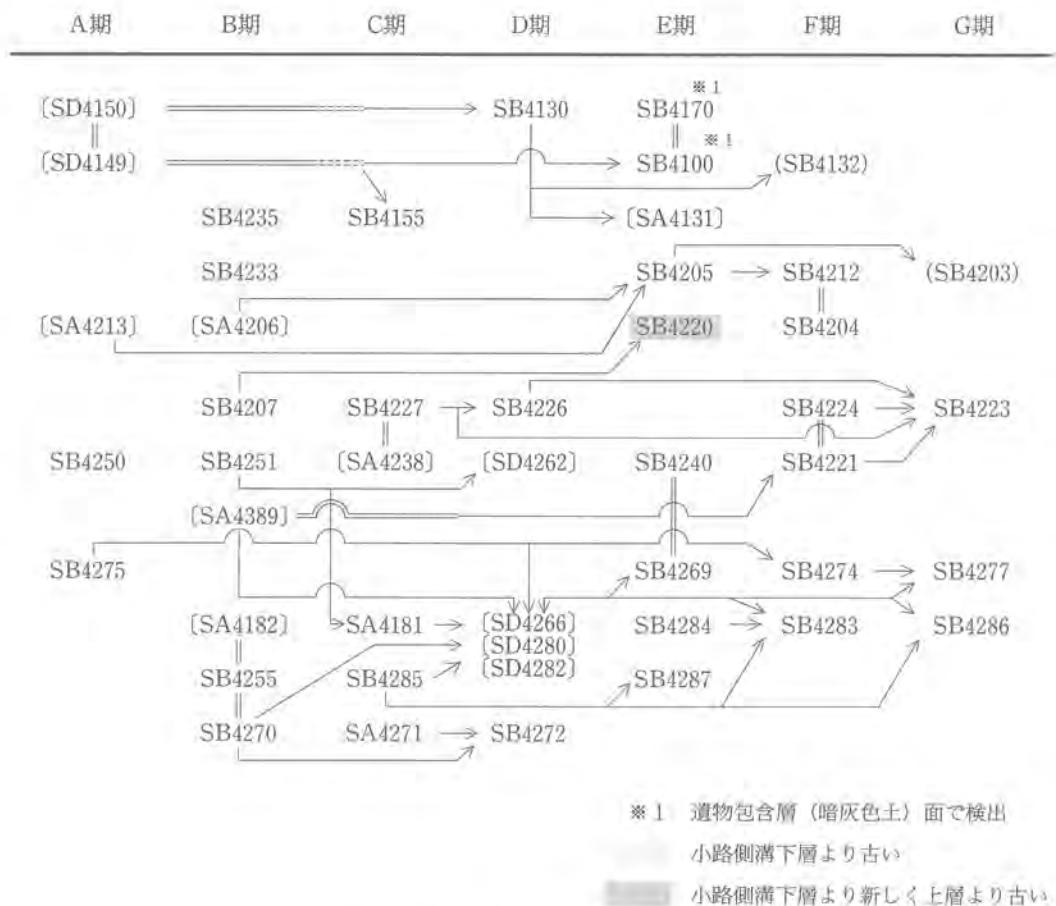
七・八坪の東限の掘立柱塀SA4199は、C期の濠状遺構SD5100より古い。C期以降には東限を築地SA4200に改めたと考えられることから、SA4199はA・B期に比定できる。

建物（Tab. 5～9） 建物については、数が多く煩雑になるので、七坪南半（第178次調査区）、七坪北半（第184次、第193A・D調査区）、八坪、二坪、一坪の順に区分して記述する。

七坪南半では、坪境小路側溝の下層溝より古い建物にSB4235・4233があり、C期以前となる（ともにB期に比定）。A期の塀SA4250より新しく、C期の塀SA4181より古いSB4251が、B期になる。SB4227はSA4238と一連であり、C期に比定した。SB4220は小路側溝の上下層間で検出したE期の基準遺構である。

七坪南半部の建物

七坪西辺中央にある方形区画溝SD4266・4280・4282は、C期の塀SA4181やC期まで存続する塀SA4389より新しく、しかもSD4262やこれとつながる坪境小路SD4229Bと共存すると考えられることから、D期の基準遺構になる。これより古い建物はSB4275・4285とSB4270がある。SB4270はB期の塀SA4182と接続するSB4255と柱筋が揃うことからB期、SB4285は後述する



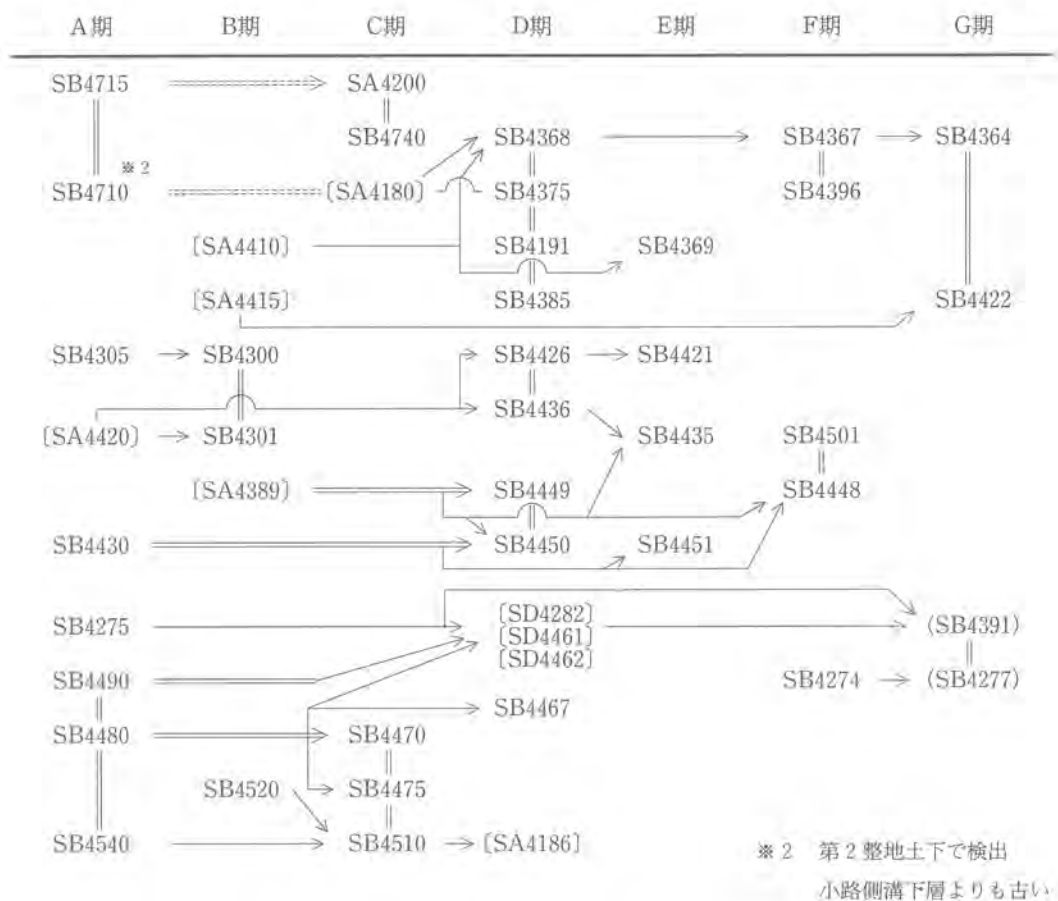
Tab.5 遺構の相互関係一覧 3（三条二坊 七坪南半建物）

ようにSB4510と柱筋が揃うことからC期に比定できる (SB4275はA期に比定)。SB4272はSB4270より新しく、SB4271はSB4272より古い。SB4271は後述するSB4300と中軸が揃いC期に比定できる。SB4272はD期に比定している。

D期以降の
建 物

方形区画溝SD4266・4280・4282より新しい遺構は、3時期の重複がある。七坪の西辺では、SB4286との先後関係が不明だが、SB4284→SB4283が成立する。この建物群の南ではSB4226→SB4224=SB4221→SB4223が成立し、SB4221・4224とSB4283が建物の中軸線を揃えて計画されていることから、SB4284 (E期) →SB4221・4224・4283 (F期) →SB4223 (G期) と変遷したと考えることができる (SB4226はD期、SB4286はG期に比定)。七坪の中央部では、SB4269が方形区画溝SD4266より新しく、これと西妻を揃えてたつSB4205・4240とが同一時期になる。SB4205より新しい建物が3棟 (SB4203・4204・4212) あり、しかも近接することから2時期 (F・G期) になると考え、SB4205・4240・4269をE期に比定している。SB4207はSB4205より古い (B期に比定)。SB4274は上述したC期のSB4275より新しく、SB4277はSB4274より新しい。SB4277は七坪北半の項で触れるようにG期に比定あしている (SB4274はF期)。

C期に埋め戻した、蛇行溝SD4150上になつたSB4130・4132は、C期以降になる。前者はD期、後者はF期に比定している。SB4100・4155は蛇行溝と一連のSD4149より新しい。SB4100は、これと柱筋が揃うSB4170とともに、遺物包含層である暗灰色土面で検出しておりE期に比定。SB4155は、この棟通りと柱筋が揃う堀SA4159がD期のSD4162より古いことから、C期以前と



Tab.6 遺構の相互関係一覧 4 (三条二坊 七坪北半建物)

なる（C期に比定）。

七坪北半では、坪境小路側溝の下層溝より古い建物にSB4460・4480・4490・4510・4520・4540・4740があり、C期以前になる。SB4540・4520→SB4510が成立し、SB4510をC期、SB4540をA期、SB4520をB期に比定している。SB4480とSB4490は南妻が揃い、SB4540とも柱筋が揃うことから同一時期の建物になる。また、SB4480上にはSB4510と柱筋を揃える新しいSB4470・4475が建つことや出土遺物から、SB4480・4490（A・B期）→SB4470・4475・4510（C期）が成立する。

七坪北半部の建物

SB4740は、敷地東面築地SA4200の門であり、第2次整地下で検出した。同じく第2次整地下で検出したSB4710やこれと柱筋が揃うSB6715も古くなる。後二者はC期の築地SA4200に近接し共存しがたいこともA・B期であることを裏付ける。SB4300とSB4301は柱筋が揃い一体の建物（双堂）である。ともにA期の南北塀SA4250とSA4390の中央に位置するが、SB4301はSA4250とSA4389とを結ぶ東西塀SA4420より新しいことから、SA4420を廃した後になる（B・C期に比定）。A期のSA4250・4390・4420・4795Aで囲まれる空間に建つSB4430はA期、SA4250をB期になって西のSA4415に改めた時期に対応するSB4400はB期であり、C期まで存続したと考えている。なお、SB4305はA期のSB4300やSA4410より古い。これらについて本報告では、A期の造営においてSB4300やSA4250がつくられるまでの仮設の建物か、平城京造営直前頃の建物と考えている。

C期まで存続する塀より新しい建物は、位置の重複から少なくとも4時期がある。ただし、建物は小規模なものが多く、数の割に先後関係の判明する例は少ない。手掛りは、SB4426→SB4421の先後関係と、これらに位置が重複するSB4422・4423、SB4368→SB4367→SB4364の先後関係、およびこれらに重なるSB4369の解釈にある。

D期以降の建物

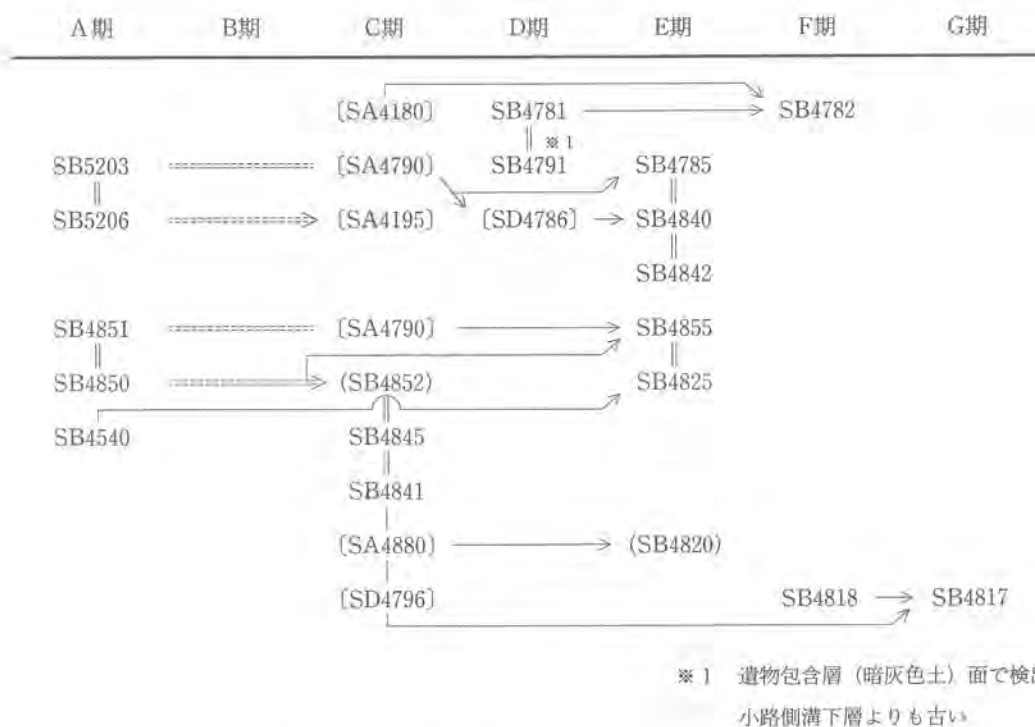
後述するように配置計画や出土遺物から、これらのうちで最も時期の古いSB4368・4426・4436はSB4440・4449・4450など同一のD期に、SB4426より新しいSB4421はSB4435・4481などと同一時期であり、SB4481が塀SA4491・4492（E期）と同一時期であることからE期に比定している。SB4368（D期）より新しく、出土遺物からE期になるSB4369とも共存しないSB4367と、これより新しいSB4364は各々F期とG期になる。SB4378はC期の塀SA4180より新しく、SB4451はC期まで存続する塀SA4389より新しい。ともに七・八坪間の坪境小路南側溝近くに位置し、七・八坪を共用するA～C・E期のうちでE期とみるのが穏当であろうが、奈良時代末頃には築地がなかったとすれば、F・G期に比定できなくもない。

なお、西南部の第178次調査区との境付近の建物SB4391は、第178次調査区のSB4277と柱筋が揃いG期に、SB4277より古いSB4274はF期に比定している。

八坪では、重複による先後関係からA～C期の建物が確定できないが、C期以降存続する東面築地SA4195と重複するSB5203・5206がA・B期になる。また、E期と確定できるSB4855より古いSB4850はC期以前になる（SB4850はA・B期、SB4852はC期に比定）。SB4855をE期とする根拠は、C期の塀SA4790より新しく、しかも一・八坪間の坪境小路東側溝に近接し、一・八坪を共用したA～C・E期のうちE期以外にないことによる。SB4855と柱筋を揃え、七・八坪間の北側溝に近接するSB4825も、同様の理由からE期に比定できる。

八坪の建物

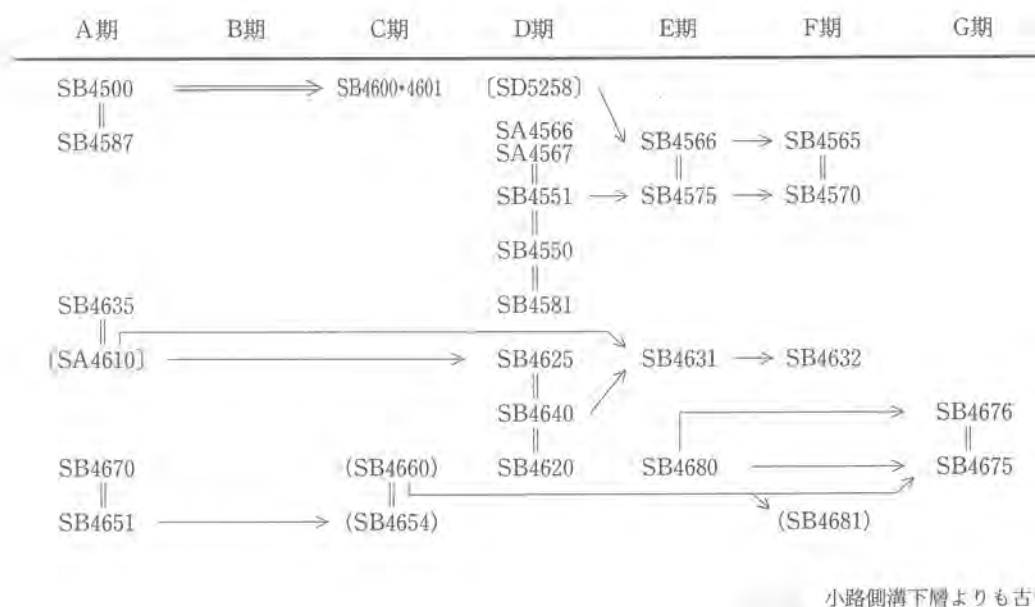
南北大溝SD4786は、C期の塀SA4790より新しく、出土遺物からD期と確定できる。SD4786



Tab.7 遺構の相互関係一覧 5（三条二坊 八坪建物）

より新しいSB4840は柱筋が揃うSB4785・4842と同一時期、SB4785より古いSB4791はSB4781と柱筋が揃い同一時期であり、SB4782はSB4781より新しい。したがって、SB4791・4781はD期以前となり（D期に比定）、SB4785・4840・4842とSB4782はE期以後となる（前者三者はE期、後者はF期に比定）。

C期まで存続するSA4880とこの北雨落溝SD4796より新しい建物に、SB4817・4820・4824

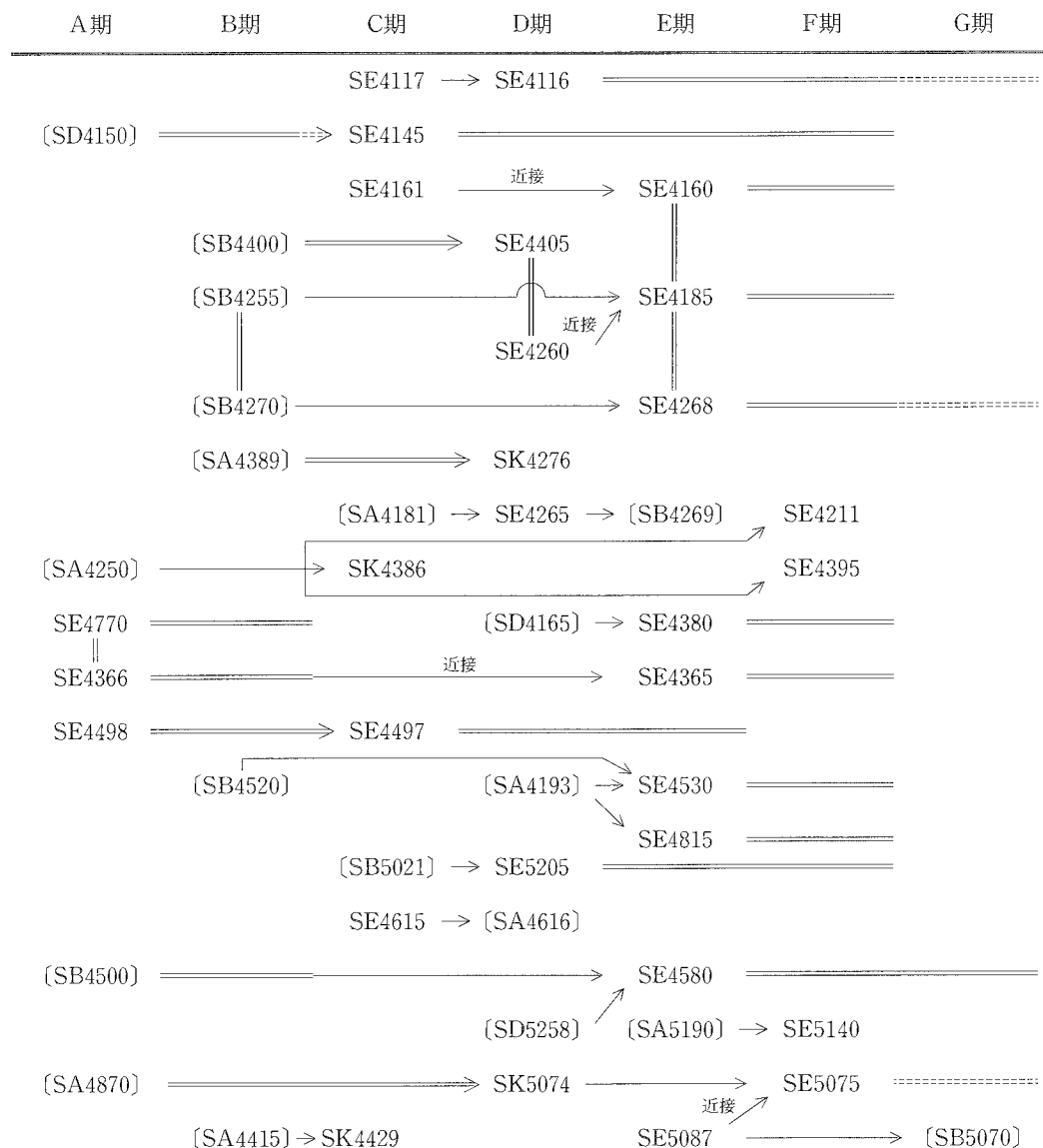


Tab.8 遺構の相互関係一覧 6（三条二坊 二坪建物）

4920と柱筋が揃い同一時期と考えるSB4900よりSB4895が新しい。したがって、これらをF期とG期に比定することができる（SA5190より新しいSB5170もF期に比定）。SB5131→SB5130・5132、SB4990→SB4871の先後関係も基準の一つである。SB4871はSB4920・5000と柱筋が揃いF期に比定でき、SB4990はSB5130・5133・5050・5060と柱筋が揃いD期以前となる。後者の時期については、先行するSB5131が出土遺物からD期に位置づけられることによって、E期に比定できる。SB5075・5085は北面築地の南雨落溝SD5094B廃絶後の建物であり、しかも奈良時代末頃の井戸SE5087より新しいことから、G期に比定しうる。

井戸・土坑（Tab. 10） 溝、堀、建物との関係でC期以前に遡る井戸は、SB4620にとりつく堀SA4616より古いSE4615であり、C期に比定している。他に出土遺物から、SE4366・4470・4498はA～B期、SE4340・4497はA～E期、SE4155はC～F期、SE4161はC・D期に存続したことがわかる。A期に開削されたSE4770とSE4366は、方位にそって南北に並び、C期に開削されたSE4161・4340および4145もほぼ南北に並び、井戸の設置にも計画性があったこと

井戸設置の
計画性



Tab. 10 遺構の相互関係一覧 8（三条二坊 井戸・土坑）

を知りうる。SE4117は、出土遺物からC期に開削され、この時期で廃絶する。

次にD期以後とわかる井戸についてみることにする。C期まで存続する堀SA4181より新しく、E期と確定できる建物より古いSE4265は、D期に始まりD期に終る。C期のSB4440より新しいSE4405は、これと計画性をもって配置されたSE4260が出土遺物によってD期に廃絶し、さらに近接してSE4185がE期以降存続することから、D期に比定できる。出土遺物も古く、この見解にあう。同じくC期の堀SA4389より新しいSE4276は、上述のSE4185と計画性をもつSE4268が近接してE期以降存続することから、D期に比定できる。SE4185・4268とSE4160はほぼ等間隔で東西に並ぶ。出土遺物からE期に開削され、少なくともF期まで存続する。SE4365は、出土遺物から開削はE期になり、少なくともF期まで存続する。SE4117を改作したSE4116はD期以降で、少なくともF期まで存続する。SE4211・4395は出土遺物からF期になる。

D期以降の
井戸

SE4380は、D期のSD4165より新しく、出土遺物からみてE期以降であり、F期まで存続する。SE4815・4530は、七・八坪間の坪境小路の北側溝近くにあり、遺物からみてもE期になる。D期のSD5258より新しいSE4580は、年輪年代測定によって、井戸枠の伐材年代が767年前後と判明している。出土遺物からG期まで存続する。SE5140は、E期の堀SA5190より新しく、F期以降となる。SE5075は、D期の土坑SK5074より新しく、少なくともF期まで存続する。開削時期は出土遺物からE期かF期になるが、近接するSE5087がE期に存続しており、F期になる可能性が高い。

井戸枠の
年輪年代

b 二条二坊五坪の遺構

溝 (Tab. 11) 五坪南辺の二条大路北側溝SD5240は4時期がある。最古のSD5240Aは、c期の濠状遺構SD5300以前の時期(a・b期)であり、北からくる二坊々間路西側溝SD5021を合わせ、東二坊々間路を横切って東側溝に注ぐ。次のSD5240Bの時期には、東二坊々間路を横断する部分を埋め戻し、新たに二条大路上に南北溝を掘って南の西側溝SD4699とつなぐ。五坪の南門SB5320前は南に大きく張出し、橋SX5305がかかる。SD5240BはSD5300(c期)と一時併存しc期以後も存続するが、次のSD5240CはSD4699を埋め戻したのち、確実にはf期から東二坊々間路を横切って再び東二坊々間路東側溝に注ぐ。二坊々間路上では橋SX5235がかかる。SD5310は五坪南門をはさんでSD5300と対照位置にあり、SD5300と共存する。SD5251は後述するf期の建物SB5250より新しく、g期のSB5250とも共存しないことから平安時代となる。

二条大路
側溝の変遷

五坪東面築地SA5025の西雨落溝は、斜行溝SX5034がSX5030と一連であることを介して、SD5021→SD5032→SX5035→SD5033が成立する。SX5035はSD5032を部分的に改修したもので、東二坊々間路西側溝SD5021から斜行溝SX5034で水を引く便所遺構と推定している。平城宮Ⅲの土器が出土しており、廃絶はc期以降になる(SD5021はa～c期、SD5032はd期、SX5035はd～e期、SD5033はf・g期に比定)。五坪南面築地SA5245の北雨落溝は、SD5244と一体の南北溝SD5251がSD5246より新しいことから、SD5246→SD5244が成立する。南門はd期に棟門SB5315Bから四脚門SB5320に改め、この折に雨落溝も北のSD5335に付け替えている。出土遺物からSB5320はe期まで存続したことが明らかであり、SD5246(a～c期)→SD5335(d・e期)→SD5244・5251(f期以降)となる。

築地雨落溝
の変遷

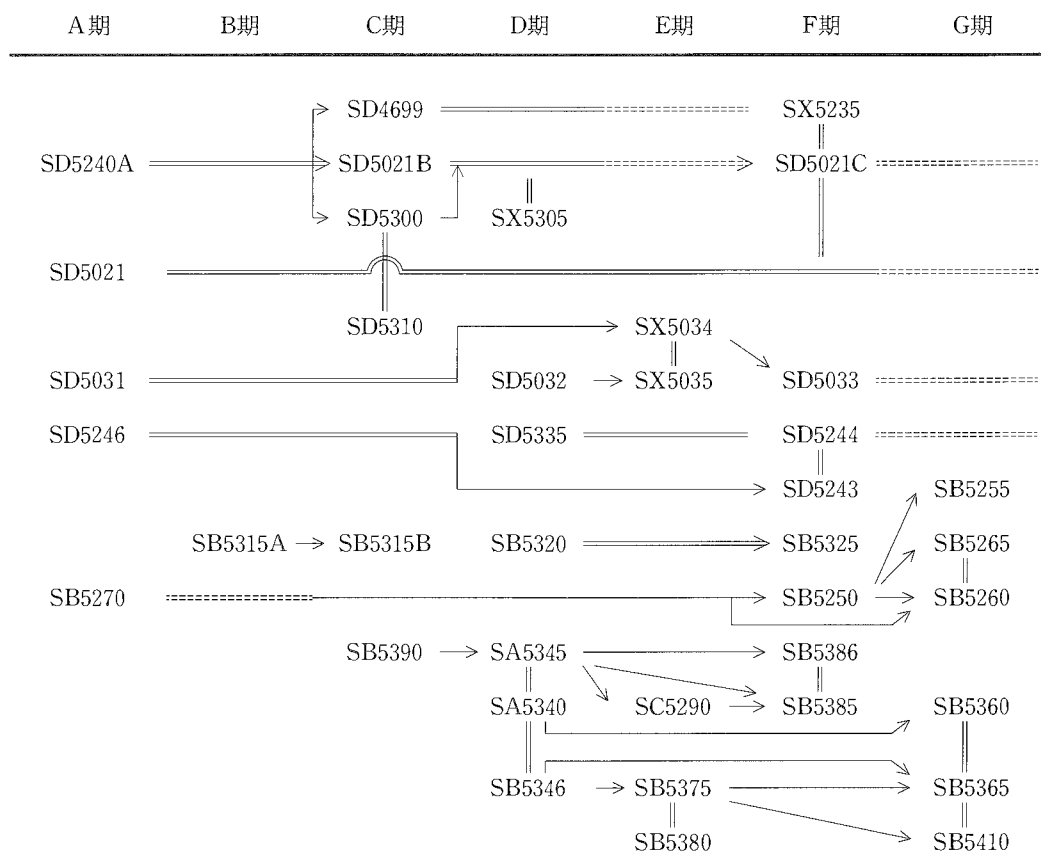
門 (Tab. 11) 南門は棟門SB5315を掘立柱(SB5315A)から礎石建ち(SB5315B)に改めてい

4 時期の門 する。出土遺物からそれぞれを b 期と c 期に比定した。四脚門SB5320は、これに伴う二条大路北側溝が c 期以降であり、柱穴の出土遺物から e 期頃に廃絶したことがわかる (d・e 期に比定)。棟門SB5325は、SB5320より新しく、f 期以降となる (f 期に比定)。

柱の礎板の
年輪年代

建物・塀 (Tab. 11) 五坪内では、東辺 (第198次B区) においてSB5270→SB5250→SB5260、中央部 (第204次) においてSB5390→SA5345→SC5290→SB5385の先後関係が成立する。東辺のSB5250は、柱の礎板が年輪年代測定によって761・762年間の伐採であり、出土遺物によっても f 期であることが確かである。SB5255・5260は g 期、SB5270は e 期以前 (a・b 期に比定) になる。SC5290は出土遺物から e・f 期頃に廃絶したことがわかるが、東辺部では f・g 期の遺構と併存せず、中央部では出土遺物から c 期頃までは存続していたSB5390やこれより新しいSA5345以後となり、e 期に比定できる。SB5390は c 期以前 (c 期に比定)、SA5345とこれと一連のSA5340およびSA5340と柱筋が揃うSB5346はSB5390以後となる (d 期に比定)。SA5345より新しいSB5375とこれと柱筋が揃うSB5380は、出土遺物からみて d 期以後だが、次述するように f・g 期の建物とは共存せず e 期に比定できる。

e 期のSC5290より新しいSB5385、およびこれと柱筋が揃うSB5386は f 期以降、e 期のSB5375より新しいSB5365・5410と、これらと柱筋が揃うSB5360は f 期以降である。両群の建物に重複による先後関係はないが、SB5385・5386が正殿と後殿となり、その前面に建物群の存在を考えがたいこと、SB5360・5365・5410は配置から g 期に設けられた井戸SE5335と一体になることなどから、前者の建物群が f 期、後者の建物群を g 期と考えている。



Tab. 11 遺構の相互関係一覧 9 (三条二坊 五坪)

2 条 坊 遺 構

検出した条坊遺構は、二条大路SF5110、東二坊々間路SF4700、東二坊々間西小路SF4230・4910、三条々間北小路SF4360・4596の計4条の道路の路面とその両側溝である。他に、二条大路路面の南北両脇に掘られた3条の濠状の遺構SD5100・5300・5310があるが、これも二条大路関連遺構として本節で記述する。また、二条大路上の建物についても触れる。

A 二条大路

二条大路SF5110は、調査区付近ではほぼ近鉄線路敷と重なっているが、線路北側で北側溝SD5240を延長74m、線路南側で南側溝SD5094を延長153mにわたって検出した。両側溝の心々距離は39.8～40.6m、路面敷の幅は約36.4mである。遺存している路面は、砂もしくは粘土からなる地山面であり、砂利敷等の舗装はなされていない。路面は、中央部がやや高く、両端の溝に向けて勾配をもつ。また、路面は地形に沿って東に1%弱の勾配で下がる。なお、二条大路上には小規模な建物SB5120および掘立柱塀SA5323がある。SB5120は桁行3間で梁間2間と推定できる。柱間は桁行が2.1m、梁間は1.8mである(Ph.69)。位置は五坪の南門SB5315の真南にあたり、これと同時期(C期)になる可能性が高い。SA5323は、後述する北濠状遺構SD5300の南肩沿いに作られた塀であり、五坪南門心から東へ6mのところから始まる。6間分あり、柱間は6尺である(Ph.70)。門をはさんだ西側にも同様の塀が存在する可能性が高い。門の両脇につくられた目隠し塀と考えておく。

二条大路上
の建物と塀

北側溝 北側溝SD5240は、最終段階(第1層)では幅1.1～2m、深さ0.3～0.5mの小さな溝と

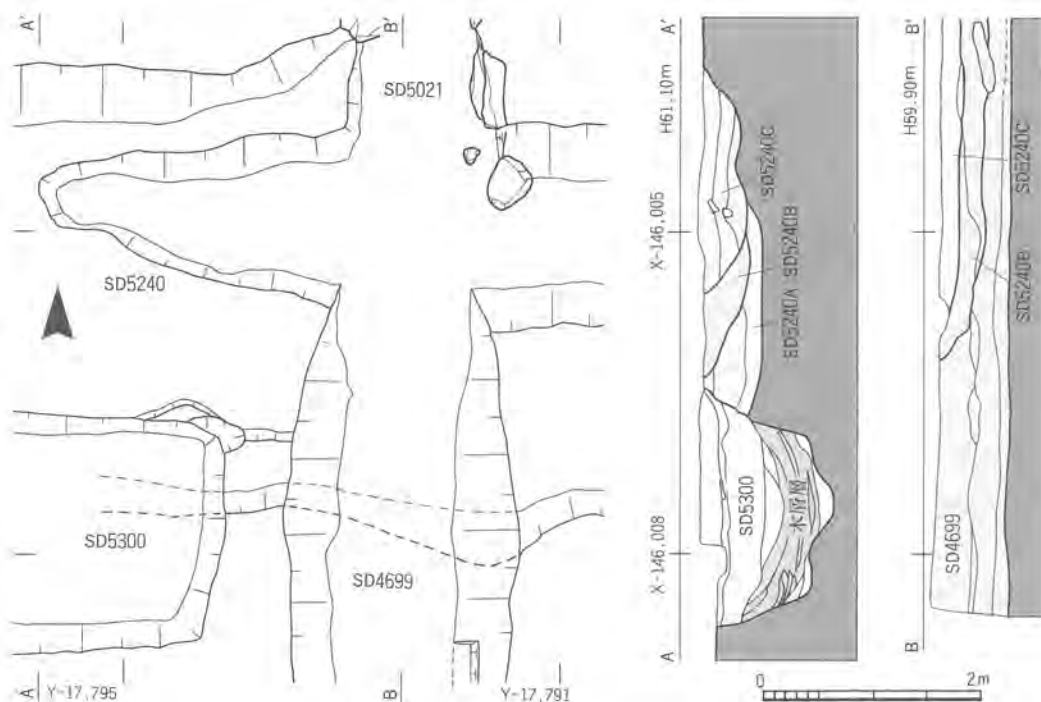


Fig. 19 SD4699・5021・5240・5300の先後関係 1:70

なるが、それ以前は幅3～7m、深さ0.6～0.8mの規模をもつ素掘り溝であった(Pl.32～34・37, Ph.28・30・63～65・70・71)。大きくは3回の変遷が認められる(Fig.19・20)。

北側溝の
変遷

北側溝は、当初は東二坊々間路を横切って東流(SD5240A)するが、のち東二坊々間路西側溝SD4699に注ぎ、二条大路を横切って南流する(SD5240B)。北に面する左京二条二坊五坪の南門が掘立柱から礎石建ちへ替わるのに伴い、門前でコ字形に南に迂回する。この迂回溝は門が廃絶した後、再び埋められやや南に蛇行する直線状の溝にもどり、東では二坊々間路を横切って東流する(SD5240C)。この時期には、二坊々間路上には橋SX5234がかかる(Pl.37, Ph.64・65)。SX5234は東二坊々間路西側溝心から3.4m東に橋心が位置する木橋で、幅は柱心で1.3mである。南で確認している東二坊々間路の路面幅が5.5～5.8mであり、橋はほぼ路面の中央に架かる。なお、迂回溝を埋める際に溝上面に瓦を敷き詰めるように落し込んでいた。

北側溝の
土層

北側溝の埋土は大きく4層に分かれる。上から暗灰褐色砂質土の第1層、黄灰色砂の第2層、暗灰色砂質土の第3層、暗灰色粘質土の第4層であり、各層から豊富な遺物が出土した(第IV章各節参照)。第4層がSD5240Aでa・b期、第3層がSD5240Bでc～e期、第1・2層がSD5240Cでf・g期になる(Fig.20, Tab.12)。

南側溝 南側溝SD5094は幅1.3～2.3m、深さ約0.4mの素掘り溝で東流する(Pl.28・30・31,

土層名	土器	軒瓦
第1層(SD5240C)	IV～V	I～IV
第2層(ⅡB)	Ⅲ新	Ⅱ～Ⅲ
第4層(ⅡA)	I～Ⅲ古	I～Ⅱ?

Tab.12 SD5240の土層と年代

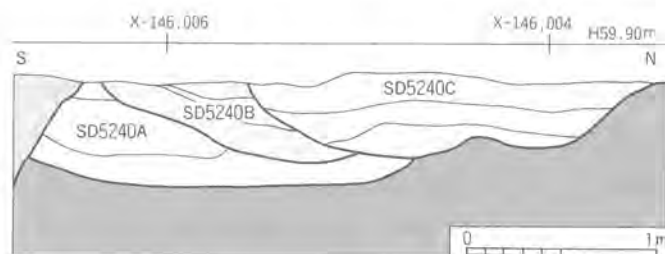


Fig.20 SD5240土層図 1:40

Ph.28～30・56・69)。埋土は、上から黄褐粘土混り暗灰色砂の第1層、黒灰褐色砂質土の第2層、黒灰褐色粘土の第3層の順である。遺物は多くない。下2層は東二坊々間路西側溝SD4699に注ぐ(SD5105A・B)。第1層はSD4699を横断し、東流する(SD5105C)。時期は奈良時代末期(F期)。
濠状遺構 二条大路の路面上には南北両側溝に接して掘られた大きな素掘り溝がある。いずれも断面が逆台形を呈し、これに流入する溝もここから流出する溝も発見されていない。南側のSD5100を南濠状遺構、北側のSD5300・5310を北濠状遺構と呼ぶこととする。堆積状況は南北きわめて近似し、出土遺物の内容や年代も相似ることから同一時期に属す可能性が高い。花粉分析によると、濠状遺構は比較的短い期間、6～7年で埋まったようである(補論4参照)。

この溝の性格については、防禦のための濠、築地用の土を取るための溝、ゴミ捨て用の溝などが考えられるが、現段階で断定することは困難である。

南濠状遺構
SD5100

南濠状遺構SD5100は幅2.6～3.5m、深さ0.9～1.2mであり、東二坊々間路西側溝西肩の西1.2mのところから始まり、西に一坪分120m延び南の4町宅地の北門SB5090の手前約3mで止まる。門の西にはのびない(Pl.28～30・33, Ph.56・62・69)。

北濠状遺構
SD5300 他

北濠状遺構SD5300・5310は幅2～2.7m、深さ1～1.3mである(Pl.32～34・37, Ph.28・30・63・64・70)。SD5300の東端は東二坊々間路西側溝西肩の西0.8mのところから始まり、西に

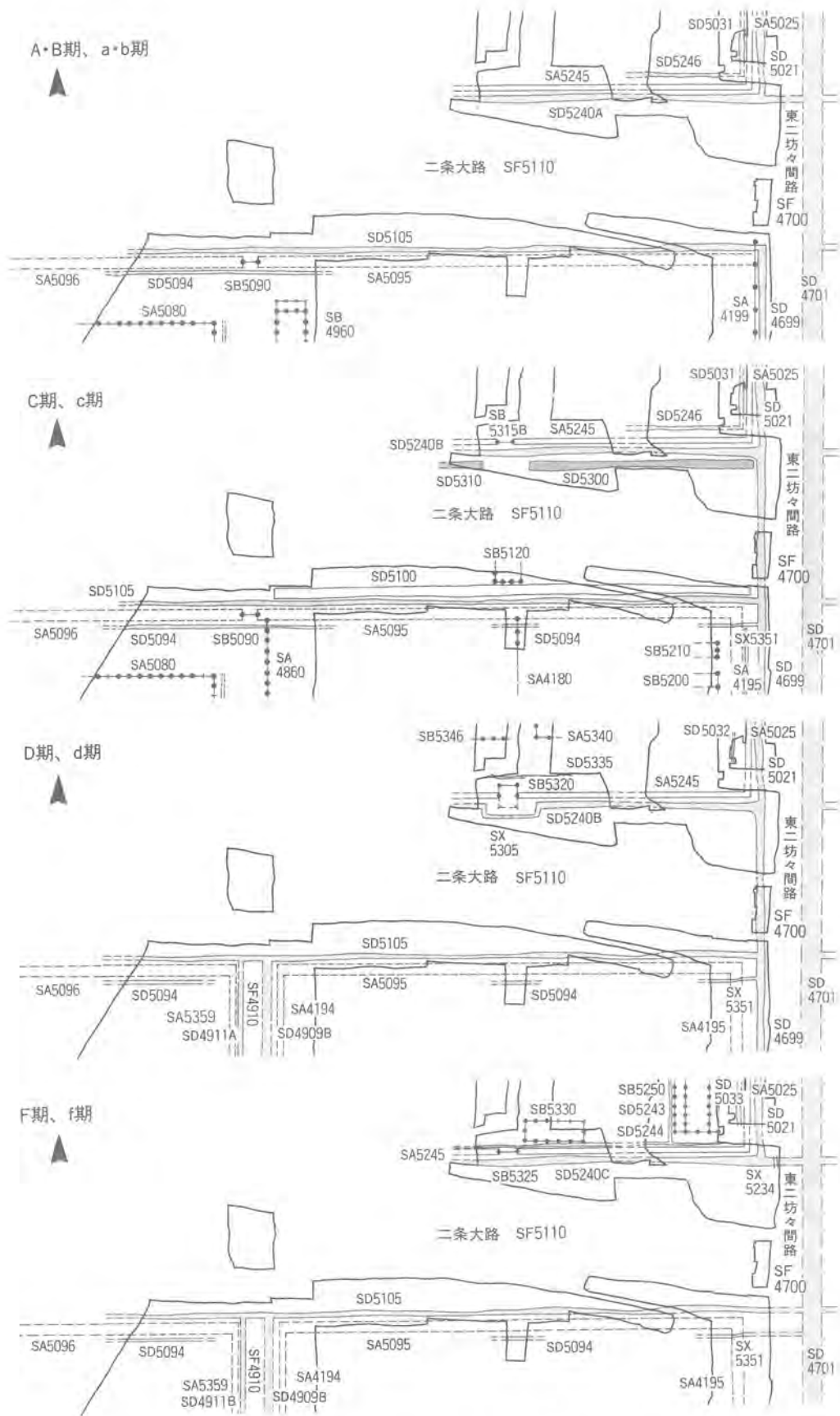


Fig. 21 二条大路・東二坊々間路側溝の変遷略図

56mつづき、二条二坊五坪南門の4m手前で終わる。SD5310は同じ南門の西4mから再び始まる(途切れる区間の延長は12m)。約6mまで確認した二条大路北側溝との関係は、SD5240Aより新しく、SD5240Bより古い。すなわち、c期となる(SD5240Bは当初は、SD5100と共存)。

堆積は両者とも4層に分かれる(Fig. 22, Tab. 13)。SD5100の土層は、上から暗灰褐色砂質土層、炭層、木屑層、黒灰色粘土(黒色砂)層、SD5300の土層は、上から黄褐色粘土混暗灰色粘質土層、炭・砂混暗灰色粘質土層(炭層)、木屑層、黄褐色砂質土混青灰色シルト層である。最上層は人為的な埋め立て土であり、瓦・土器を含むが、下の3層、とりわけ木屑層からは大量の木簡、土器、瓦、木製品等が出土した。下3層の年代はC(c)期であり、恭仁宮遷都(740年)以前の極めて限定される期間になる。

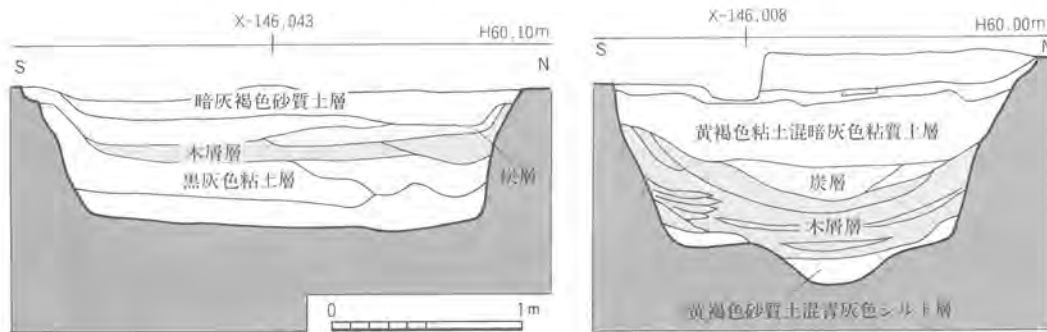


Fig. 22 SD5100 (左) とSD5300 (右) 土層図

SD5100土層名	土器	軒瓦	木簡	SD5300土層名	土器	軒瓦	木簡
暗灰褐色砂質土	Ⅲ～Ⅳ	Ⅱ-2～Ⅳ	/	黄褐色粘土混暗灰色粘質土		Ⅱ-2	/
炭層	Ⅲ古 天平10年墨書	Ⅱ-2	天平7～11年 (735～739)	炭・砂混暗灰色粘質土	Ⅲ古	Ⅱ-2	/
木屑層	Ⅲ古 天平12年墨書	Ⅱ-2	神亀2年～天平11年 (天平7・8年が主)	木屑層	Ⅲ古	Ⅱ-2	神亀5年(728) 天平3～8年 (天平7・8年が主)
黒灰色粘土	Ⅲ古	Ⅱ-2	天平7～9年	黄褐色砂質土混青灰色シルト			/

Tab. 13 SD5100・5300の土層と年代

B 東二坊々間路

西側溝SD4699・5021は所々の未発掘部分を含めて延長310mにわたって確認したが、東側溝SD4701は幅2mのトレンチで1ヵ所、それも西肩を確認したにすぎない。したがって、両側溝心々間距離は確認できなかった。東二坊々間路SF4700の路面幅は5.5～5.8mである。

西側溝 西側溝は、二条大路以南をSD4699、以北をSD5021としている。SD4699は、幅2～3m、深さ0.9～1.2mの素掘り溝であり、南流する(Pl. 3・8・16・28・32, Ph. 2・7・15・27・28・33・53～55・64・65)。堆積は、上から茶灰色土(最上層)、灰色粘土(上層)、暗灰色粘土(中層)、暗灰色砂(下層)の順である(Fig. 23)。下の3層が溝の流れに伴うもので、最上層は埋め立て土である。下3層(SD4699A)が二条大路南側溝SD5094A・Bとつながり、最上層を切ってSD5094Cが東流する。下の3層からは木簡をはじめとして多数の遺物が出土したが、そ

西側溝の土層

れによると西側溝は奈良時代中頃にはかなり埋っていたことが分かる (Tab. 14)。したがって、奈良時代後半以降は東側溝にすべての水が集められていたのであろう。

SD5021は幅2～2.4m、深さ0.9mである (Pl. 21・32・37, Ph. 28・30・64・65・67・68)。遺構の先後関係 (Fig. 19) から、当初は二条大路北側溝SD5240 Aに合流して東に流れること、のち二条大路上を横切って南のSD4699に合流すること、最後は再び二条大路SD5240 Cと合流して東に流れることが明らかである。A期には南辺部の両側を石で護岸する。堆積土は上から黒灰色砂質土 (最上層)、黒灰色粘質土 (上層)、灰色砂 (中層)、暗灰色粘土 (下層) の順である。

東側溝 東側溝は西肩を確認したにすぎないが、西側溝よりは大きく、幅4m以上、深さ1m以上である (Pl. 15)。第Ⅲ章1 Aの項で述べたように、東側溝は菰川を付け替えたものであり、この地域の基幹排水路の役割を果たしていたのであろう。

西側溝の
変遷

東側溝は
基幹排水路

土層名	土器	軒瓦
茶灰色土	Ⅲ新	Ⅳ
灰色粘土	Ⅲ古	Ⅲ
暗灰色粘土	Ⅱ	Ⅱ・Ⅱ
暗灰色砂	Ⅱ	Ⅰ・Ⅱ

Tab. 14 SD4699の土層と年代

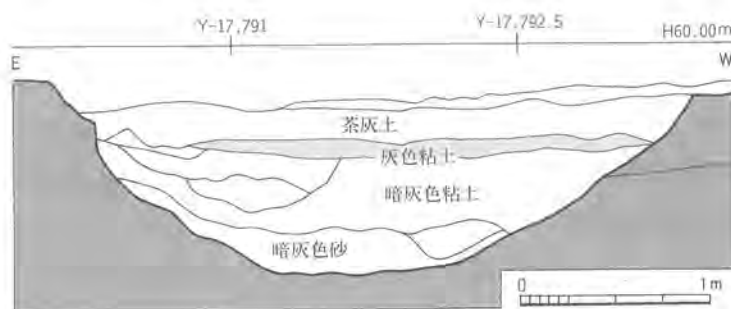


Fig. 23 SD4699土層図 1:40

C 坪境小路

東二坊々間西小路 一・八坪と二・七坪間にある小路SF4910・4230である (Pl. 7・12・20・25, Ph. 32・34・38・44・45・54)。側溝心々間距離は平均で7.1mであり、路面幅は約6mである。両側溝SD4229・4231とSD4909・4911の堆積はいずれも上下2層ある。しかも下層の堆積土を切る柱穴があり、このE期の柱穴を上層の堆積土が覆っていることから、この小路はD期につくられた後、廃されて建物がたち、F期に再びつくられたことが明らかとなった (第Ⅲ章2, Fig. 24参照)。東西両側溝は途中切れ切れであり、上部はある程度削平されていると考えられる。ちなみに残存している溝幅は0.7～1.1m、深さは0.1～0.4mであった。なお、両側溝の北延長上に位置する溝を二条大路路面上 (第193次C区) でも検出した。溝からの出土遺物がなく、奈良時代の遺構か否か確認できなかった。

側溝と柱穴
の先後関係

三条々間北小路 一・二坪と七・八坪間の小路SF4590・4360である (Pl. 16～23, Ph. 39・46・50)。東半の七・八坪間の小路側溝SD4359・4369は、東二坊々間西小路の状況と共通し、D期につくられ、一旦廃され、F期に再びつくられる。F期以降、両側溝は東端で1条となり、埋め戻した東二坊々間路西側溝上を東流する。合流部分には石の護岸がある (Ph. 54-1)。一方、西半の一・二坪間は、南北両側溝SD4589・4591が東二坊々間西小路に面する築地の雨落溝SD5258と切り合っており、雨落溝より新しい。このことから東半部とは異なり、奈良時代末期頃 (F期) にはじめてつくられたと考えられる。側溝心々間距離は6m前後、路面幅は平均で4.2mである。残存している南北両側溝の幅は0.8～2.6m、深さは0.1～0.4mである。

3 左京三条二坊の遺構

A はじめに

左京三条二坊地区には500を越える建物、塀、溝等の遺構が重複して営まれている。これらの遺構の併存関係やその変遷については、各年度の『平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(以下、『平城宮概報』)で順次報告し、1991年刊行の『平城京 長屋王邸宅と木簡』(以下、『長屋王概報』)で再検討の上、まとめて報告している。本報告書ではこれら既往の成果を参照しつつ、発掘遺構平面図、柱穴断割り図、出土遺物等を再度検討して変遷案をまとめた。

ここで明言しておくべきは、遺構の先後関係や併存関係を確認できる情報が極めて限られているという点である。一般的に遺構の変遷を決定する要素としては、柱穴などの切り合い関係、柱筋の揃い具合、柱間寸法、使用尺度、方位の振れ等があるが、この地区の遺構では使用尺度、方位の振れについては明らかに同時期と思われる遺構でも必ずしも統一的ではない。『長屋王概報』で提示している変遷図は、主要な建物はコ字形に並ぶであろうことや、大規模な建物が長屋王邸の時期にまとまるであろうことを一つの前提としている。本節ではこうした恣意を極力排除し、発掘調査に基づく遺構変遷決定のための諸要素によって確認できる遺構を素材として変遷骨格を組み立て、遺構の希薄な発掘区周辺部の遺構や小規模建物などの決定要素を持たない遺構は、別にまとめて報告することとした。なお、遺構の索引には別表5を利用されたい。

i 時期区分

左京三条二坊の遺構は、その重複の度合いや出土遺物の時期(別表3・4、Tab.3～10・12～7時期区分14)等から考えて、A期からG期までの7時期に区分することができる(Tab.15)。A期は平城遷都から養老年間頃(710～720年頃)、B期は天平初年まで(720年頃～729年)、C期は平城遷都頃

一・二・七・八坪 の時期区分	時期区分の推定年代	土 器	軒 瓦	紀年木簡
A 期	和銅3年 710 (養老4年 720)	平城宮Ⅰ・Ⅱ	Ⅰ	霊亀2年 716
B 期	天平元年 729	平城宮Ⅱ	Ⅱ-1	
C 期	天平17年 745	平城宮Ⅲ古 天平12年墨書	Ⅱ-2	天平11年 735
D 期	天平勝宝2年頃 750頃	平城宮Ⅲ新	Ⅲ-1	
E 期	750～760年代 (宝亀元年 770)	平城宮Ⅳ	Ⅲ-2・Ⅳ	
F 期	ほぼ770年代 8世紀末頃	平城宮Ⅴ	Ⅴ	宝亀7年 776
G 期	8世紀末頃～ 9世紀後半	平城宮Ⅴ～ SD650B相当		

Tab.15 遺構の時期区分と土器・軒瓦編年の対照1

まで(729~745年頃)、D期は天平勝宝2年頃まで(745~750年頃)、E期は宝亀元年以前(750~760年代)、F期は奈良時代末まで(ほぼ770年代)、G期は奈良時代末~平安時代初め頃までである。

A・B期は長屋王の邸宅であった時期にあたり、4町が一体となって使われている。C期は長屋王自尽の後で、長屋王邸時代の区画は残るが、建物の多くは建て替えられた時期。D期は短い期間であるが、4町が2町と1町以下の敷地に分割される。E期は坪境小路が廃されて再び4町の敷地となる時期であり、F・G期は再度分割されて1町もしくはそれ以下の単位になり、特に一・二坪に規模の大きな建物が集まる時期である。

ii 区画の変遷

左京三条二坊地区は、上述のように敷地規模が順次変化するとともに、4町占地の時期にはその地区内を区画する掘立柱塀が、いわば内郭と外郭を形成する形で設けられ、以下に、これが少しずつ改変される。以下に、これらの敷地全体に関わる点についての変遷とその根拠を示しておく。

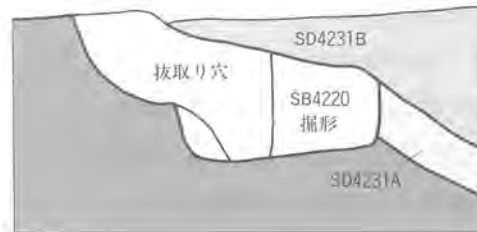


Fig. 24 SB4220とSD4231の関係略図

敷地規模の変遷 敷地が4町→1町と2町→4町→1町と、2度にわたって分割・統合を繰り返す点については、以下の事実が根拠となる。

① 二坪と七坪の坪境小路の側溝(SD4229・4231)が上下2層に分かれており、ちょうどこの側溝に重なる建物SB4220の柱穴が側溝下層の埋土上から掘り込み、上層の埋土には覆われている点である。換言すれば、SB4220は側溝下層が埋められた後に建てられ、SB4220が廃絶した後、再び側溝がつくられた(Fig. 24)。したがって、小路側溝下層→SB4220→小路側溝上層の順に遺構が営まれたことになる。また、七・八坪境小路の側溝SD4359・4361も上下2層があって、2時期にわたって1町単位の敷地に分割されたことが知られる。その結果、1町→4町→1町という変化が確認できる。

敷地規模の変遷の根拠

ただし、一・二坪については、坪境小路の側溝SD4589・4591が1時期分しか検出されず、二坪築地西雨落溝SD5258が坪境小路側溝に切られながら、小路路面上を横切って北へ伸びる。したがって、七・八坪が最初に分割された時点では一・二坪境は分割されず、後の分割時点では一・二坪も分割されたとみられる。

② SB4220の柱穴は東西塀SA4213の柱穴を切っており、しかもSA4213の柱穴は側溝下層の埋土に完全に埋められている。すなわち、SA4213→小路側溝下層→SB4220の順に遺構が営まれたことになる。

以上の①・②両点を総合すれば、下に模式的に示すように、4町→1町→4町→1町の敷地改変が確認できることになる。

小路側溝下層→SB4220→小路側溝上層
SA4213→小路側溝下層→SB4220
4町 → 1町* → 4町 → 1町

*ただし一・二坪は一体

敷地内区画塀の変遷 二・七坪および

一・八坪の南端部分に、この宅地の中心部を区画する塀が東西に3条、南北に4条設けられている(Fig. 25)。

区画塀は
3時期変遷

これらについて重複関係を列記すると、以下になる。

① Aの部分でSA4182とSA4181の柱穴が重複しており、SA4181がSA4182を切っている。すなわち、SA4181が新しい。

② SA4389とSA4390は同じ位置で建て替えられており、SA4389が新しい。そして、SA4390は南半部では5.4m間隔、SA4390は3m間隔である。

両者はBの部分で重複しているが僅かなずれがあって、上層のSA4389の

方が僅かに南に寄っている。すなわち、古いSA4390は東西塀SA4210・4213と併存し、新しいSA4389は東西塀SA4206と一連の施設となる。

③ SA4181とSA4250はCの位置で重複する。その部分の柱穴の切り合いから、SA4181はSA4250より新しい。

④ SA4780とSA4180は同じ位置で重複する塀で、SA4180が新しい。柱間はSA4780・4180ともに9尺であるが、古いSA4780は1尺=29.4cm、新しいSA4180が1尺=29.8cmと、基準尺が異り、両者で柱位置がずれる部分がある。

ア 新しいSA4180は、八坪北辺築地から南へ延び、八・七坪境小路を南へ越えたところまで確認できる。

イ それより南はSA4780とSA4180の柱穴が一致するが、SA4410より南と北で柱間寸法が微妙に異なる。

ウ 東西塀SA4790の柱筋はSA4180と一致し、SA4780とは一致しない。

したがって、SA4780はSA4410まで伸びてその南へは伸びず、その後SA4780は改築されてSA4180となってSA4181まで伸び、しかもSA4790と一致させるべく北部で柱位置を動かしたと考えられる。

⑤ 東寄りにある区画塀SA4250・4415・4410・4420のうち、SA4389とSA4250は間隔(c)が1尺=29.4cmとして90尺となり、奈良時代前期の尺度を用いた完数であるので、これが

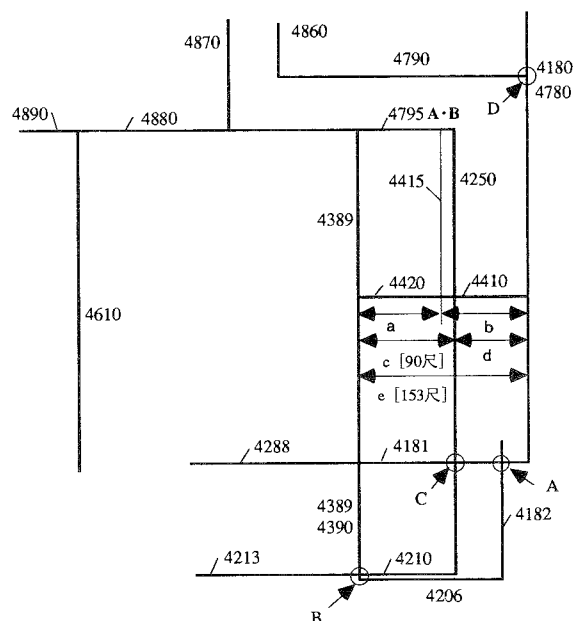


Fig. 25 敷地内区画塀の関係

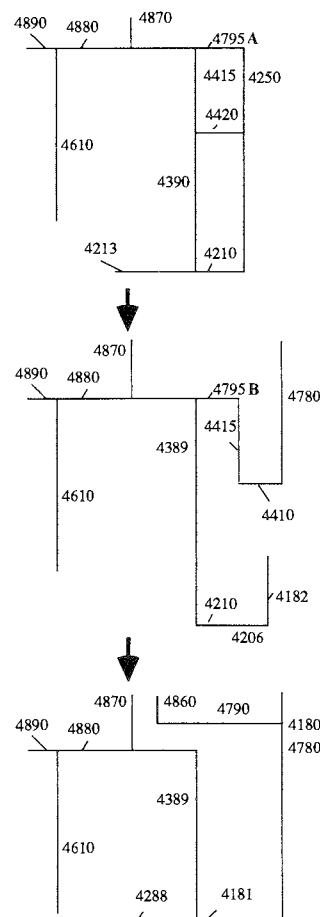


Fig. 26 敷地内区画塀の変遷

まず基準となる。SA4389とSA4180の間隔(e)は同じ尺度で153尺となるが、これは柱間17間分にあたり、SA4420をSA4780まで伸ばしたものとみることができる。なお、SA4415はSA4250を1間分西へ寄せた位置にあるが、同時にSA4389とSA4415の間隔(a)は1尺=29.8cmで80尺ともなる。

以上の5点を勘案すると、区画塀の変遷はFig. 26のようになる。このような敷地および区画の変遷を基礎として、小路側溝や区画塀との位置関係や重複等の状況から、以下のような建物等の時期区分を決定した。

B A 期の遺構 (Fig. 104参照)

一・八坪の北辺と八・七坪の東辺を掘立柱塀で囲み、一・二・七・八坪の4町、もしくはさらに南へ広がるならば4町以上の敷地を持つことになる。4町の西南寄りに東西140m以上、南北117mの掘立柱塀による区画(以下、内郭と称す)があり、さらにそれを東西に3分する南北塀があって、それぞれの区画に大規模な掘立柱建物が立ち並ぶ。なお、この内郭の3分された区画を東から東内郭、中央内郭、西内郭と称することにする。この時期の遺構は主に1尺=29.4cm程度の尺度を用いている。

SA4199 (Pl. 3・8・16・24・28, Ph. 7・15・27・28・53) 6 AFI-R・S・T・U地区

七・八坪の東端で検出した掘立柱南北塀で、敷地の東を画する施設である。柱間は5.7m(19尺)等間で、蛇行する流路SD4150より南で遺存状況が悪い。北の端は二条大路南側溝SD5105より北へ伸びて、SD5100の東端で終わる。方位が北で西へ約6分振れている。SD4150がC期まで存続していたことから、この塀も少なくともB期までは存続し、C期にSD4150が埋められるのに伴って取り払われ、ここの位置に築地が設けられたのであろう。B期まで存続。

敷地東面の
掘立柱塀

SD4150 (Pl. 4, Ph. 2・3・33・36) 6 AFI-R地区

発掘区の東南隅に流れる蛇行流路である。弥生時代からの遺物を含む菰川の旧河道SD1560(幅4~16m、深さは15m)を奈良時代に入って掘り直した流路であり、幅3~7m、深さ0.9mに狭めている。東二坊々間路西側溝から導水し、下流は左京三条二坊六坪に連なっている。出土する土器や土馬から、C期の少なくとも初め頃まで存続していたと考えられる。

SD4149 (Pl. 5, Ph. 4・33・36) 6 AFI-R地区

SD4150の最も西へ張り出した部分から南西へ45度方向に一直線に伸びる溝である。幅0.7m、深さ0.3mである。C期まで存続する。

SB5090 (Pl. 30, Ph. 25・61, Fig. 27) 6 AFI-U地区

柱間3.9m(13尺)で並ぶ2個の柱穴。築地を開く棟門と考えられる。一・八坪境の小路の北端にあり、小路の心と門の心はほぼ一致する。2個の柱穴の中央にある小穴は扉の召し合わせ部分の留めか、地覆の土台を据えた穴であろう。C期まで存続する。

北 門

SA5095・5096 (Pl. 30・31, Ph. 25・26・62・69) 6 AFI-U地区

一・八坪北辺を限る築地。積土は残存しないが、門SB5090や雨落溝とみられるSD5094・5105

1) 以下の遺構の、各個解説に添える建物平面の模式

図の記号は、以下のように使い分ける。

○ 掘形・抜き穴のみの柱穴

◎ 柱痕跡を残す柱穴

● 柱根を残す柱穴

2) この呼称は『長屋王概報』のそれを継承。

の存在から、築地の存在が推定できる。したがって、基底部幅は不明。10尺程度か。東端はSA4199の北から2個目の柱穴にほぼ繋がるとみられる。なお、一坪部分をSA5096、八坪部分をSA5095とした。改変しつつF期まで存続する。築地北側に瓦が落下する(Ph. 62・69)。

SD5094 (Pl. 28・30・31, Ph. 25・26・28・61・62, Fig. 28) 6 AFI-U地区

SA5095・5096の南雨落溝である。SA5096付近ではSB5085の柱穴が、SD5094の埋土を切る。F期まで存続する。下層溝はオーバーフローを含めて幅1.8m、深さ0.8m (SD5094A)。東流して東二坊々間路西側溝に注ぐ。上層溝 (SD5094B) は、C期の東面築地の下の木製暗渠SX5351を通して西側溝に注ぐが、F期には埋め戻した西側溝上を横切って東側溝に注ぐ。なお、北門SB5090付近では側板を杭で留めて護岸とする。

SA4210・4213 (Pl. 6・7, Ph. 5・6・34・35) 6 AFI-R地区

内郭の堀 内郭の南辺となる掘立柱塀。東端から5間目までがSA4210、それより西がSA4213である。東端から7間目までは柱間は5.3m (18尺)、そこから西は柱間が2分され、9尺となる。したがって、SA4213は改築されている可能性もある。SA4206と重複するが、SA4206のほうがやや南へ寄る。一・八坪境小路の西側溝SD4231に切られており、小路より古い遺構である。方位が西で約25分南へ振れている。

SA4250 (Pl. 6・11・19, Ph. 5・10・17・35・41) 6 AFI-R・S・T地区

内郭の東辺を限る掘立柱塀。柱間は2.65m (9尺) で、七・八坪境小路SF4360の南北の側溝SD4359・4361下層に切られており、小路より古い遺構とわかる。僅かに方位の振れがあつて、北で西へ6分振れている。

SA4390 (Pl. 6・7・11・12・19・20, Ph. 6・11・18・35) 6 AFI-R・S・T地区

内郭をさらに東西に3分する掘立柱の南北塀のうち東側のものである。柱間は南端5間分が5.3m (18尺)、それより北は2.65m (9尺) である。七・八坪境小路南北の側溝SD4359AとSD4361Aに切られており、D期の小路より古い遺構である。なお、柱間9尺割りで勘定して、南から17・18間目相当の位置には間に柱がなく、18尺間となっており、この部分には門が開いていた可能性がある。

SA4795A・4880・4890 (Pl. 19~23, Ph. 17~21) 6 AFI-T地区

内郭の北を限る一連の掘立柱塀で、柱間は2.67m (9尺) である。東端10間分がSA4795A、南北塀SA4390から西の29間分がSA4880、SA4610から西がSA4890である。一・八坪境小路SF4910の東西側溝SD4909・4911にSA4880部分が切れ、小路より古い。西で約10分程度南へ振れている。SA4880・4890はC期まで存続する。柱抜き穴からI₁期の軒瓦が出土。

SA4420 (Pl. 11, Ph. 9・10・39, Fig. 29) 6 AFI-S地区

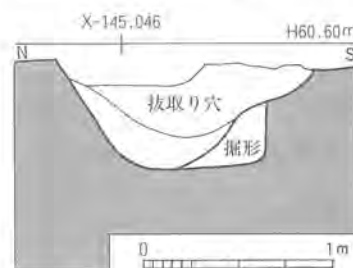


Fig. 27 SB5090西柱穴断面図 1 : 40

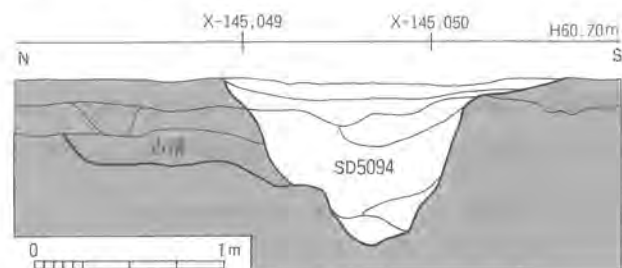


Fig. 28 SD5094土層図 1 : 40

SA4250とSA4389をつなぐ東西の掘立柱塀。北端から17間目にあたる。柱間は2.65m(9尺)で10間分ある。B・C期のSB4301の柱穴と重複し、それより古い。

SB4305 (Pl. 7・11, Ph. 10) 6 AFI-S地区

SA4420に重なって建つ桁行7間、梁間2間ないしそれ以上と推定される東西棟の掘立柱建物である。明確ではないが、柱穴の切り合いからSA4420より古いと推定され、北の側柱筋の一部と、東西の妻の柱を検出したにとどまる。平城京造営当初か、あるいは古墳時代の居館に関わる遺構と推定される。

SA4610 (Pl. 22, Ph. 13・21) 6 AFI-S・T地区

内郭をさらに東西に3分する掘立柱の南北塀の内の西側のもの。北から24間分検出している。柱間はSA4250・4390と同じ2.65m(9尺)である。C期まで存続する。

SB4635 (Pl. 14, Ph. 13) 6 AFI-S地区

南北塀SA4610の北端から13~16間目に南北塀に接して建つ掘立柱建物である。2列に5個の柱穴が南北に並び、柱間は2.6m強(7尺)である。梁間は2.2mで、SA4610との間も2.2mであることから、SA4610と一体になった桁行4間、梁間2間の建物と考えておく。

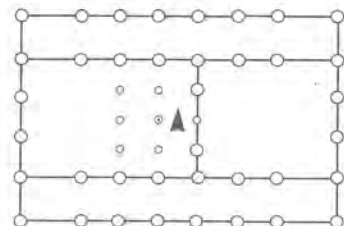


SA4234・5350 (Pl. 7, Ph. 6・34) 6 AFI-R地区

SA4234はSA4213の西よりで北へのびる南北塀。3間分あり、柱間は北2間が5.2m、南端は8mと不規則である。SA5350はSA4234の北端から西へ伸びる塀。柱間2.5mで3間分検出。同じ位置にあるSB4235と切り合い関係はないので、厳密には遺構の先後関係は不明。

SB4500 (Pl. 13, Ph. 12・47, Fig. 30) 6 AFI-S地区

中央内郭のほぼ真ん中の北よりにある桁行7間、梁間3間の母屋(身舎)の南北2面に庇が付く大規模な東西棟の掘立柱建物である。柱間は桁行中央5間が3m、両端間が4.2m(14尺)、梁行は母屋・庇とも3m(10尺)である。堀形は一辺1.3~2mと大きい。東から3間目に間仕切りの柱穴2個があり、これは妻の柱と柱筋が揃わず、北から2.5m、4m、2.5mとなる。さらに、この間仕切りの柱筋の棟通りにも小穴があり、これは次に述べる床束と一連のものであろう。間仕切りの西の2間分に、平の柱と柱筋を揃えて2列の床束がある。母屋梁間を4等分した位置に並び、堀形は一辺60~70cmと小さい。これ以外の部分で床束は検出していないが、検出した部分でも柱穴の深さが一定しないので削平されている可能性は残る。また、間仕切り



A期の正殿

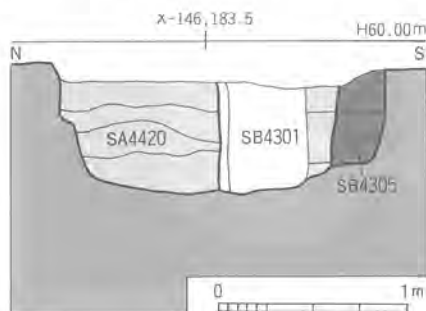


Fig. 29 SA4420とSB4301の関係 1:40

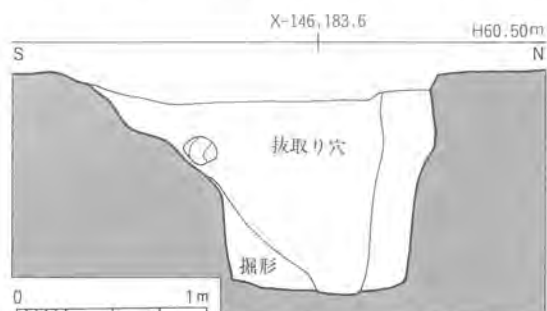


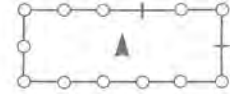
Fig. 30 SB4500柱穴断面図 1:40

の東でも床束らしい穴を1個検出しているが、西側のそれとは柱筋が揃わず疑わしい。

この建物は母屋梁間が3間あること、桁行両端間が広いこと、間仕切りと建物の一部に床束のあることなど、他と異なる特徴が多い。B期まで存続する。

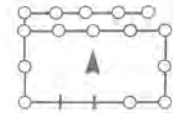
SB4587 (Pl. 21, Ph. 12・19) 6 AFI-S 地区

後 殿 SA4500の北8.5mを隔てたところに建つ東西棟の掘立柱建物である。桁行5間、梁間2間で北側柱列および東妻は依存状況が悪く、一部は底部しか残らない。柱間は桁行が3m、梁間が2.6mである。SB4500とは柱筋がほぼ揃うが、こちらが僅かにずれて東へ寄る。B期まで存続する。



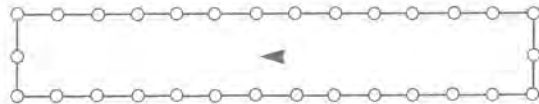
SB4540・SA4541 (Pl. 20, Ph. 19・39) 6 AFI-S・T 地区

SB4587の東北にある小規模な東西棟。桁行4間、梁間2間。柱間は桁行・梁間とも2.6m強(9尺)。北側に約1.4m離れて、東西塀SA4541が建つ。規模は4間、各柱間は2.3m強で、西端の柱はSB4540の西側柱筋と一致するが、東へゆくにつれずれる。独立した塀と考える見方と、SB4540の下屋庇と考える見方の二通りが可能である。



SB4480 (Pl. 12, Ph. 11・40, Fig. 31) 6 AFI-S 地区

長大な脇殿 SB4450の東に建つ南北棟の掘立柱建物。SB4490との間隔は側柱間で7.4m弱(25尺)である。桁行13間、梁間2間。柱間は桁行・梁間ともに2.94m(10尺)。建物内部に小穴が多数あって、床束の可能性もあるが、規則性はない。SB4490の柱筋と東西に揃っている。B期まで存続する。



SE4498 (Pl. 20, Ph. 18) 6 AFI-S 地区

中央内郭東北隅にある井戸である。径2.5mのほぼ円形の掘形で、深さ1.9m分遺存する。深さ1mからは一辺1.2mの方形、深さ1.5m以下は径約1mの円形となる。掘形全体が順次埋められた状況で、井戸枠は残っていない。底の円形の部分は井戸枠の跡かもしれない。埋土から平城宮Ⅲ古の土器や草鞋が出土している。B期まで存続する。

SA4582 (Pl. 13・14, Ph. 12・13) 6 AFI-S 地区

SB4500の南面に東西に延びる掘立柱塀である。SB4500の南側柱から5.6m(19尺)離れたところにあり、SA4610に取り付いてSA4610の柱筋から16間分ある。すなわち、SB4500のほぼ桁行中央間まで伸びてくることになる。柱間は2.36m(8尺)で、掘形は一辺50cm前後と小さ

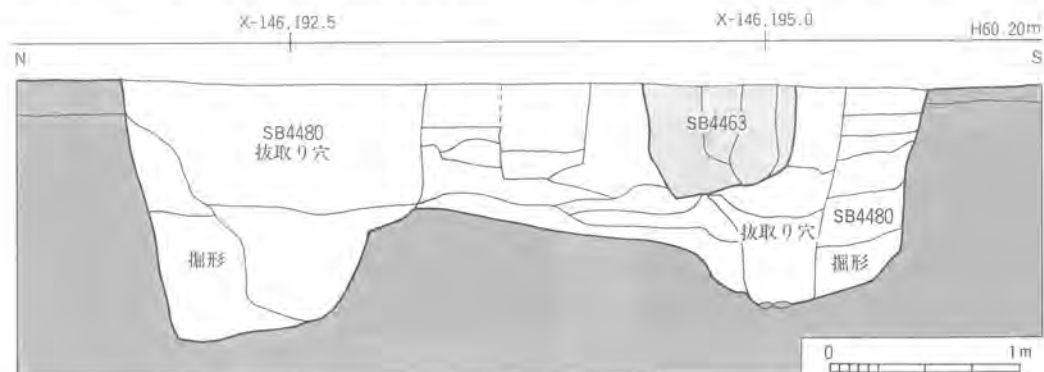
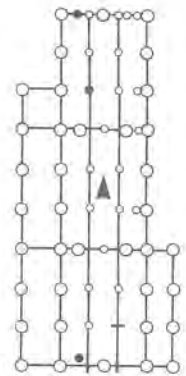


Fig. 31 SB4480柱穴断面図 1:40

い、SB4500の前面を閉塞するような位置にあるので仮設的な塀と考えた。

SB4490 (Pl. 12, Ph. 11・38・40, Fig. 32) 6 AFI-S 地区

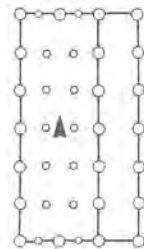
SB4480の西に建つ南北棟の掘立柱建物である。母屋の規模は桁行9間、梁間2間、柱間は桁行・梁間ともに2.94m(10尺)である。西庇は南端から7間分、東庇南端から3間分あって、西庇の梁間は2.9m(10尺)、東庇は2.6m(9尺)である。SB4490の西北隅の部分はSB4500と殆ど軒を接するくらい近接しており、両者一体となって建設されたことが窺われる。SB4490には間仕切りと床束の柱穴がある。まず、間仕切りは、母屋の桁行3間目毎にあり、梁間2間分を3分して、中央間を2.65m(9尺)、両脇間を1.6m(6.5尺)とする。同時にこの間仕切りの柱筋には、梁行中央にも小穴があって、扉構えを受ける床束があったことになる。床束の方は母屋内部に3列あって、その内2列は母屋梁間を3等分する位置にあり、他の1列は東の側柱の内側に沿ってある。後者は柱穴の遺存状況が悪く、本来西側柱際にもあったと推定されるが、こちらは検出されていない。すなわち、桁行に際根太2本を含め、計4本の根太を桁行に入れ、床板を梁行に張ったと推定される。B期まで存続する。なお、母屋北西隅の柱抜き穴は炉SX4495に転用している(第V章6参照)。



A期の脇殿

SB4430 (Pl. 11・19, Ph. 9・17・39) 6 AFI-S 地区

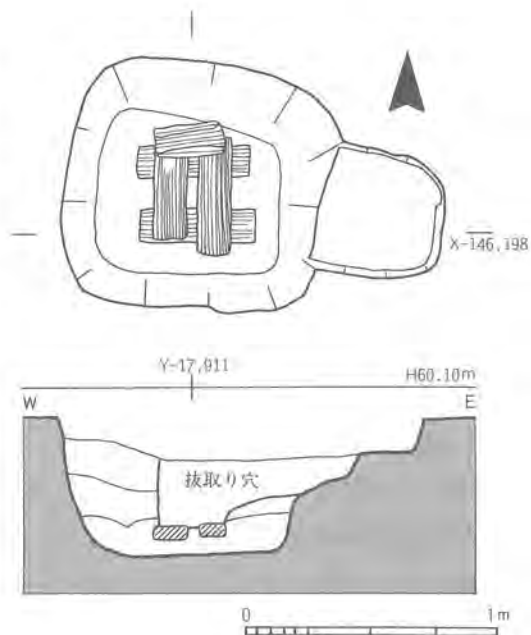
東内郭の北半部に建つ掘立柱の南北棟建物である。桁行6間、梁間2間、東に庇が付く。柱間は桁行・梁間ともに2.88m、庇の出は3mである。母屋と庇の掘形の大きさの差が大きく、構造的にも差があったのかもしれない。母屋梁間を3等分する位置(ただし、両妻だけは4等分の位置)に床束の柱穴がある。柱底に石を据えて礎板としているものが多い。柱抜き穴からは平城宮Ⅲの土器が出土している。C期まで存続する。



SE4655 (Pl. 15・43, Ph. 14・77)

6 AFI-S 地区

SB4651とSB4670の間にある井戸である。井戸枠は抜き取られており、南北4.3m、東西3.8m、深さ1.9mの方形の土坑状を呈している。掘形と井戸枠抜き取穴は判別しがたいが、底部では東西2.6m、南北1.8mの長方形を呈するので、井戸枠はこの規模に近い長方形であったと推察される。平城宮Ⅱの土器が出土している。B期まで存続する。



SA4870 (Pl. 21・25, Ph. 19・22)

6 AFI-T・U 地区

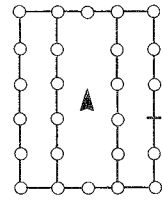
内郭の北側を2分する南北塀。中央内郭の北を限る塀SA4880から北へ伸びる。南端から3間分は3m、それより北は2.65mである。掘形の深さは30cm程度と浅い。SK5074と重

Fig. 32 SB4490の柱穴と礎板 1:30

っており、前後関係は確認できなかった。C期まで存続する。

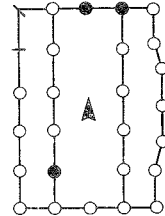
SB4275 (Pl. 11, Ph. 5・10) 6 AFI-R・S地区

東内郭の南半部に建つ南北棟の掘立柱建物で、桁行5間、梁間2間の母屋の東西2面に庇の付く平面である。柱間寸法は桁行2.65m、梁間2.1m、庇の出が2.85m。SA4390と柱筋が一致する。柱穴はD期のSD4461に切られており、C期以前になる。SA4210・4250・4390・4420で囲まれた空間に比近できる建物は、これ以外にない。



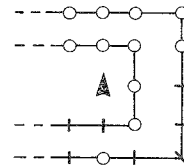
SB4651 (Pl. 15, Ph. 14) 6 AFI-S地区

西内郭に建つ南北棟の掘立柱建物である。桁行5間、梁間2間の母屋の東西に庇の付く平面形式で、柱間は桁行3m、母屋梁間2.7m、庇の出は2.2mである。使用基準尺が30cmと長い。母屋の柱穴の掘形は一辺80cm程度だが、庇は一辺50cm前後で小さく、しかも東の庇は柱間寸法が不規則で、南北両端と中央の3個分では母屋からの出が異なる。したがって、少なくとも東の庇はさしかけ程度の簡略なものか、もしくは目隠し塀であろう。B期まで存続。



SB4670 (Pl. 15, Ph. 14) 6 AFI-S地区

SB4651の西北にある東西棟の掘立柱建物。削平が著しいが、梁間2間、桁行3間以上、の母屋の少なくとも3方に庇の付く平面と推定できる。柱間は桁行・梁間ともに2.5mで、東の庇の出のみ3.5mである。桁行の端間のみが広い平面形式はB4500でもみられ、建物の構造の共通性が推定できる。B期まで存続する。



SA5080 (Pl. 25・30・31, Ph. 26) 6 AFI-U地区

SA4870に連なって西へ伸びる掘立柱塀である。9間分検出し、それより西は大土坑で削平されているが、発掘区西壁ではその柱穴の底部が確認されていて、発掘区より西へも伸びてゆくことが明らかである。柱間は2.65mである。東端と西端のみ2間分相当の柱間がある。C期まで存続する。

SD4796 (Pl. 20, Ph. 17~19) 6 AFI-T地区

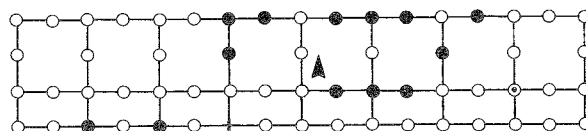
SA4795Aの北2~2.3m(心々寸法)にある東西の溝。SA4795A・4880の北雨落溝と考えられ、SA4975が南へ折れた後もそのまま東へ伸びる。西端はSD4875に連なる。幅50cm程度、深さ35cm程度である。C期まで存続する。

SD4875 (Pl. 21・25, Ph. 19・22) 6 AFI-T・U地区

SA4870の東2~2.3m(心々寸法)にある南北の溝。SA4870の西雨落溝と考えられ、SA4870が西へ折れた後もそのまま北へ伸びるが、築地までは伸びていない。南端はSD4796に連なる。幅50cm程度である。C期まで存続する。

SB4800 (Pl. 21~23, Ph. 20・21・51) 6 AFI-T地区

内郭の北の塀の北側にある長大な東西棟の掘立柱建物である。桁行16間、梁間2間の母屋の南にのみ庇が付く。柱間は桁行が2.67m(9尺)、梁間が2.65m

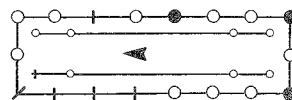


(9尺)で、使用尺度は1尺=2.94~2.96cmである。桁行2間毎に棟通りに柱が建って、棟割り形式の間仕切りがあったことになる。母屋の柱掘形は一辺約1mであるが、庇は小さく一辺50cmである。ほぼ同じ位置に建つSB4810の柱穴に切られている。柱穴から平城宮Ⅱ~Ⅲの土器が出土している。B期まで存続する。

棟割り形式
の 建 物

SB5150 (Pl. 27, Ph. 24・58・72) 6 AFI-T地区

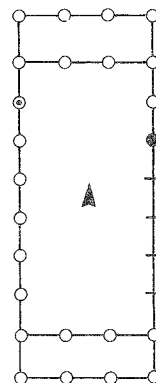
SB4800の西北にある南北棟の掘立柱建物である。桁行7間、梁間2間。柱間は桁行が2.96m、梁間が2.95m、すなわちともに10尺である。基準尺度は他のA期の建物のそれよりやや長い。柱



掘形は一辺1.5m程度と大きく、残存する柱根も径40cmと極めて太い。建物内部に2列の小穴があり、梁間は東から1m、3m、1.6m、桁行は2.5m程度で、不規則である。桁行・梁間ともに柱筋のちょうど間にくるので、この小穴は足場穴と推定される。C期まで存続する。

SB5020・SA5030・SB5040 (Pl. 26, Ph. 23・59) 6 AFI-T・U地区

SB5020とSB5040はそれぞれ3間分の2列の柱穴、SA5030は5間分の柱穴である。この三つの遺構については、複数の解釈の可能性がある。ここではまず全体を桁行9間、梁間3間の南北棟と考えて記述する。この建物は南北の妻に庇が付く構造となり、柱間寸法は梁間が3.4m等間、桁行は中央5間が2.96m、その両脇が2.75m、両端が3.5mである。このように考えた場合、以下のような不都合が生ずる。

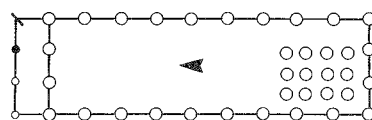


- ① 母屋東側柱列のうち、少なくとも4個の柱穴は検出されていない。これは残存遺構面が低いことによる可能性もあるが、西側柱列は掘形の深さが65cm程あり、かつ掘形の大きさが東西2m、南北1.2mと大きいので、東側で削平されているとは考えがたい。
- ② 建物の両端の間の柱間が大きい建物は、この地区でもいくつかみられるが、母屋両端が狭く、庇が広がる構成は特異である。
- ③ 母屋の西側柱の掘形は上記のように大きく、ほぼ長方形であるが、母屋北妻と北庇(SB5040)は不整形でやや小さく、同一の建物にしては統一がとれていない。

したがって、全体を1棟の建物と考えず、SB5020・SB5040の2棟の東西棟建物の西妻を南北塀SA5030で繋いだ遺構とも考えることができる。SB5020・SB5040は桁行3間、梁間1間の建物である。この場合、①の問題は解決できるが、母屋東側柱の柱穴とみなした2個の柱穴は別の遺構と考えざるを得なくなる。②の点も塀が建物に取り付く部分の柱間が狭いことになり、一応の合理的説明が可能となる。③の点も不合理がなくなるが、反面、建物よりも塀の掘形が大きくなって不自然な点が残る。どちらの案を妥当と決めるかは容易でないが、いずれにしても基準尺度を1尺=0.296mと考えると、3.4m、2.75m、3.5mの柱間は完数とならず不自然さが残る。C期まで存続する。

SB4960・SX4965 (Pl. 25・30, Ph. 22・25, Fig. 33) 6 AFI-U地区

SB5020・SA5030・SB5040の東約30mのところにある南北棟建物である。桁行9間、梁間3間の母屋の北に庇が付く。庇柱の掘形は小さい。柱間は桁行が2.67m(9尺)、梁



間が2.43m、庇の出も2.67mで、使用尺度は1尺=0.296cmである。梁間がこの尺度では完数にならない。柱掘形から平城宮Ⅰ～Ⅱの土器が出土している。

このSB4960の南端3間分の西2間に、1列に4個で3列に並んだ穴がある。間隔は1.6mで大きいものでは径1mある。その土層は、Fig.33（東南隅の穴）のように柱痕跡がなく、底が半円形であるので、甕の埋納穴と考えられる。この埋甕が建物全体に広がっていたかどうかは確認できないが、SB4960が埋甕を伴った収納施設とみてよい。B期まで存続する。

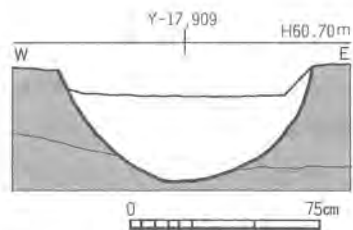


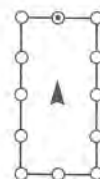
Fig. 33 SX4965甕据付け穴
断面図 1:30

SA4961 (Pl.25, Ph.22) 6 AFI-T・U地区

SB4960の西側柱列の南に取り付いて伸びる掘立柱の南北塀。7間分検出し、さらに南へ伸びるが、未発掘の南北21mの区間を越えた南には、これに続く柱穴が検出されておらず、この未発掘の間でとぎれるかあるいは東か西へ折れ曲がると推定される。柱間は2.26mで、一・八坪境小路の東側溝上層に切られていて、それより古い。B期まで存続する。

SB4370 (Pl.10, Ph.9・17) 6 AFI-S地区

内郭東辺塀の東方にある南北棟の掘立柱建物である。桁行4間、梁間2間。柱間は桁行が2.95m (10尺)、梁間が2.8m (9.5尺)で、基準尺は1尺=0.295mである。柱掘形から平城宮Ⅲの土器が出土しているが混入か。



SE4366 (Pl.10・40, Ph.8・9・75) 6 AFI-S地区

内郭東辺塀の東方にある井戸である。掘形は、底で約1.5m角のほぼ正方形で、深さが1.7m。底面に礫を敷き、横板組の井戸枠を入れる。井戸枠は、長さ110cm、幅60cm、厚さ4.5cmの板4枚を井籠組に組んで正方形にしたもので、上下を繋ぐために板の木口中央に幅6cmの枅穴を彫り、5.5cm×3.5cm×1cmのだぼを埋めている。井戸枠は最下段のみが残り、それより上は抜取られている。抜取り穴は東西2.7m、南北3m、深さ1mと、掘形よりも大きい。井戸枠を抜取った穴の埋土から、平城宮Ⅱに属する猿の絵を描いた土師器皿が出土している。したがって、廃絶はB期に降る。

SD4750 (Pl.16, Ph.57, Fig.34) 6 AFI-R・S・T・U地区

敷地の中程の東辺築地際にある南北に伸びる溝状遺構。長さ23m、幅3m、深さ0.6m前後で、水の流れた形跡はなく、塵芥を捨てた土坑とみられる。溝埋土は大きく4層に分れる。下

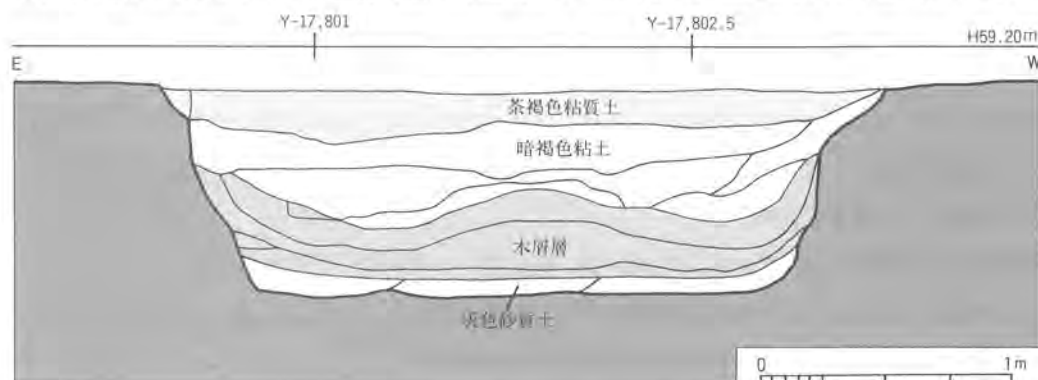


Fig. 34 SD4750土層図

甕を貯えた
建物

猿絵皿を出
土した井戸

「長屋王家
木簡」土坑

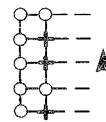
半分には多量の木屑を含んだ層があり、「長屋王家木簡」と称している35,000点にのぼる木簡が出土した。この木簡の年紀は和銅4年(711)から霊亀2年(716)の間に収まり、霊亀2年をさほど降らぬ頃に投棄されて埋められたと考えられる。

SE4770 (Pl. 18・42, Ph. 17・42・78) 6 AFI-T地区

内郭の堀の東北隅から約25m東北にある井戸。東西2.2m、南北2mの隅丸方形で、深さは1.8mある。井戸枠は抜取られて、層状に埋土が堆積している。その中程に木屑層があり、そこから「長屋皇宮」「若翁帳内」などと記した木簡226点が出土した。木簡の紀年より養老元年(717)をさほど降らぬ頃に廃絶したと考えられる。

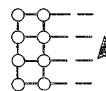
SB4710 (Pl. 8, Ph. 15) 6 AFI-S地区

東西1間以上、南北4間の掘立柱建物。柱間は東西が2m、南北が1.8m。東側の柱列は2個しか検出していないが、総柱の可能性もある。SB4715と東の柱筋を揃え、6mの間隔をあける。柱穴から平城宮Ⅱ～Ⅲの土器が出土している。B期まで存続。



SB4715 (Pl. 8, Ph. 15・57) 6 AFI-S地区

東西1間以上、南3間の掘立柱建物。柱間は東西が2m、南北が1.8m。総柱の建物と推定される。SB4710と東の柱筋を揃え、6mの間隔をあける。B期まで存続。



倉庫風建物

SB4710とSB4715は同時期に建ち並んでいた蔵であろう。C期以降の築地と近接することから、東辺が掘立柱堀SA4199の時期のA・B期と推定しておく。

C B期の遺構 (Fig.105参照)

敷地の基本的な構成はA期とほとんど変わることがない。ただ、東内郭の堀や内郭南辺の堀が改変され、それに伴ってその周辺の建物が建て替えられる。A期から存続していて変化のない遺構は、SA4199・5095・5096、SB5090、SA4880・4890・4610、SA5080・4870、SB4500・4587・4480・4490、SB4651・4670、SB4430、SB4800・5150・5020・5040、SA5030、SB4960、SX4965、SA4961SB4710・4715、SE4498・4655・4366・4770である。SA4795Aは建て替えられて、SA4795Bとなる。

SA4389 (Pl. 6・7・11・12・19・20, Ph. 6・11・18・35) 6 AFI-R・S・T・U地区

東内郭と中央内郭を区画する南北堀SA4390の改修されたものである。SA4390の北から32間は既存のままで、柱間は2.65m、その南を柱間2.97mで11間分としている。すなわち、SA4390の柱間の広い部分を改修したことになる。掘形はSA4390より20～30cm深い。SA4206より南の延長部分にも柱穴らしき穴があるので、さらに南へのびる可能性がある。C期まで存続。

改修された
区画堀

SA4206 (Pl. 6, Ph. 4・5・34) 6 AFI-R地区

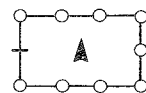
SA4389に連なって東へ伸びる掘立柱堀。柱間は2.95m(10尺)で13間分ある。

SA4182 (Pl. 5, Ph. 4・41) 6 AFI-R地区

SA4206に連なって北へ伸びる掘立柱堀である。柱間は2.95m(10尺)で11間分あって、SB4255に繋がる。

SB4255 (Pl. 5, Ph. 4) 6 AFI-R地区

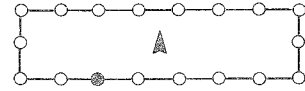
SB4425は東妻がSA4182に連なって建つ東西棟の掘立柱建物である。桁行3間、梁間2間。柱間は桁行・梁間とも2.8m(9.5尺)、基準尺は1尺=29.8cmで



ある。西妻柱はSB4260によって壊されている。

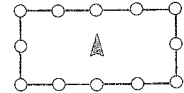
SB4270 (Pl. 6, Ph. 5) 6 AFI-R 地区

SB4255と南の側柱の柱筋を揃えて建つ東西棟の掘立柱建物。桁行7間、梁間2間。柱間は桁行両端が2.8m、中5間は3m、梁間は2.65m、SB4255との間は6m。SB4255とSB4270は一連の施設として、SA4389・4206・4182とともに一辺32.5mのほぼ正方形の区画を形成する。



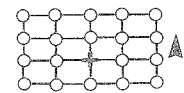
SB4207 (Pl. 5, Ph. 5) 6 AFI-R 地区

上記正方形区画の中の西南よりにある掘立柱建物で、桁行4間、梁間2間。柱間はすべて2.9mである。E期のSB4205の掘形に切られていて、それより古い遺構である。



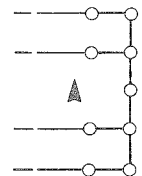
SB4251 (Pl. 5, Ph. 4・5) 6 AFI-R 地区

上記正方形区画の東北隅にある東西棟掘立柱建物である。桁行4間、梁間3間の総柱で、柱間は桁行が2.5m、梁間が1.65m、すなわち、桁行2間分の三割りとなっている。SA4250とSA4181の交点で両者と重複し、SA4250→SB4251→SA4181の順になることが確認され、B期に属することが明確である。



SB4235 (Pl. 7, Ph. 6・33・34) 6 AFI-R 地区

中央内郭南辺の区画塀SA4213・4234が取り除かれた跡に建つ東西棟掘立柱建物である。梁間2間の母屋の南北2面に底の付く建物の東妻の部分の桁行1間分を検出している。柱間は桁行が3m、梁間は母屋が2.8m、底が3mである。柱掘形は二・七坪境小路の西側溝SD4231と重複し、その下層の溝に切られて、溝より古いことが確実である。



SA4410 (Pl. 10, Ph. 9) 6 AFI-S 地区

SA4415とSA4780を繋ぐ東西塀。SA4420の位置を基準にして東へ延ばした塀で、7間分あって、柱間寸法は東端のみ3m、その他は2.6mである。

SA4415 (Pl. 11・19, Ph. 10・17・41) 6 AFI-S 地区

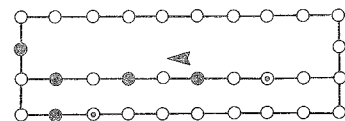
SA4410の設置と南の正方形区画の形成に伴って、SA4250の代わりにSA4250の1間西に設けた掘立柱南北塀である。柱間はSA4250と同じ2.65m(9尺)で17間分ある。

SK4429 (Pl. 11, Ph. 10) 6 AFI-S 地区

SA4415の南から4個目の柱穴と重複する土坑である。中から平城宮IIの土器が出土し、SA4415の柱穴の上から掘られているので、B期にSA4415が廃絶する際に掘られたものと考えられる。

SB4400 (Pl. 10・18, Ph. 9・10・17) 6 AFI-S 地区

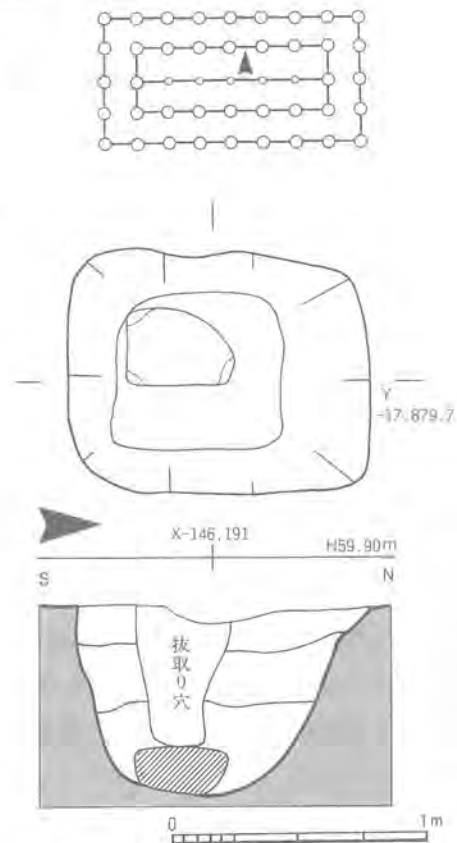
SA4415の東にある南北棟の掘立柱建物である。桁行9間、梁間2間の母屋の西に底の付く平面である。柱間寸法は桁行が2.64m、梁間は2.45m、底の出は2.75m。柱掘形は母屋・



底とも1m弱で規模が小さいが、最大30cmの柱径の柱根の残る柱穴がある。柱穴から平城宮II～IIIの土器が出土している。C期まで存続する。

SB4300 (Pl.11, Ph.10・11・39, Fig.35) 6 AFI-S 地区

内郭の内の東の区画に建つ大規模な東西棟の掘立柱建物である。SB4301と柱筋を揃えており、SA4420を取り去ってSB4300・4301一体となって建てられたと考えられる。母屋桁行6間、梁間2間の4面に底の付く平面形式で、柱間はすべて2.39m(8尺)である。基準尺は1尺=29.8cmで、これまで述べてきた遺構の基準尺より大きい。したがって、時期が奈良時代後半以降の可能性が残る。母屋内部の棟通りにも柱が建ち、形式的には総柱の柱配置であるが、棟通りの柱穴の堀形は一边70~80cm、他は一边1.2mと小さく、床束と考えられる。底の4隅の柱穴もやや小さく、あるいは本来4隅入り隅で4面それぞれ独立した底であったものを、後に4隅に柱を立てて隅欠きのない通常の4面底形式に改めたか、4隅の小柱穴が縁束であった可能性がある。北庇の東端(隅)から2・3個目の柱穴は柱底部に石を置いて礎板としている。C期まで存続。なお、SB4300と次のSB4301の柱穴はSB4305の柱穴を切っている。



4面底建物

Fig.35 SB4300の柱穴と礎板 1:30

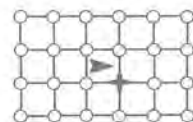
SB4301 (Pl.11, Ph.10・39, Fig.29) 6 AFI-S 地区

東西棟の掘立柱建物である。桁行6間、梁間2間。柱間は2.39m(8尺)である。SB4300と柱筋が揃う。棟通りにも床束と推定される柱が建つ。ただし、SB4300程明確に側柱と床束の差がない。SA4420の柱穴と重複しており、SA4420が古い。C期まで存続する。



SB4520 (Pl.20, Ph.18) 6 AFI-S・T 地区

中央内郭の東北隅に建つ南北棟の掘立柱建物。桁行5間、梁間3間の総柱の建物で、柱間寸法は桁行・梁間とも2.5m。南妻の柱穴がSB4510の柱穴に切られている。柱穴から平城宮Ⅱ～Ⅲの土器が出土。



SB5344 (Pl.14, Ph.13) 6 AFI-S地区

中央内郭の西限の塀SA4610の北端から13~18間目に建つ南北棟の掘立柱建物である。SB4635を建て替えたものとみられる。桁行6間、梁間1間。柱間寸法は、桁行はSA4610と同じく2.65m(9尺)で、梁間は3.75mである。



SA4780 (Pl.10・18・29, Ph.9・17・41・42・45) 6 AFI-S・T・U地区

内郭の北側を3分する塀の内の東の南北塀。敷地北辺の築地SA5095まで伸びるかは不明。七・八坪の坪境小路付近では同じ位置で建つ上層の南北塀SA4180とずれが生じているが、南へゆくとずれは解消される。柱間寸法の微妙な差とSA4410との関係から、SA4780はSA4410

1) SA4410より北は2.675m、南は2.688mである。

の位置まで伸びていると考えられる。柱掘形はSA4180より浅い。柱間は2.675m。ただし、北端2間は2.5mである。なお、北端の築地際の部分では柱穴に2時期分を認めがたいので、あるいはこの時期は北端まで到達していなかった可能性がある。

D C期の遺構 (Fig.106参照)

敷地の基本的な構成は、A・B期とほとんど変わることがない。改変の主なものは、まず敷地の東辺の区画施設を掘立柱塀から築地に改めたことである。次に中央内郭の中心的建物が建て替えられ、内郭北部を区画する東の南北塀が改変され、それに伴う南辺の塀も改められて、東内郭の南半部の区画が変更され、内郭の南北長が29m縮む。また、内郭北部に新たな塀が設けられる。B期から存続していて変化のない遺構は、SA5095・5096、SB5090、SA4880・4890・4610、SB4430・4400・4300・4301・4430、SA4870・5080、SB5150・5020・5040、SA5030である。

SA4200・4195 (Pl.24・28, Ph.27) 6AFI-R・S・T・U地区

敷地東面は
築地塀

敷地の東辺を区画する築地塀で、この時期にSD4150が埋められて掘立柱塀が廃され、築地に改められた。ただ、実際の築地積土は残らず、北寄りでは暗渠SX5351・5352が存在することから築地が想定できる。SX5351の東西の長さが3.3mあり、築地の基底部分は3m程度であろう。第193次B区内では浅いながらも東雨落溝SD5353がある。南の第178次区内では確実に位置を押さえる根拠はないが、東二坊々間路西側溝と同じ振れを持っていたとみてよい。その根拠は以下の3点である。

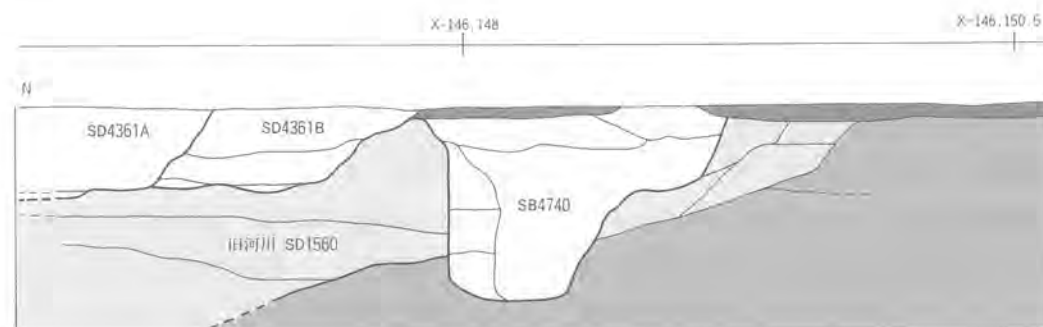
- ① 東二坊々間路西側溝の振れは北で西へ10～13分ある。
- ② SX5351の中央部と後述の門SB4740の西側柱を結ぶと、その振れは10分で、①とほぼ一致する。
- ③ この振れを延長すると、SD4101と約50cm程の間隔（築地と溝の心々距離で2.2m）をおいて平行することになり、SD4101を東雨落溝と考えることができる。

なお、七坪部分をSA4200、八坪部分をSA4195とした。改変されつつF期までは存続する。

SB4740 (Pl.16, Ph.15, Fig.36) 6AFI-S地区

東門

東辺築地の中程、七・八坪境小路との交点になる位置にある築地に開く門である。桁行・梁間ともに1間であり、柱間は桁行3.7m、梁間3mである。小路側溝の下層SD4359A、SD4361Aの埋土より下の層位から掘り込まれていて、小路より古い遺構であることが確実である。この門の構造は、変則的な四脚門で、扉を東か西の側柱列に吊り込むか、掘立柱ではない柱を棟通りに立



てて扉を吊り込む案も考えられるが、ここでは築地が西側柱列に取り付くことから、棟門で東に庇の付いた構造と考えておく。年中行事絵巻に描かれた平安宮建礼門は、八脚門で庇の付いた形に描かれ、参考になる。

SD5353・4101 (Pl. 3・24・28, Ph. 2・27・53) 6 AFI-R・T・U地区

SA4200・4195の東雨落溝である。幅1～2mで一定せず、深さは30cm程度と浅い。F期までは存続。

SX5351 (Pl. 28, Ph. 27・56) 6 AFI-U地区

この地区の北築地の南側溝が東へ抜ける位置にある木樋の暗渠である。木樋部分は薄くしか残っていない。現存で木樋の幅は40cm、深さが10cm弱、長さが3.3m。掘形は60cm、深さ20cmである。この暗渠の東は溝状になって東へ伸び、東二坊々間路西側溝が廃絶した後も東へ向かって流れる流路として機能した。F期までは存続する。

SX5352 (Pl. 24 Ph. 27・56) 6 AFI-U地区

SX5351の30m南にある暗渠で、木樋の残片が残るのみである。掘形は現存する部分で幅60cm、深さ20cmある。遺存状況は悪い。F期までは存続する。

SA4180 (Pl. 5・10・29, Ph. 4・9・17・41・42・45) 6 AFI-R・S・T・U地区

改修された
区画堀

C期の最も顕著な変化は、内郭北部を東西に区画していた南北堀SA4780が建て替えられてSA4180となって南へ伸び、東内郭の東限となることである。敷地北辺の築地SA5095の南際から始まって南へ伸び、2間分検出し、南へ伸びて七・八坪坪境小路を越える。この小路との交点前後では、同じ位置で建つ下層の南北堀SA4780とずれが生じているが、南へゆくとずれは解消される。SB4270・4255のすぐ南まで伸びて西へ折れる。柱間寸法は北端2間は2.5m、その他は2.688mである。柱掘形の深さは70cm前後とSA4780より深い。

SA4181 (Pl. 5・6, Ph. 4・5・35・41) 6 AFI-R地区

SA4180の南端から西へ伸びる掘立柱の東西堀。SA4182・4250等と交差するが、それらより新しいことは、既に述べた通りである。17間あって、SA4389に繋がる。柱間は2.7mである。

SA4288 (Pl. 7, Ph. 6・35) 6 AFI-R地区

SA4181の西延長部分の東西堀である。11間分検出し、さらに西へ伸びる。柱間は2.7mである。柱抜き穴からⅢ期の軒瓦(6663C)が出土している。

SA4389 (Pl. 6・7・11・12・19・20, Ph. 6・11・18・35) 6 AFI-R地区

B期から存続するが、SA4181・4288の建設に伴って、両者との交点から南が取り除かれる。

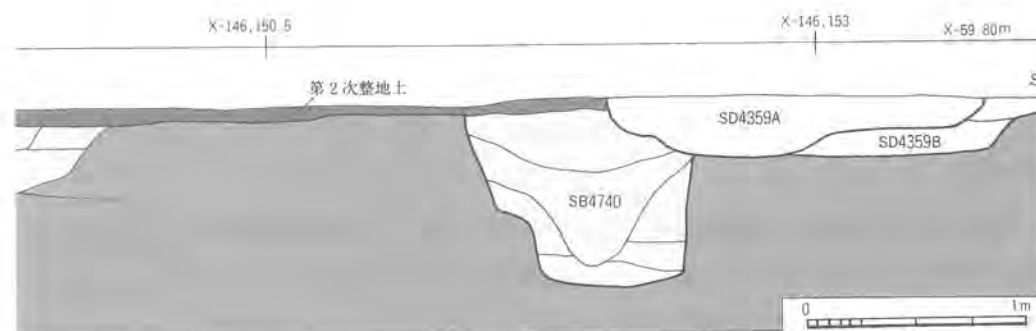
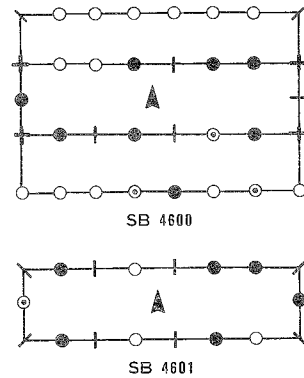


Fig. 36 SB4740の柱穴と第2次整地土および小路側溝の関係

SB4600・4601 (Pl. 13・14・21・22 Ph. 13・20・50) 6 AFI-S地区

C期の正殿

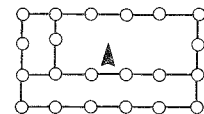
中央内郭の西寄りに建つこの区画の中心的建物である。掘形は一辺1～1.5mと大きく、柱径39cmの太い柱根が遺存する柱穴が多い。掘形の深さは70cm程度、多くは柱根が掘形底より深くめり込んでいる。柱配置が不規則であることから、この建物の平面形式を確定することは容易でない。SB4600・4601全体では、一部に1間おきに柱穴のない部分があるものの、東西5間、南北5間に柱穴が並び、しかもその東西に3個ずつの柱穴が南北に並んでいる。柱間は東西が2.95m(とんでいるところでは5.9m)、南北が南から5.3m(18尺)、4.7m(16尺)、4.1m(14尺)、5.3m、4.1mとなる。このことから、18尺部分は母屋、14尺部分が庇、16尺部分は造り合いとみなせば、桁行5間、梁間1間の庇のない建物SB4601と、桁行5間、梁間1間の母屋に南北2面の庇が付くSB4600が16尺の間をおいて並び建つことになる。東西に3個ずつある柱穴は、中央のものがSB4600の南の柱筋と一致し、両端のものはそれぞれSB4600とSB4601の母屋の棟通りに位置し、両妻柱列からは3m離れている。形式的に見れば、母屋棟通りの柱は棟持ち柱に想定できるが、この時期にそのような建物が存在したとは考えにくい。ただし、平城宮第32次の調査区の中にも桁行梁間とも1間、柱間寸法は桁行9m、梁間5mで、妻から3m離れた所に棟持ち柱が建つ建物SB3975があり、奈良時代にこのような形式の建物の存在した可能性がある。ここでは棟持ち柱の筋にも礎石建ちの柱があったと推定し、SB4600を桁行7間梁間2間の母屋の南北2面に庇のつく建物、SB4601を桁行7間の母屋だけの建物と推定しておく。建物本体部でも柱が1間おきにとんでいるのは、礎石と掘立柱が交互にあったものと推定される。柱のとぶ部分は母屋のみであるが、左右非相称であって不審である。



掘立柱と礎石の混用

SB4510 (Pl. 20, Ph. 18・19) 6 AFI-S地区

中央内郭の東北隅にある掘立柱の東西棟建物である。桁行5間、梁間2間の母屋の南に庇の付く平面で、柱間は桁行が2.65m(9尺)、梁間は2.2m(7.5尺)、庇の出が2.65mである。母屋西から1間目に間仕切り柱があって、棟通りから0.4m北に寄った位置に建つ。基準尺は1尺=29.44cmである。母屋は柱掘形が一辺70～80cmであるが、庇は径50cm程度と小さい。柱掘形は七・八坪境小路の南側溝SD4359の底から検出されるので、小路の設置以前の時期の遺構である。

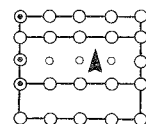


SE4497 (Pl. 20・41, Ph. 18・76) 6 AFI-S地区

SA4510のすぐ南東、SB4475の北東にある井戸。掘形は径1.5mのほぼ円形、深さも1.5mである。井戸枠は径55～58cm、高さ38cmの曲物を3段重ね、最上段には縦板を並べる。井戸枠の底部には木炭を並べている。井戸の埋土から平城宮Ⅲ～Ⅳの土器が出土している。E期まで存続。

SB4285 (Pl. 7, Ph. 6・32・34) 6 AFI-R地区

中央内郭の東南隅にある東西棟の掘立柱建物である。桁行4間、梁間2間の南北に庇の付く平面で、柱間は桁行が2.25m、梁間は母屋と北庇が1.8m、南庇は2.5mである。柱掘形は、母屋は一辺1m以上の方形、庇は0.5～1m程度と、庇が小さい。母屋の棟通りにも小さい柱穴があり、床束と考えられる。柱掘形は4町の敷地が



1 町に分割された時期の坪内の溝SD4282に切られているので、C期以前の遺構である。

SE4145 (Pl. 4, Ph. 3・74) 6 AFI-R地区

SE4116の西にある井戸である。蛇行流路SD4150を埋めた上に掘られている。掘形は径2.5mの円形、深さは1.4m、中の径1.8m、深さ1mの部分に井戸枠が埋められている。井戸枠は縦板組で、一辺60cm、四隅に丸柱を立て、間に板を3枚立てている。井戸掘形から平城宮Ⅱ～Ⅲの土器が、埋土からⅢ～Ⅴの土器が出土している。F期まで存続する。

SE4117 (Pl. 3・38, Ph. 3) 6 AFI-R地区

敷地の東南隅にある井戸である。C期以後存続するSE4116に重なる位置にあり、それ以前に掘られたことになる。井戸枠は抜取られており、掘形の深さは2.5m、径は上面で3m以上に広がり、中程より下では径1.2m程度である。埋土から平城宮Ⅲの土器が出土している。

SE4161 (Pl. 4, Ph. 3) 6 AFI-R地区

SE4145の北にある井戸である。径1.7深さ2.3mの円筒形の掘形で、井戸枠を抜いた後、一気に埋めていて埋土もほとんど分層できない。埋土から平城宮Ⅱ～Ⅲの土器を出土している。

SE4705 (Pl. 8, Ph. 7) 6 AFI-S地区

SE4161の北東にある井戸。掘形は径2mの不整形な円形で、井戸枠は4隅に杭を打って横棧を渡し、縦板を組んだ形式である。横棧は3段、井戸の底には礫が敷いてある。調査中に崩壊したため、深さは不明である。掘形から平城宮Ⅱ・Ⅲの土器が、埋土からⅤの土器が出土している。井戸枠の年輪年代測定では718年以後の伐採と判定されている。F期まで存続。

SE4340 (Pl. 17・40, Ph. 8・75) 6 AFI-S地区

SB4400の東にある井戸である。掘形は検出面で径1.5mの円形、0.7mから下は径0.65mで、全体の深さは1.6mある。井戸枠は掘形の大きい上部では縦板組、下部は掘形にほぼ沿わせて曲物を4段に積み上げている。縦板は幅の狭い板を円形に並べて、内側を棧で止めている。下部は曲物の部材を適宜転用している。掘形から平城宮Ⅲの可能性のある土器、埋土からⅣの土器や硯が出土している。E期まで存続する。

SA4790 (Pl. 18~20, Ph. 17~19・42・45) 6 AFI-T地区

内郭の東北部を区画する掘立柱の東西塀である。SA4180と柱筋が揃っているので、両者一体となって建てられたのであろう。SA4180から23間分西へ伸びて、北へ折れる。柱間は2.73mである。

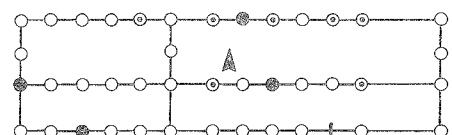
SA4860 (Pl. 20・25・30, Ph. 19・22・26) 6 AFI-T・U地区

内郭の東北部を区画する掘立柱の南北塀である。SA4790の西端から北へ伸びて築地SA5095に取り付く。柱間は2.66m。坪境小路東側溝SD4909より古く、1町単位に敷地が分割される以前の遺構である。一部は未発掘であるが、柱間寸法で割り付けると南北30間分となる。

SB4810 (Pl. 21・22, Ph. 20・21・51) 6 AFI-T地区

中央内郭北側にある掘立柱の東西棟建物。位置と規模からみて、SB4800を建て替えたものとみなすことができる。桁行12間、梁間2間の母屋の南に庇が付く。柱間寸法は桁行が変則的で、西から5間分

が2.25m、6間目は3.1m、7から11間目までの5間が再び2.25m、12間目すなわち東端は6.1mとなる。梁間は2.35m、庇の出は3.7mである。12間目は3.1mの2間分の可能性があるが、



SB4800
↓
SB4810

柱穴は検出しておらず、推測に留まる。母屋は柱掘形が一边1m程度でほとんどに柱根が残り、底は柱掘形一边が50cm前後と小さい。西から5間目にだけ棟通りにも柱が立ち、ここに間仕切りがあったことがわかる。この建物は方位が西で南へ1度49分振れている。

SB4845 (Pl.19, Ph.18) 6 AFI-T 地区

桁行1間以上、梁間2間の南北棟。柱間は梁間3m。SA4790とも柱筋が揃うので同時期の可能性がある。SB4841の妻と柱筋が揃う。

SB4841 (Pl.19, Ph.17・18) 6 AFI-T 地区

桁行1間以上、梁間2間の南北棟。柱間は梁間2.5m。ただし、西隅の柱はなく建物としてまとまるかどうか疑わしい。SB4845の妻と柱筋が揃う。

SK5074 (Pl.25, Ph.22・26) 6 AFI-T 地区

SA4870の北から4間目から7間目にかけて広がる浅い土坑。東西11m、南北8m、深さ0.4m。神亀5年の紀年のある木簡を含めて26点の木簡、平城宮Ⅱ・Ⅲの土器が出土した。この面ではSA4870を確認できなかったが、窪地を整地した土に遺物が混入したような状況であるので、SA4870の廃絶時期を示すと考えられる。

SE4615 (Pl.14, Ph.14・77) 6 AFI-S 地区

SB4620と重なる井戸。SB4620より古い。掘形は径2.1mのほぼ円形で、深さは1.6m、井戸枠は抜取られている。

E D 期の遺構 (Fig.107参照)

それまで4町が一体となって使われてきた敷地が、分割されて1町と2町となるという大きな転換のある時期である。発掘区の範囲で言えば、一・二坪と七・八坪の坪境南北小路、および七坪と八坪の坪境東西小路とそれに伴う側溝が設けられることになる。それに伴って坪の周囲を画する築地や掘立柱塀が設けられたと考えられる。築地そのものの痕跡はないが、石積み痕跡がある暗渠SX4555A・4557等の存在からこのことが推定される。築地SA5095・5096・4200・4195は多少の変更を経ながらも存続したであろう。門SB5090・4740は廃される。一方、坪の中は大規模な建物が少なくなってD期以降の変遷を捉えにくくなるが、二坪内でほぼ同じ位置に、似た規模の建物が重複していて、これが手がかりとなる。重複関係を模式的に示すと、次のように3時期となる。それをそれぞれD・E・F期にあてて、基準となる遺構と考えることにする。D期は恭仁宮から還都した直後の短い期間(745～750年頃)にあたる。

S B 4551 → S B 4575 → S B 4570

柱筋揃う 柱筋揃う

S B 4566 → S B 4565

D 期 E 期 F 期

i 一・二坪の遺構

SB4560A (Pl.13, Ph.12・38) 6 AFI-S 地区

二坪の東門 二・七坪境小路の西側溝SD4231に接してある2個の掘立柱穴で、二坪東辺の築地に開く門と考えられる。柱間は約3m。F期の門SD4560Bより古い。

SX4555A (Pl.13, Ph.12・38) 6 AFI-S 地区

SB4560Aの南にある暗渠である。F期のSX4555Bより古く、側壁に石を用いた痕跡がある。幅は不明。南北小路西側溝下層に注ぐ。

SX4556 (Pl.13, Ph.12) 6 AFI-S 地区

門SB4560Aの南にある暗渠である。上部は削平されて溝状にしか残っていない。門をはさんで次のSX4557と対する位置にあり、南北小路西側溝下層に注ぐ。

SX4557 (Pl.13, Ph.12・38) 6 AFI-S 地区

SB4560の北約2.6mにある暗渠である。上部は削平されているが両側に玉石の抜き取り穴が残る。幅約60cm。SB4500の柱穴より新しい。側石を用いるのはSX4555と共通し、門をはさんでSX4556と対することから、D期と推定した。

SD5258 (Pl.13・21, Ph.12・19) 6 AFI-S・T 地区

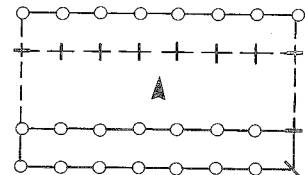
二坪東辺築地SA5333の内側、すなわち西の雨落溝である。一・二坪境小路を横断して北へ伸びており、坪境小路側溝に切られていて小路より古い遺構である。この溝の存在によって一・二坪は分割されず、2町の規模をもっていたことが推定される。

SA5333・5359 (Pl.12・13・20・21, Ph.12・19) 6 AFI-S・T・U 地区

SA5333は二坪東辺の築地。削平され暗渠からその存在が推定できる。基底部幅は上述のように6尺程度か。上述のようにSD5258が北へ伸びるので、この築地も一坪まで伸びていたであろう。一坪部分はSA5359とした。F期にも同じ位置に築地がつくられたと考えている。

SB4550 (Pl.13・14, Ph.13・47・48) 6 AFI-R・S 地区

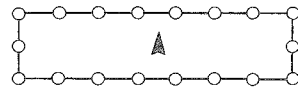
二坪内の最も規模の大きい東西棟の掘立柱建物。北端と南端しか検出していないが、桁行7間、梁間4間に復原でき、柱間寸法は桁行は3m等間、梁間は両端が2.8m、中央が3m2間と推定される。したがって、7間2面、または5間4面の平面形式であろう。



二坪の中核となる建物

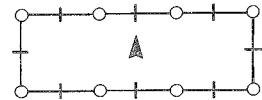
SB4551 (Pl.13・14, Ph.13・47) 6 AFI-S 地区

SB4550の北にあってSB4550と柱筋を揃えて建つ東西棟の掘立柱建物である。桁行7間、梁間2間。柱間寸法は桁行が3m、梁間が2.4mである。SB4550との間は4.2mあいている。



SB4581 (Pl.14, Ph.13) 6 AFI-S 地区

SB4551の北にある東西棟の掘立柱建物である。SB4551と柱筋を揃えており、SB4550・4551とともに一連の計画で建てられていることが知られる。平面は桁行3間、梁間1間で柱間寸法は桁行・梁間とも6mである。SB4550・4551と比べれば柱間寸法が2倍もあって異例である。各柱間中央に礎石建ちの柱が入って、桁行6間、梁間2間、柱間3mの建物と考えるのが妥当であろう。



SB4551との間隔は3mである。

SA5356 (Pl.13, Ph.12) 6 AFI-S 地区

SB4551の東妻の北側柱から東へ伸びる掘立柱塀である。3間分検出しており、西の1間は他の2倍の柱間があるので、おそらく4間等間、1間は2.25mとみなせる。SB4551等の建物に比べて塀の柱掘形は小さい。

SA4567 (Pl. 13, Ph. 12) 6 AFI-S 地区

SA5356に連なって南へ伸びる掘立柱塀である。4間分検出しており、柱間寸法は2.4mで、柱根は抜き取られずに残されて、一部はそれが腐り、一部は柱根が残る。柱径は15cmである。

SA4603 (Pl. 14, Ph. 13) 6 AFI-S 地区

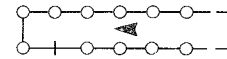
SB4551の西妻の南側柱から西へ伸びる掘立柱塀である。3間分あり柱間は2.5m、掘形は径50cm弱のほぼ円形で、簡略なものである。

SA4604 (Pl. 14, Ph. 13) 6 AFI-S 地区

SA4603の西端から北へ伸びる掘立柱塀である。3間分あり、柱間は2.5mで、SA4603同様の柱掘形は極めて小さい。

SB4620 (Pl. 14, Ph. 14・48) 6 AFI-S 地区

SB4550を中心とする建物群の西を限る掘立柱の南北棟建物。建物群の西妻からは12m離れている。5間分検出し、桁行柱間は2.4m、梁行は1間で2.65mである。SE4615より新しい。西の側柱筋はSB4625の棟通りと揃う。



SB4625 (Pl. 14, Ph. 14・48) 6 AFI-S 地区

SB4620の北端に取り付いて建つ南北棟の掘立柱建物である。桁行3間、梁間2間の総柱の建物で、柱間寸法は桁行・梁間とも1.8mと推定されるが、部位によって若干のむらがある。遺構図に示すように布掘風の地業が検出されているが、断割

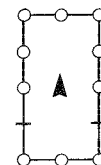


布掘風地業

り調査によって、まず柱掘形を掘って柱を立てた後、現存で深さ20cm程度の黄褐色の砂質土を版築状に積んで、柱根元を固めたものであることが判明した。

SB4640 (Pl. 14, Ph. 13・14) 6 AFI-S 地区

SB4625の北に建つ南北棟の掘立柱建物である。桁行4間、梁間2間で柱間寸法はむらがあるが、桁行・梁間とも2.7mとみてよい。一部の柱はSB4631・4632の柱穴に壊されて検出できず、D期に属する遺構と推察できる。

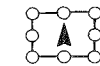


SA5357 (Pl. 15, Ph. 14) 6 AFI-S 地区

SB4640の南妻から西へ伸びる掘立柱塀である。6間分に該当し、内2個の柱穴は未検出である。柱間は2.95m、柱掘形は最大径50cm、西寄りでは30cm程度のごく小規模なものである。

SB5131 (Pl. 27, Ph. 24・58) 6 AFI-T 地区

一坪中程にある東西棟の掘立柱建物である。桁行2間、梁間2間で柱間寸法は桁行が2.3m、梁間が1.6m、柱穴から平城宮Ⅲ～Ⅳの土器が出土している。



ii 七坪の遺構

七坪の内部には顕著な建物がみいだせないが、坪西寄りに四角に巡る二重の溝の区画ができることが注目される。いくつかの井戸 (SE4145・4705・4340) はC期から存続する。北辺に掘立柱塀SA4486、西辺に掘立柱塀SA4487が設けられたと推定される。

SA4486 (Pl. 19・20, Ph. 18)

坪北・西限の掘立柱塀

坪の北面を限る掘立柱東西塀。柱間は約2.7m等間で、9間分を検出。掘形は一辺約0.3m。

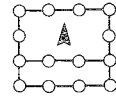
SA4487 (Pl. 12・20, Ph. 11)

坪の西面を限る掘立柱南北塀。方位は北でやや東に振れる。一部を欠くが、柱間は約2.7m

等間で、11間分を検出。掘形は約0.3mと小さい。

SB4467 (Pl.12, Ph.11) 6 AFI-S 地区

桁行3間、梁間2間の母屋の南に庇の付く東西棟の掘立柱建物。柱間は桁行2.3m、梁間1.9m、庇の出は1.8m。SB4463に切られており、E期以前に属す。また、この位置にはC期のSB4480があるので、必然的にD期の遺構となる。

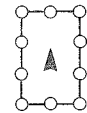


SB4436 (Pl.11, Ph.11) 6 AFI-S 地区

桁行3間、梁間2間の東西棟の掘立柱建物。柱間は桁行1.5m、梁間1.8m。B・C期のSA4389の柱穴を切り、E期のSB4435の柱穴に切られているのでD期になる。

SB4424 (Pl.11・19, Ph.17) 6 AFI-S 地区

桁行3間、梁間2間の南北棟の掘立柱建物。柱間は桁行2.27m、梁間2.1m。ただし、柱間寸法は不揃い。柱穴から平城宮Ⅲ～Ⅳの土器が出土。一応、D期に属すると考えるが、それ以後の可能性もある。



SD4162・4262 (Pl.4～7, Ph.3～6・34) 6 AFI-R 地区

幅1m弱の東西溝。とぎれながら七坪のほぼ7割の長さ分が残っている。SD4262は南北小路東側溝下層のSD4229Aとつながる。SD4162・4262は次のSD4163・4261と一体となって坪を細分する道SF4290を構成していたらしい。溝の心々距離は2.5m程度。

SD4163・4261 (Pl.4・5・7, Ph.3～6) 6 AFI-R 地区

とぎれとぎれに検出した幅50cmほどの東西溝。SD4261とSD4163で若干のずれがあるが、本来一連のものであろう。

SD4267 (Pl.5・6, Ph.5) 6 AFI-R 地区

幅50cmの東西溝。SD4280とややずれているが、あるいは一連の溝かもしれない。

SD4165 (Pl.4・5・8・16, Ph.4・8・16・41) 6 AFI-R・S 地区

七坪の中央付近を東西に分ける南北溝。最大幅2.5m、深さ35cm。東西小路南側溝下層のSD4359Aとつながる。E期のSE4380に切られている。

SD4164 (Pl.5, Ph.4) 6 AFI-R 地区

SD4165に平行し、幅最大80cm、長さ10m弱しかないが、SD4165と一体となって幅1.5m程度の道を形成していたのであろう。

SD4266・4280・4282・4461・4462 (Pl.6・7・11・12, Ph.5・6・10・11・32・34) 6 AFI-R・S 地区

この5本の溝は小路西側溝SD4231Aとともに、二重の溝を巡らせた区画を形成する。SD4266は幅2m、深さ25cm。B期のSB4270より新しく、E期のSB4269より古い。SD4280は幅1.5mの東西溝。SB4284に切られている。SD4282は幅1m弱の南北溝。C期のSB4285より新しく、SB4286はこの溝を切っている。SD4461は幅1m強、深さ35cmの東西溝。溝底でA・B期のSB4480を検出。SD4462は幅1mの東西溝。

二重の溝が
巡る区画

SD4208 (Pl.6, Ph.5) 6 AFI-R 地区

幅1m弱の南北溝。溝底でB期のSB4207を検出しており、B期よりは降る。

SE4260 (Pl.6, Ph.5) 6 AFI-R 地区

SD4267の東にある井戸である。掘形の径は2.1m、深さが約1.5mで、井戸枠は抜き取られている。B期のSB4255の柱掘形を切っている。埋土から平城宮Ⅲ～Ⅳの土器が出土している。

SE4217 (Pl. 7・38, Ph. 5・73) 6 AFI-R地区

坪の西南寄りにある井戸である。掘形は検出面で径2mのほぼ円形で、井戸枠は曲物を2段重ねている。曲物の径は下段が65cm、上段が73cm、両者の間がすくので楔を入れて止めている。また、両者の継ぎ目付近には縦板も入れて保護している。掘形から平城宮Ⅲ、井戸枠内埋土から平城宮Ⅴの土器が出土している。F期まで存続する。

SE4265 (Pl. 6・39, Ph. 5・74) 6 AFI-R地区

SD4262の北にある井戸である。C期の東西堀SA4181、E期の建物SB4269と重なり、SA4181→SE4265→SB4269の順に営まれたことが確認できる。掘形は径1.2～1.3mのほぼ円形、深さは95cm、中に曲物を2段重ねて井戸枠としている。曲物の径は55cmで、曲物の外に縦板4枚を差し込んで固定している。SE4217とほぼ同じ構造をもっている。井戸枠内から平城宮土器Ⅴが出土しているが、混入とみる。

SE4405 (Pl. 10・41, Ph. 10・76) 6 AFI-S地区

坪の北寄りにある井戸である。掘形は径1.5～1.6mの歪んだ円形で、深さは1.55mある。掘形の中に曲物を2段重ね、その上に縦板を並べている。曲物は外径で64～65cm、上下端と中程にたがをはめている。SB4400より新しく、埋土から平城宮Ⅲ古の土器が出土している。

SE4116 (Pl. 3・38, Ph. 3・73) 6 AFI-R地区

敷地の東南隅にある井戸である。SE4117と重なり、これより新しい。掘形の径2.5m、深さ2m程度で、井戸枠は縦板組である。4隅に角材を立てて、横桟を入れ、一辺に縦板4枚程度を立てている。埋土から平城宮Ⅲ～Ⅴの土器が出土している。奈良時代末、すなわちF期までは存続する。

iii 八坪の遺構

発掘面積も小さいために、顕著な建物遺構はみいだせない。南辺に築地SA4193、西辺にSA4194が設けられたと推定されるが、遺構として痕跡は残さない。

SD4779 (Pl. 18, Ph. 16・42) 6 AFI-T地区

八坪内のSD4165の北延長上にある南北溝である。幅1.5m程度だが部分的には広がる。

SD4787 (Pl. 19, Ph. 17) 6 AFI-T地区

SD4779の27m西にある南北溝。幅が一定しないことなどSD4779と状況が似ており、同時期の溝と推定される。A～C期の東西堀SA4790より新しい。平城宮Ⅲ～Ⅳの土器が出土。

SE4760 (Pl. 18・42, Ph. 17・78) 6 AFI-T地区

SA4180のすぐ内側にある井戸である。掘形は径2.3mの不整形な円形で、深さ2.5m。掘形の南に寄せて縦板組の井戸枠を組む。井戸枠は一辺75cmで、4隅に断面10cm角の角材を置き、横桟を現存で4段、柱に大入れとし、その外に各辺縦枚を2段に重ねて入れる。横桟のほぞは64cm間隔で、使用している以外にも他の面にもいくつか柄穴があって、転用していることが知られる。底には板を敷き礫を敷き詰めている。井戸枠内から天平勝宝七年の紀年銘のある檜扇が出土し、掘形から平城宮Ⅲ～Ⅳの、埋土からⅣ～Ⅴの土器が出土している。

SE4755 (Pl. 16) 6 AFI-T地区

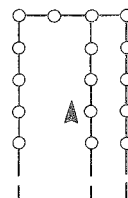
発掘区東端にある井戸である。掘形は径2.8m、深さは2.1m。井戸枠は抜取られている。埋土から平城宮Ⅲ～Ⅳの土器や土馬が出土した。E期まで存続する。

F E 期の遺構 (Fig.108参照)

E期には坪境小路が廃されて再び4町が一体の敷地になるという大きな変化がある。このことは一見、不思議に思えるが、二・七坪境小路に建つ建物SB4220と小路西側溝SD4231の重なる部分での土層観察によって確認されている。敷地の改変に伴って、一・八坪北辺と七・八坪西辺の築地は、再び小路部分を超えて繋がることになる。この時期もD期までに掘削された井戸SE4116・4145・4217・4386・4705・4340・4760は存続するが、全体的には敷地の改変に伴って建物の配置も変化する。ただ、A～C期のように整った配置はとらない。

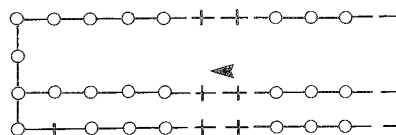
SB4566 (Pl.13, Ph.12) 6 AFI-S 地区

D期の二坪の項で説明したように、この場所に集中する遺構の重複関係によってE期にあたると考えられる南北棟の掘立柱建物である。桁行5間以上、梁間2間の母屋の東に庇が付く。柱間寸法は桁行が2.5m、梁間は母屋が2.6m、庇が¹⁾2.8mである。柱抜き取り穴から平城宮II～IIIとIV～Vの土器が出土。



SB4575 (Pl.14, Ph.13・47・48) 6 AFI-R・S 地区

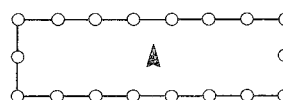
SB4566と相対峙して西側に建つ南北棟の掘立柱建物である。SB4566と概ね柱筋が揃っているが、僅かにSB4566が北に寄っている。途中、一部未発掘区があるが、桁行は9間以上あり、梁間は2間の母屋に西に庇



が付く。柱間寸法は桁行・梁間とも2.75mである。母屋の柱掘形は一辺1m程度あるが、庇は50cm程度と小さく、母屋と庇では構造が異なるかもしれない。

SB4631 (Pl.14・15, Ph.13・14・48) 6 AFI-S 地区

SB4575の西北にある東西棟の掘立柱建物である。桁行7間、梁間2間で、柱間寸法は桁行が2.5m、梁間が3m。僅かに西で北へ振れている。また、SB4575の西北隅の柱から北へ9m、西へ3mのところ、SB4631の隅の柱があって、規格性が窺える。

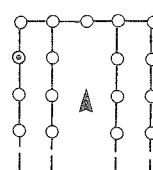


SB4680 (Pl.23, Ph.21・50) 6 AFI-S 地区

SB4631の西北にある東西棟の掘立柱建物である。桁行8間以上、梁間2間で南北に庇が付く。柱間寸法は桁行2.99m、梁間は母屋が3m、庇は南が²⁾2.4m、北が3m。基準尺度は1尺=29.85cmである。柱掘形は母屋が一辺1.3m程度、南の庇が70cm程度の不整形、北の庇が径40cm程度の不整形な円形と、それぞれ異なっており、庇の構造が母屋とは異なるのであろう。母屋柱の掘形から平城宮II～IIIとIV～Vの土器が出土している。

SB4220 (Pl.7, Ph.6・34) 6 AFI-R 地区

発掘区南端に建つ南北棟の掘立柱建物である。桁行3間以上、梁間2間の母屋の東西に庇が付く。二・七坪境小路西側溝の上層と下層に挟まれた層位で検出される遺構であることは先に述べた。柱間寸法は桁行が2.66m、梁間がすべて2.5m、掘形の深さは50cm程度である。柱穴から平城宮IV～Vの土器が出土している。



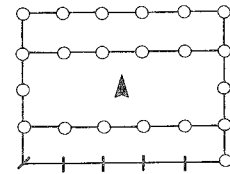
E 期の基準
となる建物

1) 柱は抜き取られて本来の柱位置が正確に把握できないので、梁間は2.7m等間の可能性もある。

2) 梁間の3mは全長が短いために正確に捉えられませんが、おそらく桁行と同じ2.99mであろう。

SB4205 (Pl. 6, Ph. 5・34) 6 AFI-R 地区

SB4220の東にある東西棟の掘立柱建物である。桁行5間、梁間2間の母屋の南北に庇の付く平面である。南の庇は柱穴1個を検出したにすぎない。柱間は桁行・梁間とも2.95m(10尺)である。掘形の深さは50cm程度である。掘形はA・B期の東西塀SA4210・4206の掘形を切る。

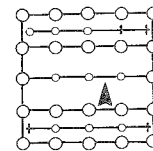


SE4209 (Pl. 6・38, Ph. 5) 6 AFI-R 地区

SB4205のすぐ西にある井戸である。発掘区の南壁にかかって全体は検出していないが、径が1.9m、深さ90cm。井戸枠の痕跡はない。埋土から平城宮Ⅳの土器が出土している。

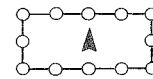
SB4240 (Pl. 6, Ph. 5) 6 AFI-R 地区

SB4205の北にある東西棟の掘立柱建物である。桁行4間、梁間2間の母屋の南北2面に庇が付く。柱間寸法は桁行が2.35m、梁間が2.45m、柱掘形がせいぜい一辺60cm程度の小規模なもので、柱径も細い。棟通りと庇の中間に床束がある。SB4269と柱筋が揃う。



SB4269 (Pl. 6, Ph. 5) 6 AFI-R 地区

SB4240の北にSB4240と柱筋を揃えて建つ東西棟の掘立柱建物。桁行4間、梁間2間で、柱間寸法は桁行2.35m、梁間2.1m。SB4240同様掘形が小さい。柱掘形がC期の東西塀SA4181、SE4265と重なり、SA4181→SE4265→SB4269の順に営まれたことが確認できる。SB4240・4269はSB4205と西妻の位置がほぼ揃う。



SE4268 (Pl. 6・39, Ph. 5・74) 6 AFI-R 地区

SB4269の西にある井戸である。掘形の径2.8m、深さ2.1m。井籠組の井戸枠を組む。井戸枠の一辺は1.2m、板の幅は20～25cm、厚さは3cm前後であり、8段組み上げる。B期のSB4270の柱掘形を切っている。掘形から平城宮Ⅲ～Ⅳの土器が、埋土からⅤの土器が出土している。F期までは存続する。

SA4292 (Pl. 7・12, Ph. 6・32) 6 AFI-R 地区

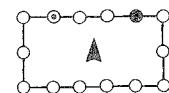
SB4240・4269の西北にL字形の掘立柱塀がある。これはその内の南北塀である。6間分あり、柱間はむらがあるが、平均2.6mである。掘形は深さ50cmである。

SA4394 (Pl. 12, Ph. 11) 6 AFI-R 地区

SA4292と一連の、L字形の掘立柱塀の内の東西塀である。9間分あって、5・6間目の間の柱だけは検出できていない。柱間寸法は2.48mである。この塀は、従来、東端がSA4380の柱筋にきてSB4285を囲む形になることからB・C期に属すると考えてきたが、二・七坪境小路東側溝SD4229の上層に切られ、下層を掘り込んで¹⁾いるらしいことからE期と考えるにいたった。

SB4463 (Pl. 12, Ph. 11) 6 AFI-S 地区

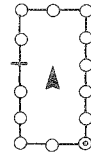
上記L字形の塀の北にある東西棟の掘立柱建物である。桁行5間、梁間2間で、柱間寸法は桁行は2.1m、梁間は2.5m、掘形は一辺50cm程度の方形で、深さは35cmのごく小さいものである。柱穴から平城宮Ⅳ～Ⅴの土器が出土している。



1) この関係を示す土層図は雨で崩壊して実測できず、という曖昧な表現しかできない。
遺構カードの記録も明瞭ではないので「らしい」

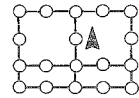
SB4435 (Pl. 11, Ph. 11) 6 AFI-S 地区

SB4463の東北にある南北棟の掘立柱建物である。桁行5間、梁間2間、柱間寸法は桁行2.1m、梁間2.5m。掘形は一辺50cm程度の方形で、SB4463と同規模である。柱穴や柱抜き穴から平城宮Ⅲ～Ⅳの土器が出土している。



SB4482 (Pl. 12, Ph. 11) 6 AFI-S 地区

SB4463の北に建つ東西棟の掘立柱建物である。桁行4間、梁間2間の南に庇が付き、2間目の建物中央棟通りにも柱が建って2間ずつに間仕切っている。柱間寸法は桁行2m、梁間母屋が2.1m、庇が1.4m、掘形は一辺50cm以下でごく小さい。



SA4491 (Pl. 12, Ph. 11) 6 AFI-S 地区

SB4482の西北にL字形の掘立柱塀がある。これはそのうちの東西塀で、8間分あり、柱間は2.3mである。東側溝SD4229の下層溝より新しく、上層の溝より古い。

SA4492 (Pl. 12, Ph. 11) 6 AFI-S 地区

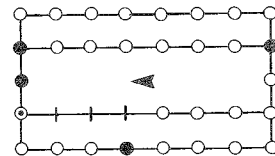
SA4491に連なって南へ伸びる掘立柱塀である。3間分あり、柱間は2.3mである。

SE4530 (Pl. 20・42, Ph. 18・78) 6 AFI-S 地区

SE4405の北西にある井戸である。掘形の径1.6m、深さ1.15m、一辺90cmの縦板組の井戸枠を用いる。井戸枠は4隅に一辺12cm程度の角材を立て、横棧を渡し、板5枚程度を並べる。深さ1.1m分遺存し、底に径40cm、深さ15cmの曲物を置く。B期のSB4520の柱穴を完全に壊して掘られており、掘形から平城宮Ⅲ古の、埋土から平城宮Ⅳ・Ⅴの土器が出土している。F期までは存続。

SB4100 (Pl. 5, Ph. 4) 6 AFI-R 地区

SB4240の東に離れて建つ南北棟の掘立柱建物である。桁行7間、梁間2間の母屋の東西両面に庇の付く平面で、柱間寸法は桁行が2.64m、梁間は母屋が2.35m、庇が2.7mである。柱根が残り、柱径は21cm。柱抜き穴から平城宮Ⅴの土器が出土している。



SE4185 (Pl. 5・39, Ph. 14・73) 6 AFI-R 地区

SB4100の西北にある井戸である。B期のSB4255の掘形を切っている。井戸の掘形は上部30cmほどは径2.7m、それより下は径1.75m、深さは1.5mである。井戸枠は一辺70cmの縦板組で、4隅に角柱を入れ、横棧を渡して、縦板3～4枚を入れている。横棧は72cm間隔で入れている。土圧で一部崩壊している。井戸掘形から平城宮Ⅲ新、井戸枠内埋土から平城宮Ⅳ・Ⅴの土器が出土している。F期までは存続する。

SE4365 (Pl. 10・40, Ph. 9・75) 6 AFI-S 地区

SE4185の東北にある井戸。掘形は径1.9m、深さ1.8m。井戸枠は一辺70cm程度の縦板組。4隅に角材を入れ、横棧で繋いで、縦板を打ち込む構造であるが、崩壊が著しい。掘形から斎串や小型素文鏡、平城宮Ⅲ新の土器、埋土から平城宮Ⅲ～Ⅴの土器が出土。F期までは存続。

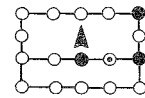
SE4720 (Pl. 8・41, Ph. 15・57・79) 6 AFI-S 地区

SE4405の東にある井戸である。掘形の径1.7m、深さ2.7m。一辺75cmの縦板組の井戸枠を用いる。井戸枠は4隅に角材を置き、横棧を入れて、各辺板5枚を立てる。4隅の角材は少しずれて2段分立てており、横棧の間隔は70cm程度である。この縦板組の下に径65cm、高さ35cmの曲物を置いている。井戸掘形から平城宮Ⅳ～Ⅴ、井戸枠内埋土から平城宮Ⅴの土器が出土している。

土している。F期までは存続する。

SB4369 (Pl.10, Ph. 9) 6 AFI-S 地区

桁行4間、梁間2間の母屋の南に底の付く東西棟の掘立柱建物。柱間は桁行2.25m、梁間1.8m、底の出は2.3m。B期のSB4410を切っている。柱掘形から平城宮Ⅲ～Ⅳ、Ⅳ～Ⅴの土器が出土している。



SE4380 (Pl.10, Ph. 8・76) 6 AFI-S 地区

SE4365の北にある井戸である。掘形は上部では径1.75mの隅丸方形であるが、20～30cmの深さで井戸枠ぎりぎりの大きさにせばまる。深さは1.3mある。井戸枠は縦板組で4隅に角柱を打ち込み、横棧を3段入れ、棧の間隔より若干長い縦板4～5枚を棧の位置で重ねながら組み上げている。棧の間隔は40～50cm、棧は丸太を割った材料、縦板は長さ60cmである。井戸埋土から平城宮Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの土器が出土。掘形はSD4165を切って掘り込んでいる。

SE4580 (Pl.13・40・43, Ph.12・77) 6 AFI-S 地区

大型の井戸 SB4566の北にある大規模な井戸である。掘形は一辺5mのほぼ方形で、深さ3.5m。井戸枠は厚板の井籠組で、長さ1.5m、幅25cm、厚さ5cmの板を13段組み上げる。SD5258を切って掘られている。掘形から平城宮Ⅲ、埋土から9世紀後半の土器が出土している。G期まで存続していると考えられる。井戸枠の年輪年代測定では、752年以後の伐採と判定されている。

SE4815 (Pl.19・43, Ph.18・78) 6 AFI-T 地区

発掘区北寄りにある井戸である。掘形は径2.5mの不整形な円形で、深さは1.6m。縦板組の井戸枠を組む。井戸枠は一辺85cmで、4隅に角材を置き横棧を現状で2段入れて縦板を入れる。横棧は105cmの間隔で入れる。掘形から平城宮Ⅲ～Ⅳの土器が、埋土からⅤの土器が出土している。F期までは存続する。

SA4881 (Pl.20～22, Ph.19～21) 6 AFI-T 地区

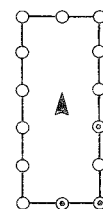
敷地の北方、一坪に相当する区域を区画するL字状の掘立柱塀がある。SA4881はそのうちの東西塀で、一・八坪境小路東側溝の東側の位置から西へ伸びて、それより東側にはない。一部の柱穴は検出されていないが、23間分あり、柱間寸法は2.63m、ただし、西から7間目のみ3mと広い。掘形の深さは50cmである。

SA5190 (Pl.22・27, Ph.21・24・58) 6 AFI-T・U 地区

SA4881の西端から北へ伸びる掘立柱塀である。これも柱穴の欠失が多いが、検出部分では柱間2.7m、検出していない部分では柱間寸法に乱れがある。

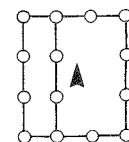
SB4990 (Pl.25, Ph.22・23) 6 AFI-T・U 地区

上記L字状の塀の東方にある掘立柱の南北棟建物である。桁行5間、梁間2間で柱間寸法は桁行・梁間とも2.85m。一部柱根が残り、柱径は20cm程度、掘形の深さは75cmである。東側柱はSA4870の柱掘形を切っており、柱穴から平城宮Ⅲ～Ⅳの土器が出土している。



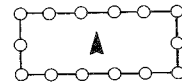
SB5050 (Pl.26, Ph.23) 6 AFI-U 地区

SB4990の西北に建つ南北棟の掘立柱建物である。桁行3間、梁間2間の母屋の西に底が付く。柱間寸法は桁行が3m、梁間が2.65m、底の出は2.4m、底の掘形が母屋よりやや小さい。柱穴から平城宮Ⅳ～Ⅴの土器が出土している。



SB5060 (Pl. 31, Ph. 26・61) 6 AFI-U地区

SB5050のすぐ北に建つ東西棟の掘立柱建物。東妻の柱はSB5050の東側柱と柱筋がほぼ通る。桁行5間、梁間2間で、柱間寸法は桁行が2.35m、梁間は2.3m。柱掘形から平城宮Ⅱ～Ⅲの、抜き穴からⅢ～Ⅳの土器が出土。

**SE5135** (Pl. 26・44, Ph. 24・58・80) 6 AFI-T地区

SB5050の西南にある井戸である。掘形は径1.9mのほぼ円形で、深さ1.9m。中に縦板組の井戸枠を組む。井戸枠は一辺約1.1mで、4隅に角材を立て、横棧2段を入れて外に縦板を置く。角材は11cm角、横棧は85cm間隔、板厚は39cmである。掘形から平城宮Ⅲ新の、埋土からⅤの土器が出土している。F期までは存続する。

SE5220・SB5354 (Pl. 28・42, Ph. 27・55・78) 6 AFI-U地区

SE5220は敷地の東北隅にある井戸である。掘形は径3.4mの円形で、深さ1.6m。断面形は底へ向かって急にすぼまる。井戸枠は上段が一辺0.7mの方形の縦板組、中段が円形曲物2段組、下段は円形曲物1段を組んで、底に礫を敷いている。縦板組部分は4隅に丸太を打ち、幅20cm程度の板を並べている。中段の曲物は径が80cm、下段は径45cmである。掘形は東辺の築地SA4195の想定位置にかかる。掘形から平城宮Ⅳ～Ⅴの、埋土からⅤの土器が出土。

SB5354はこの井戸を覆う井戸屋形である。柱間は東西が2.1m、南北が1.85mで、柱掘形は径・深さともに30cm程度の粗略なものである。井戸屋形の柱は井戸掘形を埋めた後で柱掘形を掘っている。F期までは存続する。

G F期の遺構 (Fig.109参照)

F期には再び敷地が分割され、1町もしくはそれ以下となる。その根拠はE期の項で示した。二坪北辺には暗渠SX5347、一坪南辺にSX5341・5342があつて、一・二坪も分割されたことがわかる。二坪東辺にはSX4555Bの暗渠が通る。この時期には一坪と二坪にそれぞれ建物がまゝとまって建ち並ぶ。井戸はE期から存続するものがある。SE4116・4145・4268・4365・4530・4705・4720・4815・5135・5220等である。SE4530・4815は八坪南にあり、この時期には南面築地はなかった可能性がある。

i 二坪の遺構

SX5347 (Pl. 23, Ph. 21) 6 AFI-S地区

二坪北辺にある暗渠である。長さ2.8mの溝状の遺構として検出され、中に長さ1mの木樋 木樋の暗渠の残骸が残っていて、暗渠と知られる。北は小路南側溝に流入している。SX4555Bの場合と同様に基底幅6尺程度の築地が通っていたのであろう。

SA5361 (Pl. 22) 6 AFI-S地区

二坪北辺の築地。削平され暗渠からその存在を推定。基底部幅は上述のように6尺程度か。

SD4560B (Pl. 31, Ph. 12・38) 6 AFI-S地区

二・七坪境小路の西側溝SD4231に接してある2個の掘立柱穴で、二坪東辺の築地に開く門と考えられる。柱間は3.5m、北の柱穴は柱根が残る。柱径は34cmで、底に石を入れて安定を図っている。

SX4555B (Pl.13, Ph.12・38) 6 AFI-S地区

SB4560の南にある暗渠である。上部は削平されているが、底が残り、長方形の埦を9個横に並べ、西端には正方形の埦1個を置いている。全長で1.9mとなり、正方形の埦を除けば全長1.65mとなる。この部分は掘形の幅は55cmあり、両側と天井にも埦を並べて暗渠としたのであろう。長方形の埦を並べた長さ1.65mの部分の心は、SB4560の柱筋と揃い、その部分が概ね築地に埋もれた部分となろう。したがって、築地基底部の幅は6尺程度と復元できる。暗渠は直接小路西側溝上流に流入している。

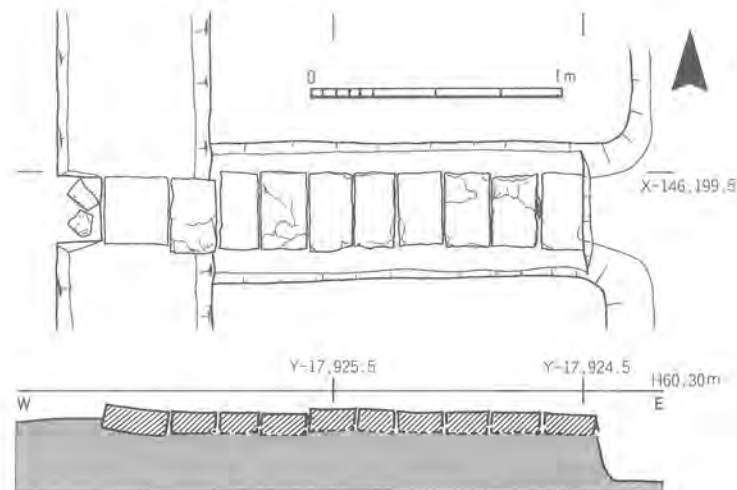
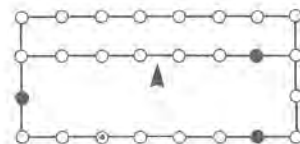


Fig.37 暗渠SX4555B実測図 1:30

SB4570 (Pl.13・14, Ph.12・13・47) 6 AFI-S地区

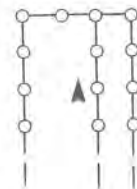
二坪の中核となる建物

発掘区の南端で検出した東西棟の掘立柱建物である。D期のSB4551やE期のSB4575と重なってそれらよりも新しい。桁行7間、梁間2間の北に庇の付く建物である。柱間寸法は桁行が2.94m、梁間が2.9m、庇の出は3.2mで、母屋掘形は一辺1.2m程度の楕円に近い方形、庇は径60cm程度のほぼ円形で、差がある。



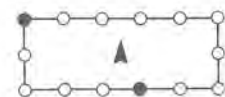
SB4565 (Pl.13, Ph.12) 6 AFI-S地区

SB4570の東に建つ南北棟の掘立柱建物で、南は発掘区外へ伸びる。E期のSB4566と僅かにずれがあるが、規模・構造ともによく似ていて、SB4566を建て替えたものとみなすことができる。桁行4間以上、梁間2間で東に庇が付く。柱間寸法は桁行が2.75m、梁間が母屋・庇とも2.7m。掘形の深さは70cmである。北妻はSB4570の母屋の北側柱列と筋が揃う。柱掘形から平城宮Ⅲ以降の土器、柱抜き穴からⅣ～Ⅴ、Ⅴの土器が出土している。



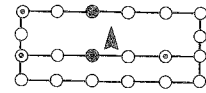
SB4632 (Pl.14・15, Ph.13・14・48) 6 AFI-S地区

SB4570の西北にある東西棟の掘立柱建物である。桁行5間、梁間2間で、柱間寸法は桁行が3m、梁間は2.7mである。掘形の深さは40cm程度で、僅かに柱根の残るもの、柱底に石を置いて礎板とするものがある。E期のSB4631とほぼ位置を同じくして建ち、SB4631を建て替えたものとみなせる。



SB4681 (Pl.23, Ph.21・50) 6 AFI-S 地区

SB4632の西北にある東西棟の掘立柱建物である。桁行5間、梁間2間の母屋の南に庇の付く平面である。柱間寸法は桁行が2.67m、梁間が母屋・庇とも1.67mである。庇の掘形は母屋に比べて小さい。母屋掘形は深さ80cm、柱径は20cmである。E期のSB4680の柱掘形を切っており、柱痕跡から平城宮Ⅲ以降の土器が出土している。



ii 一坪の遺構

SX5341・5342 (Pl.22・23, Ph.21) 6 AFI-S・T 地区

SX5341はSX5342の西にある南北の溝状遺溝。SX5342は坪の南端にある木製暗渠。

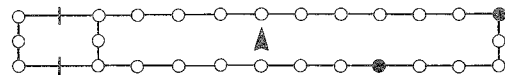
SX5341とSX5342の間隔は4mで、この間に門が建つ可能性がある。この位置はほぼ坪の中 一坪南門が中央にあたる。しかも、SX5341と二坪の暗渠SX5347は小路を挟んで南北に揃うので、二坪側にも門が開いていた可能性がある

SA5358 (Pl.21~23, Ph.19・20) 6 AFI-S・T 地区

坪の南端の東西築地。木製暗渠SX5342があることから存在を推定した。

SB4900 (Pl.22・23, Ph.20・21・51) 6 AFI-T 地区

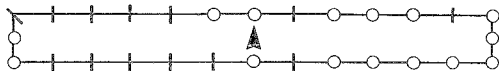
坪の南端にある東西棟の掘立柱建物である。桁行11間、梁間2間で、柱間寸法は桁行が2.97cm、梁間が1.85mである。ただし、西端の1間は5.94m、すなわち通常の2間分あり、かつ西から1間目には棟通りにも柱が建つ。あるいは桁行12間で、西端2間分に間仕切りがあり、西から1間目の柱は削平されたともみてもできよう。SB4920と南北に並んで建つ。A〜C期まで存続するSA4880の柱穴を切っている。



細長い建物

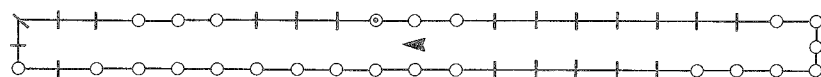
SB4920 (Pl.22・23, Ph.20・21・51) 6 AFI-T 地区

SB4900の北にこれと桁行総長を揃えて5.7mの間をおいて建つ東西棟の掘立柱建物である。柱穴が一部削平されている部分があって、桁行柱間数は確認できないが、検出している東半部ではSB4900と同じ柱間寸法であるので、12間であろう。梁間は2間。梁行の柱間寸法もSB4900と同じである。SB4920の柱穴はC期のSB4810の柱穴を切っており、それより新しい時期の遺構であることは確実である。



SB4871 (Pl.21・25, Ph.19・22・23) 6 AFI-T・U 地区

SB4920の北東にある南北棟の掘立柱建物であ



る。南北の端を検出し中央部は発掘区外であるが、柱間寸法から考えて、桁行17間以上、梁間2間の南北棟の掘立柱他建物である。北の端は土坑SK5074等で削平されて明確でないが、20間目までは伸びる可能性がある。南妻はSB4920の南側柱列とほぼ揃う。柱間寸法は桁行が2.98m、梁間1.78m、基準尺は1尺=29.8cmである。E期のSB4990の柱穴を切っており、F期に降る遺構と判明する。

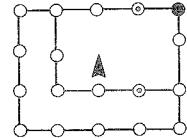
SE4885 (Pl.21・43, Ph.20・79) 6 AFI-T地区

SB4900の東方にある井戸である。掘形は径2.1mの円形、深さは2.9mである。井戸枠は一边80cmの方形の縦組で、4隅に角材を立て、横棧2段を入れて、4～5枚の縦板を組む。その深さは2.3mで、底には径60cmの曲物の井戸を置き、底に礫を敷いている。掘形から平城宮Ⅴの、井戸枠内埋土からⅣ・Ⅴの土器が出土している。

SB5000 (Pl.26, Ph.23・61) 6 AFI-T地区

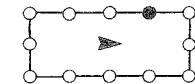
西と南に庇がつく建物

SB4871の西にある東西棟の掘立柱建物である。桁行3間、梁間2間の母屋の西・南2方に庇の付く珍しい平面で、柱間寸法は桁行が3m、母屋梁間は一定せず、東妻が北2.4m、南3.6m、西妻は北3.3m、南2.7m、庇の出は3mである。SB4871と柱筋が揃い、間隔は3.9mである。柱穴から平城宮Ⅲ～ⅣとⅣ～Ⅴの土器が出土している。



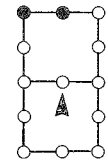
SB5160 (Pl.26, Ph.23・58) 6 AFI-T地区

SB5000の西にある南北棟の掘立柱建物である。桁行4間、梁間2間で柱間寸法は桁行が2.95m、梁間が2.4m。SB5030の柱穴を切っている。



SB5170 (Pl.27, Ph.24・58) 6 AFI-T・U地区

SB5160の東に建つ南北棟の掘立柱建物である。桁行4間、梁間2間で、桁行の中央に棟通りに柱が建ち、間仕切りがある。柱間寸法は桁行が2.45m、梁間が2.7m。棟通りの柱はSA5190の柱穴を切っている。柱抜き取り穴から平城宮Ⅱ～Ⅲの土器が出土している。



SE5140 (Pl.27・44, Ph.24・80) 6 AFI-T地区

SB5170の南にある井戸である。掘形は最大径4.5m、最小径3.5mの不整形な円形で、深さは3m。井戸枠は一木割抜の円形で、内径が90cm、板厚は6cm、現存の長さは2.6mである。掘形から平城宮Ⅳ以降の、埋土から平城宮Ⅴの土器が出土している。

iii 七坪の遺構

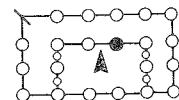
SD4433 (Pl.19, Ph.18) 6 AFI-S地区

七坪を東西にほぼ4等分する位置にある南北溝である。幅1m。七・八坪境小路南側溝から約15m続き、さらに30m程南でT字形に曲がる。坪を細分する溝であろう。南側溝下層とつながりF期以降になる。

SB4221 (Pl.7, Ph.6) 6 AFI-R地区

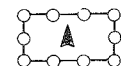
3面庇建物

発掘区南端近くにある東西棟の掘立柱建物である。桁行3間、梁間2間の母屋に東・北・西3面に庇を付けた平面である。柱間寸法は桁行が2.1m、梁間が1.88m、庇の出は東が2m、北が2.2m、西が2.6mと一定しない。母屋妻の各柱間にも柱があって、母屋は都合4等分されることになる。4等分する柱は床束であろう。柱抜き取り穴から平城宮Ⅳ～Ⅴの土器が出土している。



SB4212 (Pl.6, Ph.5・34) 6 AFI-R地区

発掘区南端の桁行3間、梁間2間の東西棟の掘立柱建物。柱間は桁行2.2m、梁間1.75m。E期のSB4205の柱穴を切っている。



SB4204 (Pl. 6, Ph. 5) 6 AFI-R 地区

SB4212の東に並ぶ桁行3間、梁間2間の東西棟の掘立柱建物。柱間は桁行1.63m、桁行1.6m。SB4212と南の側柱筋が揃う。



SE4225 (Pl. 7・39, Ph. 6・74) 6 AFI-R 地区

SB4221のすぐ北にある井戸である。掘形は径1.2mの円形、深さは1.4m。中に曲物を積んだ井戸杵を置く。曲物は径45cmと50cmで、高さが50cm程度のものを2段重ね、さらに上段の内部に一回り小さく高さ30cmの曲物を2段積んでいる。埋土から平城宮Ⅴの土器が出土している。

SK4264 (Pl. 6, Ph. 5) 6 AFI-R 地区

SB4221の北東にある土坑。径1.8mの円形で、深さ70cmと浅く、埋土はほぼ水平の層状になっており、井戸ではない。D期のSD4262を切っており、埋土から平城宮Ⅲの土器が出土。

SE4211 (Pl. 6・38, Ph. 5) 6 AFI-R 地区

SB4204の北にある井戸。掘形の径が1.9mのほぼ円形で、井戸杵は抜取られている。掘形から平城宮Ⅴの土器が出土している。

SE4395 (Pl. 11・41, Ph. 10・76) 6 AFI-S 地区

七坪の中央やや北西寄りにある井戸である。掘形は3.6mの不整形な円形で、深さは2.3mある。井戸杵は上部は方形縦板組、下部は曲物3段を組み上げる。縦板組部分は一辺1m程度で、隅の支柱は立てず横棧2段を組み立てて板を立てる。一番長い板で長さ1.6mある。曲物は上2段が径60cm強、最下段が径40cm強である。掘形から平城宮Ⅳ～Ⅴの土器が、埋土からⅤの土器が出土している。SA4250の掘形を切っている。

SB4730 (Pl. 16, Ph. 15・57) 6 AFI-R 地区

桁行3間、梁間2間の南北棟の掘立柱建物。柱間は桁行が2.3m、梁間が1.7m。柱抜き穴から平城宮Ⅲの土器と奈良時代末期の瓦が出土している。



iv 八坪の遺構

SE5205 (Pl. 24・42, Ph. 27・79) 6 AFI-T 地区

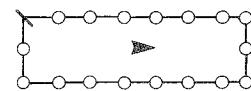
八坪の東端にある井戸である。掘形は径2.5m、深さは2.2m。縦板組の井戸杵を持つ。井戸杵は一辺80cm、4隅に10～15cm角の角材を立て、60～75cm間隔で横棧を入れた、縦板3枚ずつを立てる。埋土から平城宮Ⅴの土器が出土している。

H G 期の遺構 (Fig. 110参照)

F期に引き続き敷地が1町かそれ以下に分割された時期である。F期の建物や井戸の少なくとも一部は、この時期にも存続した可能性があるが、ここではF期以後と確認できる建物を取り上げておく。

SB5070 (Pl. 30, Ph. 22・25・26) 6 AFI-U 地区

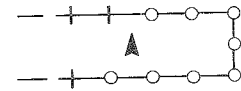
一坪の北辺にある南北棟の掘立柱建物である。桁行7間、梁間2間で、柱間寸法は桁行が2.37m、梁間が2.45mである。一坪北辺築地の南側溝SD5094の埋土の上から柱穴が掘られており、F期以後になる。柱穴や柱抜き穴から平城宮Ⅳ期以降の土器が出土している。



築地雨落溝
が埋った後
の建物

SB5085 (Pl. 31, Ph. 26・62) 6 AFI-U 地区

SB5070の西にある東西棟の掘立柱建物である。北側柱がSB5070の北妻と柱筋をほぼ揃える。桁行4間以上、梁間2間で、柱間寸法は桁行が3m、梁間が2.4m。SB5070同様SD5094の埋土の上から柱穴が掘られている。柱掘形から平城宮Ⅳ～Ⅴの土器が出土している。



SB4895 (Pl. 23, Ph. 21) 6 AFI-T 地区

一坪の南辺にある桁行3間、梁間2間の掘立柱の東西棟建物。柱間寸法は桁行1.8m、梁間1.75m。東妻から約2.4mに柱列があり、妻庇になる可能性がある。A～C期のSA4890およびF期のSB4900の柱穴を切っている。

SB4676 (Pl. 15, Ph. 14・21) 6 AFI-S 地区

二坪の西端にある桁行5間以上、梁間2間の東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行・梁間とも2.5m。A期のSB4670の柱穴を切っている。南側柱列は次のSB4675の南妻とほぼ揃う。両者の柱間寸法も同じである。

SB4675 (Pl. 15・23, Ph. 14・21) 6 AFI-S 地区

桁行4間、梁間2間の南北棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行・梁間とも2.5m。E期のSB4680の柱穴を切っている。したがって、F期に属することになるが、SB4681と重複するので、両者で時期差があることになる。SB4676とともにG期に比定。

SB4677 (Pl. 15・23, Ph. 14・21) 6 AFI-S 地区

桁行3間以上、梁間2間の南北棟の掘立柱建物。柱間寸法は桁行・梁間とも2.5m。E期のSB4680の柱穴を切っており、しかもF期のSB4681とも重複する。G期もしくはそれ以後となる。

SB4223 (Pl. 7, Ph. 6) 6 AFI-R 地区

七坪西寄りにある桁行4間、梁間2間の母屋に南に庇の付く東西棟の掘立柱建物。柱間は桁行2.7m、梁間は2.7m。方位が東で南へ振れている。F期のSB4221の柱穴を切る。

SB4286 (Pl. 7, Ph. 6・32・34) 6 AFI-R 地区

七坪の西寄りにある桁行4間、梁間3間の総柱の東西棟の掘立柱建物。柱間は桁行2.15m、梁間1.9m。南の柱掘形はやや小さいので、これが庇か縁になる可能性がある。C期のSB4285の柱穴を切り、しかもD期のSD4281やE・F期のSB4283・4284とも共存しないのでG期になる。

I 時期を決定しがたい遺構

i 八坪の遺構

a D期以前の遺構

SB4460 (Pl. 19, Ph. 18) 6 AFI-S 地区

七・八坪境小路北側溝の位置にある東西棟掘立柱建物。桁行3間、梁間2間で柱間寸法は1.63m、梁間1.6m。側溝下層下で検出しており、C期以前に属する。

以下の3棟は東の側柱列が南北に揃っており、同時期の遺構とみてよい。このうち、SB5200はE・F期の井戸SE5220にきわめて近接し、D期以前になると考えられる。

SB5200 (Pl. 28, Ph. 27・55) 6 AFI-U 地区

八坪東北隅にある4間分の南北方向の掘立柱列である。柱間は北から3.6m、2.7m、2.7m、3.9mと不揃いである。母屋の南北に広庇の付く東西棟建物の東妻と想定される。

SB5201 (Pl.24, Ph.27) 6 AFI-T地区

八坪東北隅にある二重に矩折に並ぶ柱穴群である。内側の柱は3個あり、掘形は一辺1mを越え、外側は6個あって、掘形は50cm程度と小さい。内側が母屋、外側が庇で、2面以上に庇の付く建物の東北隅であろう。柱間は母屋が桁行2m、梁間2.6m、庇の出は2.6mである。

SB5210 (Pl.28, Ph.27) 6 AFI-U地区

八坪東北隅にある2間分の南北方向の掘立柱列である。柱間寸法は2mで、東西棟の建物の東妻の可能性はある。

b D期以降の遺構

以下の2棟は同じ位置で重なって建ち、SB4781が新しい。

SB4781 (Pl.18, Ph.17・45) 6 AFI-T地区

桁行3間、梁間1間で西妻が2間割りの東西棟。柱間は桁行1.5m、梁間2.8m。

SB4782 (Pl.18, Ph.17・45) 6 AFI-T地区

桁行6間、梁間2間の東西棟。柱間は桁行1.8m、梁間1.75m。掘形は極めて小さい。C期のSA4180の柱穴を切っており、D期以降になる。

以下の5棟は発掘区北壁の際に建つ建物である。

SB4785 (Pl.18, Ph.17・45) 6 AFI-T地区

桁行5間、梁間2間の東西棟。柱間は桁行2.3m、梁間2.3m。棟通りに小穴が並ぶが、不揃いで一連の建物かどうか疑わしい。C期のSA4790と次のSB4791より新しい。

SB4791 (Pl.18, Ph.17・45) 6 AFI-T地区

桁行3間、梁間2間の南北棟。柱間は桁行1.9m、梁間1.5m。北妻の棟通り柱穴はずれており、これはこの建物の柱穴ではなく、さらに北へ伸びる可能性もある。SB4785より古い、C期のSA4790よりは新しい。

SB4840 (Pl.19, Ph.17・18) 6 AFI-T地区

桁行2間以上、梁間2間で東に庇がつく南北棟である。柱間は桁行1.9m、梁間2.8m、庇の出は1.4m。庇の掘形は小さく、縁の可能性もある。D期と推定するSD4787を切っている。

SB4842 (Pl.19, Ph.17・18) 6 AFI-T地区

桁行2間以上、梁間2間の南北棟である。柱間は桁行・梁間とも2.4m。東側柱列では柱間に1個柱穴がある。南妻の柱筋がSB4840とほぼ揃う。

SB4855 (Pl.20, Ph.18・42) 6 AFI-T地区

桁行3間以上、梁間2間の東西棟である。柱間は桁行1.8m、梁間2m。C期のSA4790の柱穴を切っている。柱穴から平城宮Ⅱ～Ⅲ・Ⅳ～Ⅴの土器が出土。SB4825と東側柱列が揃う。

SB4825 (Pl.20, Ph.18・19) 6 AFI-T地区

SB4855の南12.5mにあってSB4855と東側柱列を揃える東西棟の掘立柱建物。桁行3間、梁間2間の総柱で、柱間寸法は桁行1.7m、梁間2m。柱穴から平城宮Ⅲ以降の土器が出土した。

SB4816 (Pl.19, Ph.18) 6 AFI-T地区

東西、南北とも3間の掘立柱建物。柱間寸法は東西が1.47m、南北が1.67m。B期のSA4795 Bの柱穴を切っており、C期まで存続するSD4796とも共存しないのでD期以降に属する。方位が北で東に振れている。

SB4817 (Pl.19, Ph.18) 6 AFI-T 地区

桁行3間、梁間2間の南北棟掘立柱建物。柱間寸法は2.56m、梁間2.25m。C期まで存続するSD4796を切っている。また、SB4818の柱穴を切っている。方位が北で東に振れている。

SB4820 (Pl.20, Ph.18) 6 AFI-T 地区

桁行3間、梁間2間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行1.8m、梁間2.4m。A～C期のSA4880の柱穴を切っている。D期以降に属す。

c 時期不明の遺構

以下の2棟は八坪東辺築地位置にあり、築地設置前のA・B期か廃絶後の遺構である。

SB5202 (Pl.24, Ph.27) 6 AFI-T 地区

八坪東北隅にある南北棟の掘立柱建物である。桁行3間、梁間2間で柱間寸法は桁行1.8m、梁間1.5m。掘形は一辺50cm程度である。

SB5206 (Pl.24, Ph.27) 6 AFI-T・U 地区

八坪東北隅にある東西棟の掘立柱建物である。桁行3間以上、梁間2間で柱間寸法は桁行2m、梁間は2mと1.5m。掘形は一辺60cm程度である。

以下の2棟は同じ位置で重なって建つが、前後関係は確認できず、属する時期も不明。

SB4783 (Pl.18, Ph.17・44) 6 AFI-T 地区

桁行3間、梁間1間の東西棟である。柱間は桁行1.6m程度だが不揃い。梁間は4mである。

SB4784 (Pl.18, Ph.17・44) 6 AFI-T 地区

桁行2間、梁間2間の南北棟である。柱間は桁行2.7m、梁間2m。掘形は極めて小さい。

以下の2棟は近接して建つが、いずれも方位が北で東へ振れている。

SB4816 (Pl.19, Ph.18) 6 AFI-T 地区

東西・南北とも2間の掘立柱建物。柱間は1.8m、南北は1.9m、SB4817の柱穴に切られる。

SA4819 (Pl.19, Ph.18) 6 AFI-T 地区

SB4816に伸びる掘立柱の東西塀。4間分あり、柱間寸法は東から2.5、2.7、1.9、1.9m。

以下の5棟は近接して建つ。このうちSB4830の北妻とSB4831・4832の北側柱は、柱筋がほぼ揃う。

SB4830 (Pl.20, Ph.18) 6 AFI-T 地区

桁行3間、梁間2間で西に庇の付く南北棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行が北から2、2、2.5m、梁間は母屋が1.8m、庇が1.5m。北妻は次のSB4831の北妻とほぼ揃う。

SB4831 (Pl.20, Ph.18・42) 6 AFI-T 地区

東西・南北とも2間の掘立柱建物である。柱間寸法は東西1.8m、南北2m。

SB4832 (Pl.20, Ph.18・42) 6 AFI-T 地区

東西・南北とも2間の掘立柱建物であり、SB4831と重なる。柱間寸法は東西1.3m、南北2m。

SA4833 (Pl.20, Ph.18・42) 6 AFI-T 地区

SB4830と重なる南北塀である。2間分で柱間は2.3m。

SA4821 (Pl.20, Ph.18) 6 AFI-T 地区

SB4820・4825と重なる柱間7間の掘立柱東西塀。柱間寸法は1.7mで、4間目と7間目のみ2m。

SB4824 (Pl.20, Ph.18) 6 AFI-T 地区

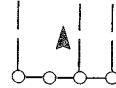
桁行・梁間ともに2間の東西棟。柱穴は小さい。桁行約3.5m、梁間約2.3m。



以下の3棟は位置が重なる。

SB4850 (Pl.20, Ph.18・42) 6 AFI-T 地区

桁行1間以上、梁間3間の南北棟である。梁間の柱間寸法は西から2.3、2.4、2.4m。東端の掘形はやや小さいので、母屋梁間2間で東に庇の付く平面かもしれない。南妻が次のSB4851の南妻とほぼ揃う。柱穴から平城宮Ⅳ～Ⅴの土器が出土しているが、混入の可能性がある。SB4852・4855の柱穴に切られている。



SB4851 (Pl.19, Ph.18) 6 AFI-T 地区

桁行1間以上、梁間2間の南北棟。柱間寸法は梁間1.6m。南妻がSB4850の南妻とほぼ揃う。

SB4852 (Pl.20, Ph.18・42) 6 AFI-T 地区

桁行1間以上、梁間2間の南北棟である。柱間寸法は梁間が1.8m。SB4850より新しい。

以下の3棟は同じ位置で重複し、柱穴の重複関係から、SX4973→SX4971→SX4972の順に営まれたことになる。建物か塀か不明なのでSXとした。

SX4972 (Pl.25, Ph.22) 6 AFI-T 地区

東西2間以上、南北1間以上の矩折れに並ぶ掘立柱の柱穴。柱間寸法は東西は2.9m、南北は3.2m。柱抜き穴から平城宮Ⅳ以降の土器が出土。したがって、廃絶はE期以降になる。

SX4971 (Pl.25, Ph.22) 6 AFI-T 地区

発掘区東壁にある3個の掘立柱の柱穴。柱間寸法は2.9mである。

SX4973 (Pl.25, Ph.22) 6 AFI-T 地区

東西2間以上、南北1間以上の矩折れに並ぶ掘立柱穴。柱間寸法は東西は3.3m、南北は2.7m。

ii 一坪の遺構

a D期以降の遺構

SB5010 (Pl.26, Ph.23・26・61) 6 AFI-T・U 地区

坪の東辺に建つ桁行5間、梁間2間の南北棟掘立柱建物。柱間寸法は桁行が北から1、2、1.7、1.7、1m、梁間は東から2.5、2m。柱掘形から平城宮Ⅲ以降の土器、抜き穴からⅣ以降の土器が出土。D期以降に属し、他の建物との重複からD期に存在した可能性がある。

以下の3棟は一坪北東部に重複して建つ。いずれもA～C期のSA5080と重複しD期以後となる。

SB5082 (Pl.31, Ph.26) 6 AFI-U 地区

桁行3間、梁間2間の南北棟掘立柱建物。柱間寸法は桁行1.73m、梁間は2m。A～C期のSA5080の掘形を切っている。

SB5083 (Pl.31, Ph.26) 6 AFI-U 地区

桁行3間、梁間2間の南北棟掘立柱建物。柱間寸法は桁行2.33m、梁間は2.5m。SB5084の柱穴に切られている。柱掘形から平城宮Ⅲの土器、抜き穴からⅢ以降の土器が出土。

SB5084 (Pl.31, Ph.26) 6 AFI-U 地区

桁行 3 間、梁間 1 間の東西棟掘立柱建物。柱間寸法は桁行が1.8m、梁間が3.6m。SB5083の柱穴を切っている。

以下の 2 棟は坪のほぼ中央部で重複する。SB5130が古く、SB5132が新しい。

SB5130 (Pl. 27, Ph. 24・58・72) 6 AFI-T 地区

東西 3 間、南北は一部発掘区外になるが 3 間と推定される掘立柱建物である。南に庇の付く平面形式と推定され、柱間寸法は東西が2.67m、南北が北は5.5m(おそらく 2 間相当)、南が 3 m である。柱掘形から平城宮Ⅲの土器が出土している。D期のSB5131より新しく E 期以降となる。

SB5132 (Pl. 26, Ph. 23) 6 AFI-T 地区

東西 3 間、南北は一部が発掘区外であるが 3 間であろう。柱間寸法は東西は2.4m、南北は8.7 mで、3 間が等間であれば2.9mとなる。SB5130より後、したがって F 期以降に属す。

SB5133 (Pl. 26, Ph. 23) 6 AFI-T 地区

北妻が E 期の SB5130 の北側柱列と揃う南北棟。桁行 1 間(2.6m)以上、梁間 2 間(4.8m)。

SE5125 (Pl. 27, Ph. 24・80) 6 AFI-T 地区

SB5130の西南にある井戸。掘形は径1.6m、深さ90cm。井戸枠は曲物を 2 段に組む。

SE5075 (Pl. 25・44, Ph. 22) 6 AFI-U 地区

一坪北寄りにある井戸。掘形は径1.7mのほぼ円形で、深さは1.6m。井戸枠は上が縦板組で下に曲物を置く。上段は一辺15cmの角柱を 4 隅に置き、2 段の横棧で板を受けている。角柱は曲物のある深さまで達して曲物を囲っている。掘形から平城宮Ⅲの土器、井戸枠内埋土から V の土器が出土。SE5087と近接し併存しないことから、F 期以降になろう。

b 時期不明の遺構

SB4995 (Pl. 25・26, Ph. 23・61) 6 AFI-T 地区

坪東辺に建つ桁行 3 間、梁間 2 間の東西棟掘立柱建物である。柱配置が不規則。柱間寸法は桁行は東から3.2、2、1.6m、梁間は北から2.5、2.1m。柱掘形は極めて小さい。

SB5195 (Pl. 27, Ph. 24) 6 AFI-T 地区

F期のSB5170の西にある桁行 3 間、梁間 2 間の東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行1.7m、梁間1.75m。

SX5196 (Pl. 27, Ph. 24) 6 AFI-T 地区

発掘区西端にある 3 間分の柱穴。建物か塀か不明である。柱間寸法は2.6m。

SB4940 (Pl. 23, Ph. 21) 6 AFI-T 地区

F期のSB4920と重なる位置にある南北 3 間、東西 2 間以上の建物の一部。柱間寸法は南北1.9 m、東西2.4m。掘形は一辺 1 m 強と大きく、A～C 期の建物に匹敵する。

SB4896 (Pl. 22, Ph. 20) 6 AFI-T 地区

C期のSA4880に重なって建つ掘立柱建物。ただし、切り合い関係はない。東西 2 間、南北 2 間で柱間寸法は東西2.2m、南北1.75m。方位の振れが大きい。

SA4861 (Pl. 20, Ph. 19) 6 AFI-T 地区

一・八坪間坪境小路上の掘立柱東西塀。3 間分あり、柱間は東から2.4、2.4、5 mと不規則。

SA4865 (Pl. 21, Ph. 19) 6 AFI-T 地区

一・八坪坪境小路のすぐ西にある掘立柱の南北塀。3間分検出し、柱間寸法は北から3、2.7、3mと一定しない。一坪の東辺を限る塀の可能性はあるが、南北に続かず断定できない。

SE5087 (Pl. 25, Ph. 26) 6 AFI-U地区

一坪北寄りにある井戸。掘形は径0.7mのほぼ円形で、深さは0.7m。井戸枠は曲物を2段以上積む。井戸枠内から平城宮Ⅳ～Ⅴの土器が出土。SB5070の柱穴に切られている。

iii 二坪の遺構

a C期以前の遺構

SB4233 (Pl. 7, Ph. 6) 6 AFI-R地区

A～C期の中央内郭の南寄りにある東西棟の掘立柱建物。東端を検出し、桁行は2間以上、梁間は2間。柱間寸法は桁行が2.8m、梁間が1.7m。二・七坪境小路西側溝下層より古い。

SA4291 (Pl. 7, Ph. 6) 6 AFI-R地区

SB4233の南にある掘立柱の東西塀である。5間分検出し、西へ伸びる可能性がある。柱間は東から2.5m、2m、それより西が2.3mと不規則である。二・七坪境小路東側溝下層より古く、またE期のSA4292の柱穴には切られている。

b C期以後の遺構

SB4654 (Pl. 15, Ph. 14) 6 AFI-S地区

A・B期のSB4651より新しい桁行3間、梁間2間の南北棟の掘立柱建物である。柱間寸法は梁行が2.6m、梁間が2.0m。柱掘形は一辺0.5m前後。北妻がSB4660の南庇の柱列にはば揃う。

c 時期不明の遺構

SB4660 (Pl. 15, Ph. 14) 6 AFI-S地区

発掘区西端にあり、削平されている部分もあって明確でないが、桁行2間以上、梁間2間で、北・東・南に庇のある東西棟の掘立柱建物。柱間寸法は桁行2.7m程度、梁間2.4m、庇の出2.4m。

SA4653 (Pl. 15, Ph. 14) 6 AFI-S地区

発掘区南端にある4間分の掘立柱列。おそらく南へ伸びて建物の一部になるのであろう。柱間寸法は3m。SB4651の南妻と柱列がほぼ揃うが、近接しているので併存するかどうか不明。

SA4656 (Pl. 15, Ph. 14) 6 AFI-S地区

発掘区南端にある4間分の掘立柱列である。柱間寸法は1.5mで西端のみ2.1m。

SB4652 (Pl. 15, Ph. 14) 6 AFI-S地区

発掘区南端にある南北棟の掘立柱建物の北妻。桁行1間以上、梁間2間で東に庇が付く。柱間寸法は桁行1.8m、梁間2.3m、庇の出が3m。A期のSB4651の柱穴を切っている。

SA4617 (Pl. 14, Ph. 13) 6 AFI-S地区

2間分の掘立柱の南北塀。柱間は7.2mと4.8m。したがって、2.4m等間で5間分に相当するが、間の柱穴は検出していない。D期のSB4620と柱筋が揃っているので一連の遺構の可能性はある。

SA4568 (Pl. 13, Ph. 12) 6 AFI-S地区

坪西辺にある2間分の掘立柱の南北塀である。柱間寸法は3m。

iv 七坪の遺構

a D期以前の遺構

SB4159 (Pl. 4・5, Ph. 4) 6 AFI-R地区

七坪を南北に分割するD期の道路SF4290の北側溝SD4162より古い掘立柱の南北塀である。南北2間で、総長約4m。

SD4215・4216 (Pl. 7, Ph. 6) 6 AFI-R地区

この2本の溝は七坪の南寄りにあり、組になって道路を形成していたと推測する。SD4216は北側の東西溝で、幅1.05m、深さ25cm。D期のSE4217に切られているので、C期以前に属する。SD4215は南側の東西溝で、幅1.3m、深さ40cm。

SB4155 (Pl. 5, Ph. 4・36) 6 AFI-R地区

坪東半部にある桁行5間、梁間2間の南北棟の掘立柱建物である。柱間は桁行が2.3m、梁間が1.8m。E期のSB4100の柱穴に切られており、D期以前に属す。また、SD4149を切っているため、この溝の廃絶するC期以降となる。

SA4238 (Pl. 7, Ph. 6) 6 AFI-R地区

二・七坪の坪境を東西に走る4間分の掘立柱塀である。柱間は東から2.3、2.3、2.5、2m。小路側溝の下層より下で検出されるので、C期以前に属する。

b C期以降の遺構

SB4170 (Pl. 5・10, Ph. 4・8) 6 AFI-R・S地区

坪東半部にある桁行7間、梁間2間の南北棟掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.94m(10尺)、梁間3.25m(11尺)。基準尺が1尺=29.4cmで、掘形も一辺1m程度と大きい。遺物包含層の上から掘形が掘られているので、D期以降に属すと考えられる。西側柱列はE期のSB4100の東入側柱列とほぼ揃う。

SB4130 (Pl. 3, Ph. 3) 6 AFI-R地区

坪東辺にある桁行3間、梁間2間の南北棟掘立柱建物。柱間は桁行が1.4~2mで不揃い、梁間が2.1m。SD4150上にあり、この溝が廃絶するC期以降となる。次のSA4131より古い。

SA4131 (Pl. 3, Ph. 2) 6 AFI-R地区

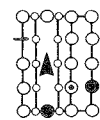
SB4120の北にある3間の掘立柱南北塀である。柱間は北から1.8m、1.5m、1.8m。SB4130の柱穴と重なり、これより新しい。したがって、D期以降となる。

SB4132 (Pl. 3, Ph. 2・3)

SB4130と位置が重なる桁行・梁間とも2間の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行が2.25m(7.5尺)、梁間が2.1m。SD4150上に柱穴がかかり、C期以降になる。

SB4320 (Pl. 9, Ph. 8) 6 AFI-S地区

坪の東北部にある桁行4間、梁間2間の母屋の東に庇の付く南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行が不揃いだが平均1.8mであり、梁間が1.7m、庇の出が1.5mである。梁行の柱間を2分する位置に床束が並ぶ。柱掘形から平城宮Ⅲの土器が出土している。C期以降に比定できる。



SB4283 (Pl. 7, Ph. 6・32) 6 AFI-R地区

坪の西寄りにある桁行3間、梁間2間の母屋の東に庇の付く南北棟掘立柱建物。柱間は桁行1.67m、梁間1.8m、庇の出は2m。D期以降のSB4284の柱穴を切っている。F期のSB4221および次述するSB4224とほぼ中軸が揃う。

SB4284 (Pl. 7, Ph. 6・32) 6 AFI-R地区

桁行3間、梁間2間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行1.9m、梁間1.8m。上述のSB4283の柱穴に切られ、D期のSD4280を切る。

SB4287 (Pl. 7, Ph. 6・32・34) 6 AFI-R地区

SB4283と重なる桁行3間、梁間2間の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行2m、梁間2.3m。D期のSD4281を切り、しかもG期のSB4286の柱穴に切られるので、E・F期になる。

以下の9棟は坪西辺のA・B期のSB4480と重なるか近接した位置にあり、C期以降に属する。

SB4391 (Pl. 12, Ph. 11) 6 AFI-R・S地区

桁行4間、梁間2間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行2.1m、梁間1.8m。B・C期のSA4389の柱穴やD期のSD4462を切っており、E期以降に属す。

SB4464 (Pl. 12, Ph. 11) 6 AFI-S地区

桁行2間、梁間1間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行1.25m、梁間1.3m。

SB4465 (Pl. 12, Ph. 11) 6 AFI-S地区

桁行3間、梁間2間の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行1.77m、梁間1.8m。D期のSB4467の柱穴を切っており、E期以降になる。

SB4468 (Pl. 12, Ph. 11) 6 AFI-S地区

桁行3間、梁間2間の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行2.2m、梁間2m。

SB4470 (Pl. 12, Ph. 11) 6 AFI-S地区

SB4510の南にある桁行3間、梁間2間の母屋の東西2面に庇を付けた南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行2.6m、梁間2m、庇の出は東が1.2m、西が1.5m。次のSB4475とともに、A・B期のSB4800の柱穴を切っており、しかも棟通りがSB4510・4285の東妻の柱筋とほぼ揃うことから、C期になる可能性が高い。

SA4472 (Pl. 12, Ph. 11) 6 AFI-S地区

SB4465の北にある掘立柱南北塀である。3間分検出し、柱間寸法は2.2m。

SB4471 (Pl. 12, Ph. 11) 6 AFI-S地区

SA4472と重なる桁行4間、梁間2間の東西棟掘立柱建物。柱間は桁行が2.47mだが西端のみ3.2m、梁間2.5m。方位が東で大きく南へ振れている。

SB4475 (Pl. 12, Ph. 11) 6 AFI-S地区

桁行3間、梁間2間の南北棟掘立柱建物。柱間は桁行2.97m、梁間2.5mだが、柱間寸法のばらつきが大きい。上述したようにSB4470と棟通りが揃うことから、C期になる可能性が高い。

SA4479 (Pl. 12, Ph. 11) 6 AFI-S地区

SB4471の北にある3間分の掘立柱東西塀である。柱間は1.5m。

以下の3棟は坪の北西部にあり、A期の塀SA4420あるいはB期のSA4415の柱穴を切り、しかもB・C期のSB4301とも共存しないので、D期以降になる。3棟とも位置が重なる。

SB4421 (Pl.11, Ph.10) 6 AFI-S 地区

桁行 3 間、梁間 2 間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行1.67m、梁間1.8m。

SB4422 (Pl.11, Ph.10) 6 AFI-S 地区

桁行 3 間、梁間 2 間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行2.57m、梁間 2 m。B期のSA4415を切っている。

SB4426 (Pl.11, Ph.10) 6 AFI-S 地区

桁行 3 間、梁間 2 間の東西棟掘立柱建物。柱間は桁行1.9m、梁間1.7m。SB4421より古い。

以下の 3 棟は坪の北辺中央で位置が重なり、C期の塀SA4180より新しいので、D期以降となる。柱穴の先後関係から、SB4368→SB4367→SB4364となる。

SB4364 (Pl.10, Ph.9) 6 AFI-S 地区

桁行 3 間、梁間 3 間の南北棟掘立柱建物。柱間は桁行が北から3.1、2.1、2.2m、梁間が 2、1.5、2 m。

SB4367 (Pl.10, Ph.9) 6 AFI-S 地区

桁行 3 間、梁間 2 間の東西棟の、総柱の掘立柱建物である。柱間は桁行1.67m、梁間1.6m。南に小さな柱列があり、庇になろう。

SB4368 (Pl.10, Ph.9) 6 AFI-S 地区

桁行 3 間、梁間 2 間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行1.67m、梁間1.6m。

以下の 2 棟は坪の北端中央にあり、C期の塀SA4180より新しいのでD期以降となる。

SB4375 (Pl.18, Ph.17) 6 AFI-S 地区

桁行 2 間、梁間 2 間の東西棟総柱掘立柱建物。柱間は桁行は東から2.7、3.1m、梁間は1.8m。

SB4378 (Pl.18, Ph.17) 6 AFI-S 地区

桁行 3 間、梁間 2 間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行が1.8m、梁間は 2 m。

SB4416 (Pl.19, Ph.17) 6 AFI-S 地区

SB4378の西にある東西 2 間、南北 2 間の掘立柱建物。柱間は東西が1.6m、南北は1.4m。B期のSA4415の柱穴を切る。

以下の 5 棟は坪の西北にあり、B・C期のSB4430やSA4389より新しく、D期以降になる。

SB4440 (Pl.11, Ph.10・11・40) 6 AFI-S 地区

桁行 3 間、梁間 2 間の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行2.6m、梁間2.6m。ただし、柱間寸法は不揃いである。

SB4450 (Pl.11, Ph.18) 6 AFI-S 地区

桁行 3 間、梁間 2 間の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行2.1m、梁間 2 m。

SB4448 (Pl.11・19, Ph.10・11) 6 AFI-S 地区

桁行 3 間、梁間 2 間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行1.7～2.5m、梁間1.5m。

SB4449 (Pl.11・19, Ph.11) 6 AFI-S 地区

桁行 3 間、梁間 2 間の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行1.9m、梁間 2 m。南妻がSB4450の南妻とほぼ揃う。

SB4451 (Pl.19, Ph.18) 6 AFI-S 地区

桁行 3 間、梁間 2 間の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行2.1m、梁間2.1m。

SE4160 (Pl. 4・38, Ph. 3) 6 AFI-R地区

坪の東辺にある井戸。掘形は径3.7m、深さ2mで、井戸枠は抜取られている。掘形から平城宮Ⅳ～Ⅴの土器、抜き穴からⅤの土器が出土。E期以降の時期で、F期までは存続する。

c 時期不明の遺構

SB4310 (Pl. 9, Ph. 8) 6 AFI-S地区

坪東半部にある東西・南北とも3間の掘立柱建物。柱間寸法は東西2m程度、南北1.8m。

SB4169 (Pl. 4, Ph. 4) 6 AFI-R地区

坪東半部にある桁行4間、梁間2間の南北棟掘立柱建物である。柱間寸法は北から1.7、1.7、2、2.3mと不規則、梁間は2m。北の妻の棟通り柱は検出しておらず、北へ伸びる可能性もある。方位が北で東へ振れている。SB4170の柱穴に切られていて古い。

SB4179 (Pl. 5, Ph. 4) 6 AFI-R地区

SB4169の南西にある桁行3間、梁間2間の掘立柱東西棟である。柱間寸法は桁行が1.8m、梁行が1.7m。

SB4188 (Pl. 9, Ph. 3) 6 AFI-R地区

SB4169の北東にある東西2間、南北1間の掘立柱建物。柱間は東西が1.8m、南北が4.2m。

SB4189 (Pl. 9, Ph. 3) 6 AFI-R地区

SB4188と位置が重なる桁行4間、梁間1間の東西棟の掘立柱建物である。柱間は桁行が1.7m、梁間が3.3m。

SB4140 (Pl. 4, Ph. 4) 6 AFI-R地区

SB4169の南にある東西2間、南北2間の掘立柱建物。柱間は東西が2.25m、南北が1.7m。

SB4110 (Pl. 3・4, Ph. 3) 6 AFI-R地区

坪東辺にある桁行5間、梁間2間の東西棟掘立柱建物。柱間は桁行が2m、梁間が2.4m。

SB4120 (Pl. 3, Ph. 3) 6 AFI-R地区

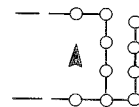
坪東辺にある東西推定3間、南北3間の掘立柱建物である。柱間は東西が1.4m、南北が北から1.8、1.2、1.8mと不規則である。

SB4133 (Pl. 8, Ph. 7) 6 AFI-R地区

坪東辺にある桁行3間、梁間2間の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行が1.65m(5.5尺)、梁間が2.1m。東側柱列がSA4131とほぼ揃う。

SB4706 (Pl. 9, Ph. 7) 6 AFI-S地区

坪東辺にある桁行3間、梁間は推定2間の母屋の東に庇の付く南北棟掘立柱建物。柱間は桁行が2.2m、梁間が2m、庇の出が2.1m。ただし、庇の柱筋は母屋と揃わないから、庇は母屋と別な簡略な構造か、別の塀かもしれない。SB4711と柱筋が揃い、方位の振れも近いので、同時期の可能性がある。



SB4711 (Pl. 8, Ph. 15) 6 AFI-S地区

SB4706の北東にある桁行3間、梁間2間の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行が1.9m、梁間が2m。柱穴から平城宮Ⅱ～Ⅲ古の土器が出土。東側柱列がSB4133の東側柱およびSA4130とほぼ揃う。



SB4712 (Pl. 9, Ph. 15) 6 AFI-S 地区

SB4711と重なる桁行1間以上、梁間は2間の母屋の南に庇の付く東西棟の掘立柱建物である。柱間は桁行が2m、梁間が1.9m、庇の出が2.5m。

SB4713 (Pl. 8, Ph. 15) 6 AFI-S 地区

SB4712と位置が重なる東西2間、南北1間の掘立柱建物である。柱間は東西が2.1m、南北が5m。南北の間の柱は削平されているのだろう。

以下の3棟は坪の北東部のほぼ同じ位置で近接して建つ。

SB4732 (Pl. 16, Ph. 15・57) 6 AFI-S 地区

東西2間、南北2間の掘立柱建物である。柱間は東西が1.75m、南北が1.75m。

SB4731 (Pl. 17, Ph. 15・57) 6 AFI-S 地区

桁行2間以上、梁間2間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行・梁間とも2m。

SB4733 (Pl. 17, Ph. 15・57) 6 AFI-S 地区

桁行2間以上、梁間2間の母屋の南に庇の付く東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行が2m、梁間が1.9m、庇の出は2.4m。

SB4350 (Pl. 17, Ph. 16) 6 AFI-S 地区

七坪の東北辺にある桁行5間、梁間2間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行2m、梁間1.8m。七・八坪境小路南側溝に近接しているため、D・F期以外の時期に属すであろう。東で南へやや振れている。

SB4345 (Pl. 17, Ph. 8) 6 AFI-S 地区

SB4350の南にある桁行3間、梁間2間の東西棟掘立柱建物。柱間は桁行・梁間とも1.8m。

SB4333 (Pl. 17, Ph. 8)

SB4345の西にある桁行3間以上、梁間2間の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行1.7m、梁間1.8m。側柱列はさらに北へ伸びる可能性がある。

SB4315 (Pl. 9, Ph. 8) 6 AFI-S 地区

SB4333の南にある桁行4間以上、梁間2間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行が2m以下、梁間が1.9m。東で柱穴が小さくなり、柱間寸法も乱れており東端は不明。

SB4330 (Pl. 9, Ph. 8) 6 AFI-S 地区

SB4333の南にある桁行3間、梁間2間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行1.6m、梁間1.5m。柱穴から平城宮Ⅲ以降の土器が出土している。



SB4325 (Pl. 9, Ph. 8) 6 AFI-S 地区

SB4330の南にある桁行3間、梁間2間の東西棟である。柱間寸法は桁行が1.6m、梁間が2m。方位が若干振れている。

SB4201 (Pl. 5, Ph. 5) 6 AFI-R 地区

七坪の中央やや南寄りにある桁行4間、梁間2間の南北棟掘立柱建物。柱間は桁行2.7m、梁間2.1m。北妻棟通りの柱は検出していない。南妻はE期のSB4100の南妻とほぼ揃う。

SB4241 (Pl. 5, Ph. 5) 6 AFI-R 地区

SB4201の北にある桁行3間、梁間1間の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行2.7m、梁間5.3m。妻の柱は検出していない。側柱列はSB4201の側柱とほぼ揃う。

SB4202 (Pl. 5, Ph. 5) 6 AFI-R 地区

SB4201と位置が重なる桁行4間、梁間1間の南北棟掘立柱建物。柱間は桁行・梁間とも1.7m。

SB4242 (Pl. 5, Ph. 5) 6 AFI-R 地区

SB4202の北にある桁行推定4間、梁間1間の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行1.75m、梁間1.7m。側柱列はSB4202の側柱列とほぼ揃う。

SB4201・4241とSB4202・4242は、それぞれ似た平面構成をもっており、しかもほぼ同じ場所に建つので、一つの建物を建て替えたと推定される。

SE4218 (Pl. 6・39, Ph. 5・74) 6 AFI-R 地区

SB4205と重なる位置にある小規模な井戸である。掘形は径1.2m、深さ0.5mの円形で、井戸枠は抜き取られている。

SB4214 (Pl. 6, Ph. 5) 6 AFI-R 地区

坪の南端ほぼ中央にある柱穴。桁行1間以上。梁間2間の西に庇の付く南北棟と推定される。柱間寸法は桁行1.7m程度、梁間がすべて1.6m。

SB4191 (Pl. 10, Ph. 9) 6 AFI-R・S 地区

C期のSA4180と重なる位置にある桁行3間、梁間2間の母屋の南に庇の付く東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行2.4m、梁間1.9m、庇の出は2m。北側柱列は後述する建物SB4385の北側柱列とほぼ揃う。

SB4295 (Pl. 10, Ph. 4・5) 6 AFI-R 地区

A期のSA4250より新しい桁行推定3間、梁間2間の東西棟掘立柱建物。柱間は桁行1.8m、梁間2.1m。

SB4271 (Pl. 6, Ph. 5) 6 AFI-R 地区

坪のほぼ中央部にある桁行2間、梁間2間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行2.8m、梁間2.2m。C期以降のSB4272の柱穴に切られている。

SB4272 (Pl. 6, Ph. 5) 6 AFI-R 地区

SB4271と位置が重なる桁行3間、梁間2間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行2.1m、梁間1.8m。SB4271とA期のSB4275の柱穴を切っている。

SB4273 (Pl. 6, Ph. 5) 6 AFI-R 地区

坪のほぼ中央にある桁行2間、梁間2間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行2.4m、梁間1.7m。

SB4385 (Pl. 11, Ph. 10) 6 AFI-R・S 地区

坪のほぼ中央にある桁行3間、梁間2間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行2m、梁間1.6m。北側柱列は前述のSB4191の北側柱列とほぼ揃う。

SB4222 (Pl. 7, Ph. 6) 6 AFI-R 地区

坪の西寄りにある桁行3間、梁間2間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行1.7m、梁間2.8m。妻の柱穴が小さい。方位が東で南へ振れている。

SB4224 (Pl. 7, Ph. 6) 6 AFI-R 地区

坪の西寄りにある桁行3間、梁間2間の東西棟掘立柱建物。柱間は桁行2m、梁間2m。G期のSB4223の柱穴に切られている。F期のSB4221と中軸がほぼ揃う。柱穴から平城宮V以降

の土器が出土している。

SB4226 (Pl. 7, Ph. 6) 6 AFI-R 地区

坪の西寄りにある桁行 3 間、梁間 1 間の南北棟掘立柱建物。柱間は桁行1.5～2.1mと不揃いで梁間3.5m。方位が北で東へ振れている。次のSB4227より新しく、G期のSB4223より古い。

SB4227 (Pl. 7, Ph. 6) 6 AFI-R 地区

坪の西寄りにある桁行 5 間、梁間 2 間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行1.96m、梁間1.8m。方位が東で北へ振れている。G期のSB4223の柱穴に切られている。C期以前のSA4238と柱筋が通る。

SB4274 (Pl. 6, Ph. 5) 6 AFI-R 地区

坪の西寄りにある桁行 3 間、梁間1間の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行北から3.5、2.5、2.5m、梁間 2 m。A期のSB4275の柱穴を切っている。

SB4277 (Pl. 6, Ph. 5) 6 AFI-R 地区

SB4274と位置が重なる東西 2 間、南北 2 間の総柱の掘立柱建物である。柱間は東西 2 m、南北1.8m。SB4274の柱穴に切られている。

SB4483 (Pl. 12, Ph. 11) 6 AFI-S 地区

坪北西部にある東西 2 間、南北 2 間の掘立柱建物である。柱間は東西 2 m、南北2.4m。

SA4488 (Pl. 12, Ph. 11) 6 AFI-S 地区

坪北西部にある桁行 5 間分の掘立柱東西塀である。柱間は桁行2.2m。

SB4501 (Pl. 20, Ph. 18) 6 AFI-S 地区

坪北西部にある桁行 3 間、梁間 2 間の東西棟掘立柱建物。柱間は桁行 2 m、梁間1.5m。

SB4502 (Pl. 20, Ph. 18) 6 AFI-S 地区

坪北西部にある桁行 3 間、梁間 2 間の東西棟掘立柱建物である。柱間は桁行1.8m、梁間1.7m。上述のSB4501と位置が重なるが、柱穴の切り合いはない。

SB4423 (Pl. 11, Ph. 10) 6 AFI-S 地区

坪の西北部にある桁行 3 間、梁間 2 間の南北棟掘立柱建物である。柱間は桁行3.15m、梁間2.6m。A期のSA4420の柱穴を切る。

SB4396 (Pl. 10, Ph. 9) 6 AFI-S 地区

SB4423の東にある南北 3 間、東西 1 間以上の建物の一部。北に庇が付くと考えられるが、東側の柱が検出されていない。柱間は南北が平均 2 m、東西が1.7m。北妻の柱列はD期以降のSB4367の庇の柱列とほぼ揃う。

SB4376 (Pl. 18, Ph. 17) 6 AFI-S 地区

SB4396の北にある桁行 2 間、梁間 2 間の東西棟掘立柱建物である。桁行総長 6 m、梁行総長3.5mで柱間寸法は一定しない。東で北へ振れている。

SB4377 (Pl. 18, Ph. 17) 6 AFI-S 地区

SB4396と重なりこれより新しい東西 2 間、南北 2 間の掘立柱建物である。柱間は東西が2.25m、南北は 2 m。

SB4425 (Pl. 19, Ph. 17) 6 AFI-S 地区

坪北辺にある桁行 3 間、梁間 1 間の南北棟掘立柱建物。柱間は桁行1.8m、梁間3.5m。

J 平城京以前の遺構

SD5230 (Pl. 24, Ph. 27・56, Fig. 38・40) 6 AFI-T・U地区

調査区東北辺にある北で約45度東へ振れる溝である。埋土から布留式の土師器(5世紀後半)が出土。幅3m、深さ25cm。1990年度にこの東で実施した第215-3次調査でも、同時代の途中で途切れる相似た構造の溝SD08を検出している。SD5230とは直交する。これらは古墳の濠とみるには幅が狭く、土師器を多量に含むこと、次述するように溝区画内に方位が一致する建物があることから、古墳時代の居館(以下、居館Aと呼ぶ)を画す濠であった可能性が高い。

5世紀後半
の居館

規模については第193F区と間の未調査区に南西辺があると判断し、一辺が内寸法で38~39m程と考えている。SD5230が途切れる北西辺と、第215-3次調査のSD08が途切れる北東辺のほぼ中央が入口になろう。なお、この居館Aは付近の奈良時代の柱穴などから出土した須恵器からみて、6世紀にも存続した可能性がある。

SB5203 (Pl. 24, Ph. 7) 6 AFI-T地区

SD5230と方位を揃えて建つ掘立柱建物である。このことから古墳時代の遺構とみられる。桁行3間、梁間2間と推定され、柱間は桁行1.25m、梁間1.3mと1.9m。掘形の深さは25cm程度、柱根の径は10cmである。

SD4411・4412・4413・4414 (Ph. 1・17~19, Fig. 39・40) 6 AFI-S・T地区

これら4条の溝は調査区中央部の奈良時代の整地土下で部分的に検出した。調査終了後に土層図、遺構図および航空写真を検討し、ほぼ方形の区画を形成する一連の溝と判断した。

SD4411は第184次調査で27mにわたって検出した。東端の断割り(Fig. 39)では幅7.4m、深さ1m以上だが、それ程深くならないことを確認している。埋土は上半部が地山の地に似た黄褐色あるいは黄灰褐色粘質土で、人為的に埋戻していることがわかる。SD4412は、第184次調査区の中央部でカーブしながらSD4411とつながることを確認し、第184次と第186次北区の北壁の断割りでは奈良時代の整地土下で西肩を検出している。SD4413は、第197次調査の南壁で東肩を検出している。SD4413とSD4411の交点は確認できないが、柱穴の断割り図面からFig. 40のように推定できる。SD4414は

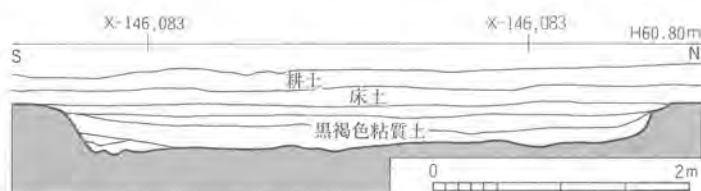


Fig. 38 居館の濠SD5230土層図 1:60

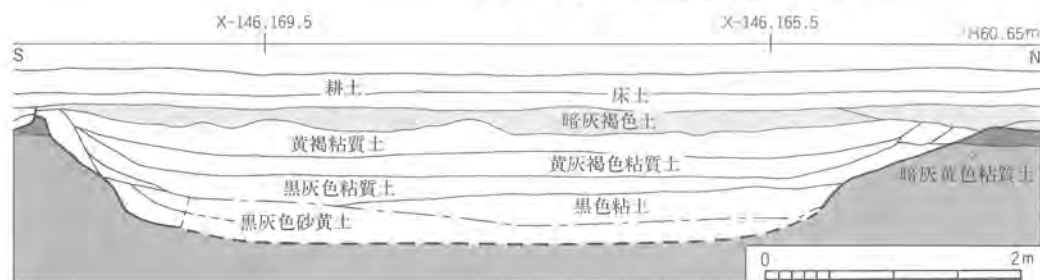


Fig. 39 居館の濠SD4411土層図 1:60

1) 奈文研『1990年度平城宮概報』1991, pp.92・93

第197次調査の東壁と柱穴の断割りによって、幅が約3m、深さが0.4m前後とわかる。

方形区画の規模は、内寸法で南辺の東西長が70m前後、北辺の東西長が50m前後、南北長が約80mとなる。区画内で建物を検出していないが、古墳の濠ではなく、居館を画す濠である可能性が高い（以下、居館Bと呼ぶ）。年代を窺う遺物は発見していない。既述した5世紀後半の居館Aが北で約45度東に振れるのに対して、居館Bの方位が真南北である点は大きく異なる。推測の域を出ないが、7世紀初頭頃に設けられ真南北の官道である下ッ道（第II章2A参照）が西約600mにあり、これにあわせて居館を新たに設けた可能性は十分あろう。

7世紀と推測する居館

SD1560 (Pl. 3・4, Ph. 3・7) 6 AFI-R・S地区

調査区東南隅にある菰川の旧流路である。幅4～16m、深さ約1.5m。埋土には弥生時代から8世紀初頭の遺物が含まれ、これを掘り直してSD4150が設けられる（第III章1A参照）。

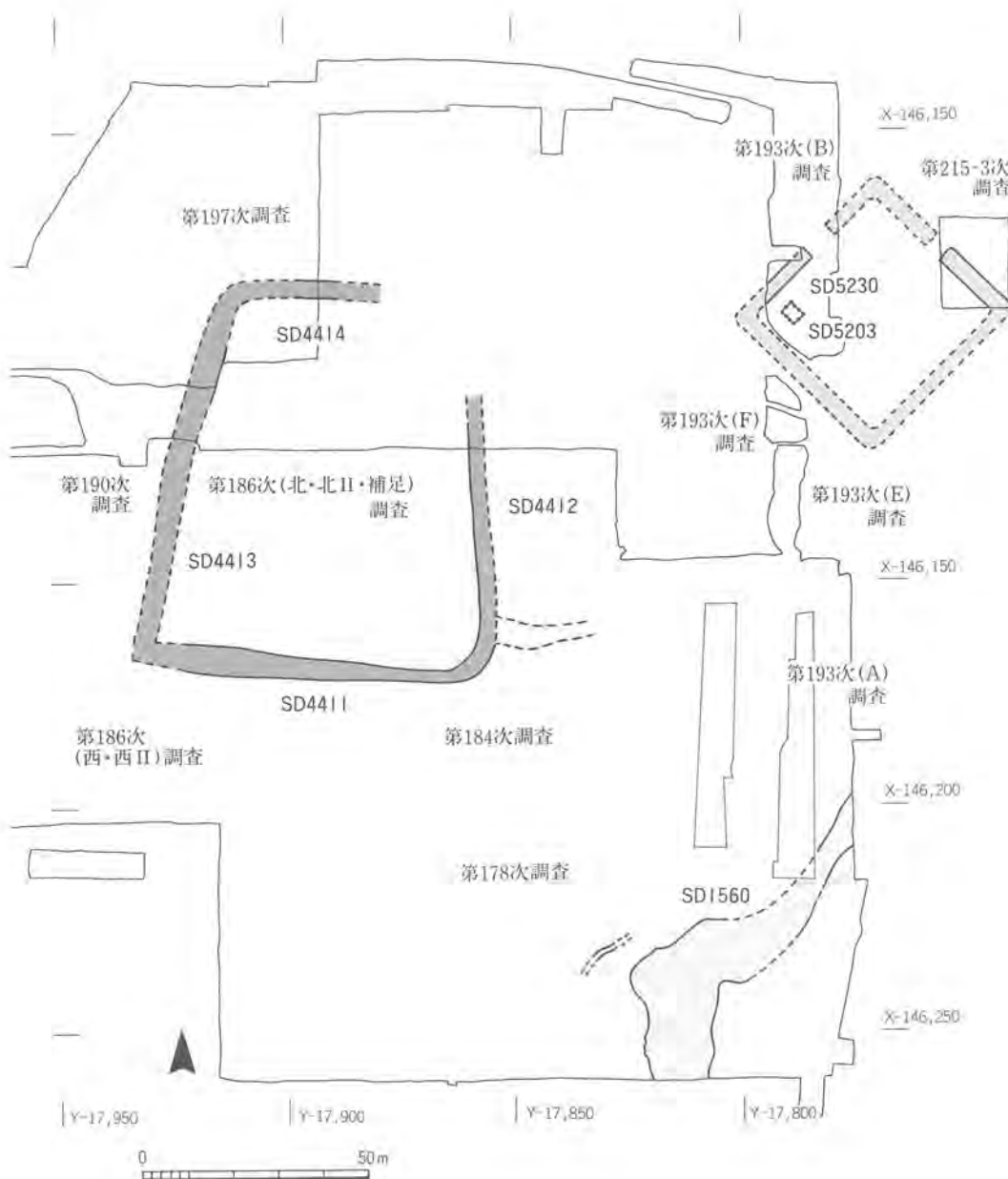


Fig. 40 居館復原図 1 : 1600

4 左京二条二坊五坪の遺構

A 時期区分

左京二条二坊五坪は、狭い範囲を5次にわたって調査しているため、遺構のまとまり具合や各発掘区の遺構の関連が不明瞭である。さらに、南の三条二坊の遺構との関連も正確には把握しがたい。しかし、基本的には、五坪は奈良時代を通じて少なくとも1町全体を一つの敷地として利用していた。この間、建物は各時期毎に大きく建て替えられていて、坪を囲む二条大路や東二坊々間路にもその側溝に3度の改修がある。建物等の重複関係や配置および出土遺物（別表3・4、Tab.11～

五坪の 時期区分	時期区分の 推定年代	土 器	軒 瓦
a・b期	8世紀前半前葉	平城宮Ⅰ・Ⅱ	Ⅰ・Ⅱ-1
c期	8世紀前半後葉 天平17年 745	平城宮Ⅱ古	Ⅱ-2
d期	8世紀中頃	平城宮Ⅲ新	Ⅲ
e期	750～760年代	平城宮Ⅳ	Ⅳ
f期	ほぼ770年代	平城宮Ⅴ	Ⅴ
g期	8世紀末頃～ 9世紀前半	平城宮Ⅴ～	

13) から、五坪の遺構はa～g期の7時期に分けられる。各時期の具体的な年代は、a・b

Tab.16 遺構の時期区分と土器・軒瓦編年の対照 7 時期区分

期が奈良時代初頭～前半、c期が奈良時代前半から平城遷都（745年）頃まで、d期が平城遷都（745年）後の奈良時代中頃、e・f期が奈良時代後半～末頃（750～770年代）、g期は奈良時代末～平安時代初め頃にあてられる（Tab.16）。

B a期の遺構 (Fig.104参照)

a期には、五坪の南面に築地SA5245、東面に築地SA5025が設けられ、条坊の区画ができあがる。築地の外には、二条大路SF5110とその南北の側溝SD5240・5105と、東二坊々間路SF4700とその西側溝SD5021が設けられる。坪の中にはこの時期に属する建物は少ない。

SA5025 (Pl.32・35, Ph.67) 6AFF-J・K地区

五坪東面の築地塀である。築地積土は遺存していないが、東西両側に溝（SD5021・5031）があり、溝に挟まれた部分が築地と推定される。溝の間の平坦面の幅は2.5m程度であるから、築地の基底部幅は最大でも8尺となろう。g期まで存続する。

SD5031 (Pl.32, Ph.67) 6AFF-J・K地区

築地SA5025の西側の雨落溝である。幅1.1m、深さ0.7mの素掘りである。c期まで存続。

SA5245 (Pl.32～34, Ph.29・30・63・66) 6AFF-J地区

五坪南面の築地である。SA5025同様、築地積土は遺存していないが、南北両側に溝（SD5244・5246・5240）があり、溝に挟まれた部分が築地と推定される。また、一部に築地を積み上げる際の寄せ柱穴とみられる小穴SX5247があり、この間隔から基底部幅6尺と考えられる。この築地に門が当初から開いていたか否かは定かでない。g期まで存続する。築地北側には落下したと思われる瓦が多数出土した（Ph.66）。

SD5246 (Pl. 32・33, Ph. 29・63) 6 AFF-J 地区

SA5245の北雨落溝である。幅は50cm。南北溝SD5243に切られている。c期まで存続。

SB5270 (Pl. 35, Ph. 29) 6 AFF-J 地区

坪の東寄りにある建物である。発掘区内で建物が完結すると仮定すれば、東西・南北ともに3間の平面となる。柱間寸法は南北1.8m、東西は1.5m。SB5250・5260の柱穴に切られており、それらより古い遺構である。c期まで存続か。



C b期の遺構 (Fig. 105参照)

b期には敷地の基本的な構成は変わらず、SA5245・5025、SD5021・5031、SD5240・5246が存続する。また、SB5270も存続している。

SB5315A (Pl. 34, Ph. 30・71, Fig. 41) 6 AFF-J 地区

五坪の南門 南面築地SA5245に開く掘立柱の門である。坪をほぼ4等分する位置に建つ。1間の棟門で、柱間寸法は3.9mである。柱掘形から平城宮Ⅱの土器が出土している。

SB5280 (Pl. 35, Ph. 29・63) 6 AFF-J・K 地区

発掘区の壁にかかって検出した4間分の柱穴。おそらく建物の東端であろう。柱間寸法は2.5mである。柱穴から平城宮Ⅱ～Ⅲの土器が出土している。c期まで存続か。



D c期の遺構 (Fig. 106参照)

c期の坪の区画も変化がなく、SA5245・5025、SD5021・5031、SD5240・5246が存続する。なお、この時期には二条大路の北端にSD5300・5310が開鑿されるのが注目される。これは二条大路の南端にあるSD5100と併存するもので、いずれからも多数の木簡や木製品が出土している。そのうちの「中宮職移兵部省卿宅政所」の木簡から、五坪は奈良時代前半に藤原麻呂に関わる邸宅であったと推定されている。SB5270・5280は存続している可能性があるが、他方、坪の内部に大規模な建物がみられるようになる。

SB5315B (Pl. 34, Ph. 30・71, Fig. 41) 6 AFF-J 地区

南門の改築 南面築地SA5245に開く礎石建ちの門である。SB5315Aの柱を抜いた後、抜き穴を埋めて礎石を据えている。礎石は残っていないが、根石が残るので礎石の存在が推定できる。規模・構造はSB5315Aと変わらない。この根石とともに平城宮Ⅱ-2期の瓦が出土している。

SB5390 (Pl. 36, Ph. 31・37)

6 AFF-K 地区

C期の中核となる建物

発掘区(第204次)北端にある掘立柱の規模の大きな東西棟建物である。桁行は2間以上、梁間は3間の母屋の北に庇が付く。柱間寸法は桁行が3m、母屋の梁間は3.1m、庇の出は3m弱である。柱掘形は一辺1.5

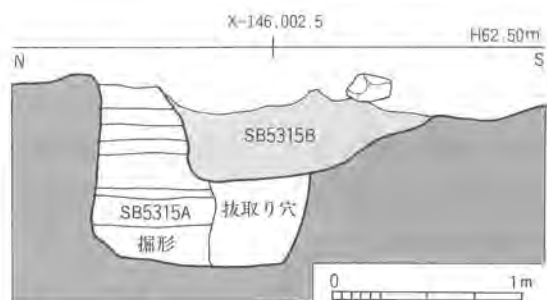
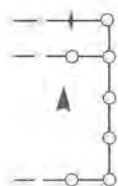


Fig. 41 SB5315柱穴断面図 1:40

～2mと大きい。掘形の深さは80cm程度で、柱底にあたる部分に根固めの礎板を置いている。SB5390の柱穴はD期の塀SA5345の柱穴に切られている。柱掘形上の穴から平城宮Ⅱ～Ⅲの土器と、Ⅳの土器およびⅢ-2・Ⅳ-1期の瓦が出土しているが、後者は壁際にかかった穴であり、別個の建物の柱穴か土坑と考えている。

E d 期の遺構 (Fig.107参照)

d 期には南面の築地SA5245に開く門が改築され、それに伴って築地の南と北の側溝や東面築地SA5025の西雨落溝も改修を受ける。

SB5320 (Pl.34, Ph.30・71) 6 AFF-J 地区

築地SA5245に開く門である。礎石の据付け掘形が浅く残っている。現状では間口1間、梁間1間で、柱間寸法は間口が4.2m、梁間が2.7mである。ただし、門の南にあるSD5240がこの門の部分で南へ張り出すように改修されている (SD5240B)。したがって、f 期に掘り直されたSD5240Cと重なる位置に、礎石据付け穴が2個あった可能性がある。もしそうであれば、この門は桁行1間、梁間2間の四脚門となる。しかし、この推定も以下のような問題点があって断定はできない。

礎石建ちの
南 門

- ① 四脚門とすると梁間が桁行より大きく、現存の古い四脚門にかかる平面形式の例を見出すことができず、むしろ向唐門の平面と考える方が妥当性が大きい。ただし、奈良時代に向唐門が存在したとは常識的には考えられない。
- ② 四脚門とした場合、前2本の柱位置の礎石据付け穴はSD5240によって破壊されて残っていないとしなければならないが、現存する礎石据付け穴の大きさからすると、溝の幅より大きく、わずかなりともその痕跡が残ってしかるべきで、本来前には礎石はなかったと考えることも可能である。この場合、門の構造形式は薬医門か、棟門に庇の付いた形式(七・八坪のSB4740と同じ)となる。しかし、その場合南側のSD5240をなぜ南へ凸字形に改修せねばならなかったのか説明できない。

柱穴から平城宮Ⅳ～Ⅴの土器とⅣ-1期の軒瓦が出土している。e 期まで存続する。

SD5240B (Pl.32～34・37, Ph.30) 6 AFF-J 地区

SB5320の南の部分で、SD5240は南へ凸字形に迂回させる。この部分の東西長は約1.4m、南への張り出しは0.3m程度で、溝の幅は1.4m、深さ0.3m程度である。溝の埋土は2層に分かれる。張り出し部はSB5320の心からは約4.5mの距離になる (第Ⅲ章第2節参照)。

SX5305 (Pl.34, Ph.30・71) 6 AFF-J 地区

SD5204Bのほぼ中央に溝肩にかかって6本の杭がある。この溝にかかる橋を留める杭であろうが、護岸の可能性もある。東西両端の杭の間隔は2.4m、南北の間隔は0.3mである。

南門前の橋

SD5335・SX5336 (Pl.34, Ph.30・71) 6 AFF-J 地区

南辺築地SA5245の北にある東西溝である。SD5246を付け替えたものであろう。幅0.6m、深さ0.3m。SB5320の心から5mの位置にある。この溝の一部に木製の暗渠SX5336がある (Fig.42)。長さ2.94mにわたって板を組んで暗渠としている。底板は幅29cm、側板は27cm、蓋は折れている。厚さはいずれも7cm前後である。この部分に暗渠が必要な理由は、周辺の遺構の状況に照らしても明確ではない。e 期まで存続する。

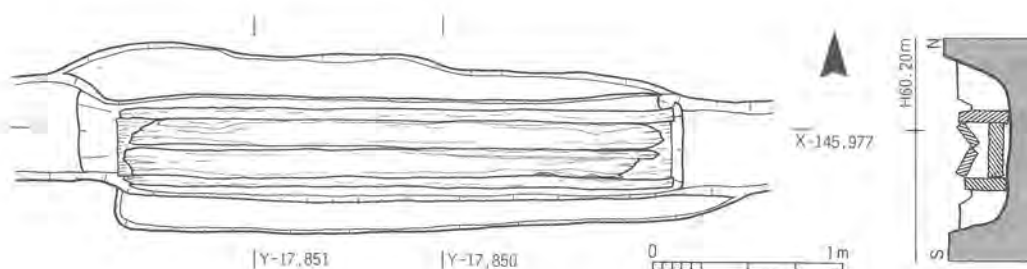


Fig. 42 暗渠SX5336実測図 1 : 40

SD5032 (Pl. 32, Ph. 67) 6 AFF-J 地区

東面築地SA5025の西雨落溝である。SD5031が埋められて、約2m西の位置に付け替えられる。発掘区内では側板を立てて坑で留めている。幅1.1m、深さ0.5m。次のe期になって、この内側に便所遺構と推定する板組のSX5035を設ける。

SA5345 (Pl. 36, Ph. 31・70~72) 6 AFF-J・K 地区

南門SB5320の北にある南北塀である。南端では東へ折れてSA5340となる。柱間寸法は2.96mで、15間分検出している。c期のSB5390の柱穴を切り、e期のSC5290、SB5375、F期のSB5386・5385の柱穴には切られている。

SA5340 (Pl. 36, Ph. 30・31) 6 AFF-J 地区

SA5340の南端から東へ伸びる東西塀である。1間分しか検出しておらず、柱間寸法はSA5340とは異なり、2.6m程度である。

SB5346 (Pl. 36, Ph. 70) 6 AFF-J 地区

南門SB5320の北西にある掘立柱の東西棟である。南の柱列はSA5340の西延長上にあり、その間にg期の井戸SE5355があるため確実なことは決め難いが、あるいはSA5340は西へ伸びてSB5346につながっていた可能性もある。桁行2間分以上、梁間は母屋が2間で、北に底がつくようである。柱間寸法は桁行が2.7m、梁間は母屋全体で5.8m程度である。e期のSB5375より古い。

F e 期の遺構 (Fig. 108参照)

e期にはd期の坪の区画が基本的に踏襲され、SA5245・5025、SB5320、SD5335等は存続する。d期には東西に坪内が区分されていたが、e期には南北に区分されるようになる。

SC5290 (Pl. 35・36, Ph. 29・31・63・71・72, Fig. 45) 6 AFF-J・K 地区

南門SB5320から北に約35mの間隔をおいて建つ東西棟の掘立柱建物である。198次A区(東)と204次(西)の二つの発掘区にまたがっている。東では桁行4間分、西では2間分検出しており、ともに梁間は1間と推定される。柱間寸法は桁行・梁間とも2.7mであるが、部分的には3mの柱間と計測できる部分もあり、二つの調査区の間も2.7mで割り付けることはできない。柱掘形はf期のSB5250・5385の柱穴に切られ、d期のSA5345の柱穴を切っている。一応、回廊状の建物と考えておく。柱穴の少なくとも一部には、礎板を据えている (Fig. 45)。柱拔取り穴から平城宮Ⅳ~Ⅴの土器が出土している。

SB5380 (Pl. 36, Ph. 31) 6 AFF-J 地区

SB5320とSC5290の間にある小規模な掘立柱建物である。東西2間以上、南北3間あり、柱

間寸法は東西が1.8m、南北は1.7mである。

SB5375 (Pl.36, Ph.31・70) 6 AFF-J 地区

SB5320とSC5290の間にある小規模な掘立柱の東西棟の建物である。204次と奈良市の156次調査区に跨っており、桁行3間以上、梁間は2間である。柱間寸法は桁行が2mでこれで割り付けると桁行6間の建物となる。梁間1.9mである。

SX5034・5035 (Pl.32, Ph.67・68) 6 AFF-J 地区

SX5034は東二坊々間路西側溝SD5021から坪内へ水を引き込む斜めの溝である。東面築地の

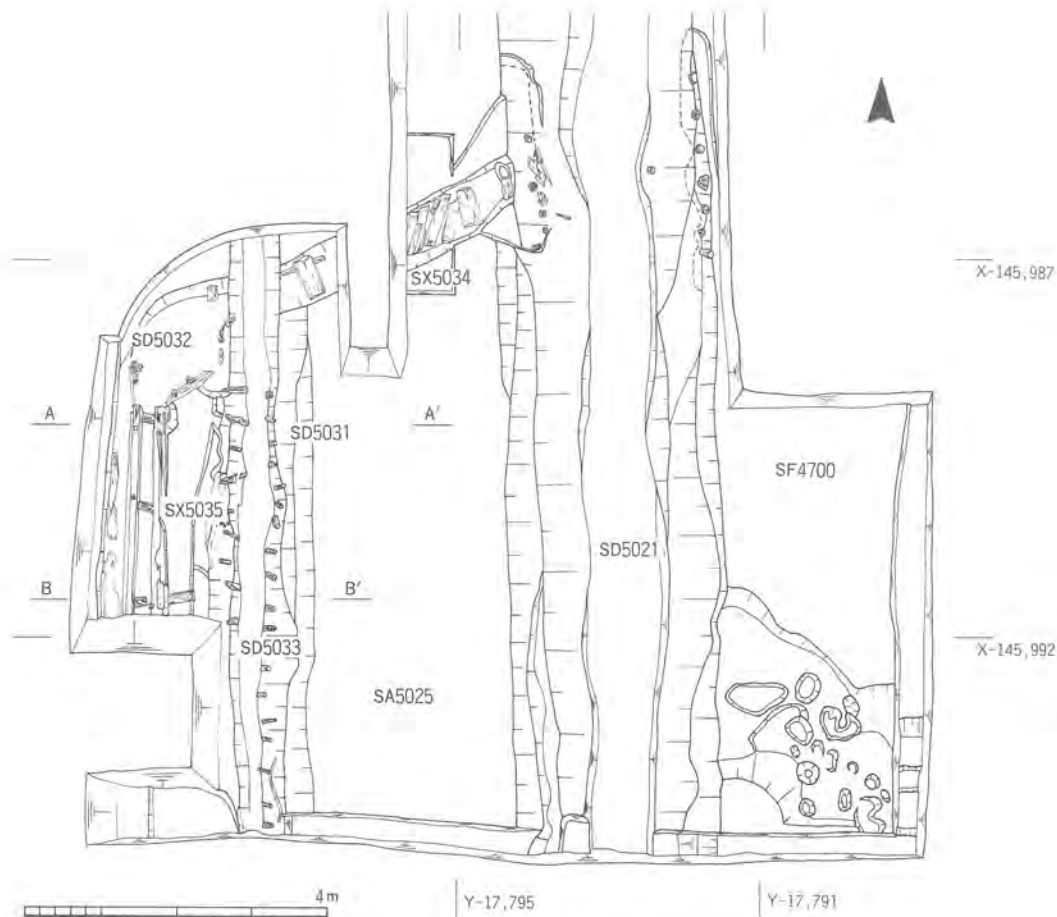


Fig.43 SX5034・5035実測図 1:100

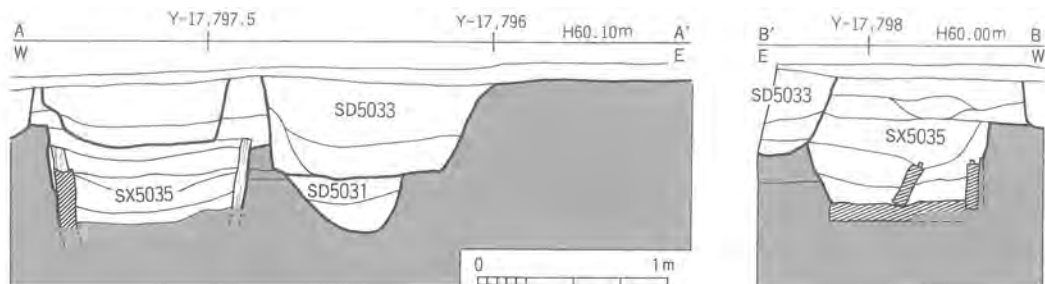


Fig.44 SD5031・5033, SX5035の先後関係(左:北壁、右:南壁) 1:40

下を通らねばならないので暗渠と推定される。実際、溝の中には板が多数落ちているので、この板を組んで暗渠としたと推定される。SX5030はSD5032内に新たに設けた板組溝である。底には長さ70cm、10～12cm角の角材3本を土台としておき、その上に約40cmの間隔を置いて幅28cm、厚さ8cm程度の側板2枚を立てている。長さは2.8mまで確認した。板の上面には3カ所にだぼ穴があって、板を2段に積み上げていた可能性がある。土壌分析の結果、SX5035水洗便所はSX5034から導水した水洗便所（樋殿）であったようだ（補論6参照）。

G f 期の遺構 (Fig.109参照)

f 期には南面築地の門が改造され、それに伴って北雨落溝はSD5244に付け替わり、南面築地の南の二条大路北側溝も再びほぼまっすぐ東西に通るようになる。また、東面築地の西雨落溝はSD5033に付け替わる。坪内部は再び改造を受け、区画施設がなくなって中央に大型建物SB5385・5386、東端に長大な建物SB5250が建つ。

SB5325 (Pl.34, Ph.30・71)

礎石建ちの南門SB5320を礎石建ちの1門の棟門に改めたもの。柱間は約4.2mと推定

SD5244 (Pl.32～34, Ph.29・30・63・66) 6 AFF-J 地区

門を改築したことによって南面築地の北雨落溝が改修され、e 期より3.7m程度南へ移動したことになる。幅0.9m前後、深さ15cmである。

SD5243 (Pl.32・33, Ph.29・63) 6 AFF-J・K 地区

SD5244から北へ伸びる南北溝である。SB5250の西側柱に沿っているので、SB5250の雨落溝として機能していたのであろう。幅0.5m、深さ0.3m。

SB5250 (Pl.32・35, Ph.29・63・72) 6 AFF-J・K 地区

SD5244・5243・5033に囲まれた範囲に建つ南北棟の壮大な掘立柱建物である。桁行20間以上の建物、梁間2間で、東西に底が付く。柱間寸法は桁行は2.4m、梁間は母屋と西庇が3m、東庇は2.4mである。南から6間目と19間目には棟通りにも柱があり、12間目と14間目にも

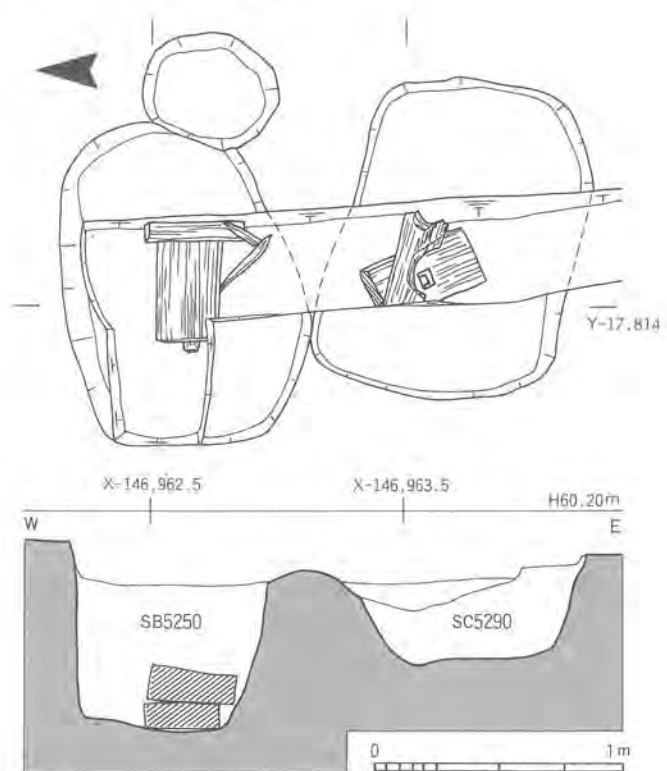
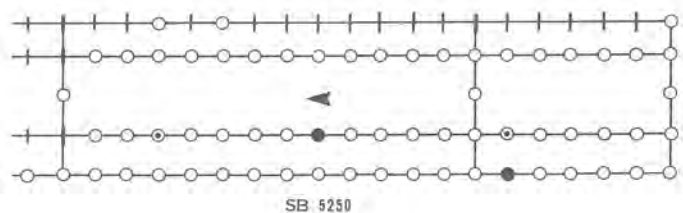


Fig. 45 SB5250とSC5290の柱穴と礎板 1 : 30



桁行20間以上の建物

ある可能性がある。すなわち、部分的に間仕切りをしていたことになる。e期のSC5290の柱穴を切っている。柱穴の底には礎板が残る(Fig. 45)。柱穴から平城宮Vの土器が出土している。礎板の伐採年は年輪年代によって761・762年間と判明している。

SD5033 (Pl. 32, Ph. 67・68)

6 AFF-J 地区

東辺築地の内側で東二坊々間路西側溝から引き込んでいた溝SX5034やそれに伴うSX5035が廃され、その後に南北の溝ができる。幅は1.2m、深さ50cmである。a～c期のSD5031とほぼ重なる位置にある。

SB5330 (Pl. 34, Ph. 30)

6 AFF-J 地区

南辺築地の際にある東西棟の掘立柱建物である。桁行5間、梁間2間で、柱間寸法は桁行は2.96m、梁間は2.7mである。

SB5385・5386 (Pl. 36, Ph. 31・71・72, Fig. 46・47)

6 AFF-J・K 地区

発掘区(第204次)の北端に柱穴7個が南北に並ぶ。狭い範囲なので確言はできないが、東に関連する柱穴などはみいだせず、西へ伸びる建物の妻と考えた。その配列から北の3個をSB5386、南の4個をSB5385とする。

SB5386は2間分あり、隅の柱穴は掘形の一辺が1.3mと大きい。深さは浅く40cm程度しか残っていない。ただし、この掘形の中に角材や丸太を十文字に組み合わせて礎板を組んでいるのが注目される。一方、棟通りの柱は他よりやや小さく、掘形の一辺90cm、深さ50cmである。

SB5385は柱間2.4mの柱穴各2個が約4.8mの間隔をおいて南北に並ぶ。柱穴は浅く妻柱は削平された可能性がある。母屋の梁間は2間で、北と南に庇が付く東西棟と推定しておく。掘形の規模や木組の礎板の状況は、SB5386の隅の柱と同様である。

H g 期の遺構 (Fig. 109参照)

坪の区画の状況はf期と大きくは変わらないが、南面築地の門SB5325はすぐ北に井戸があることからこの時期には廃されたと考える。区画内の建物はまた大きく建て替えられる。

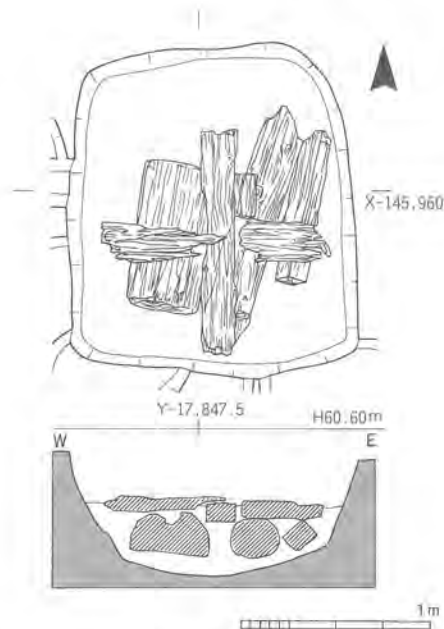


Fig. 46 SB5385の柱穴と礎板 1:40

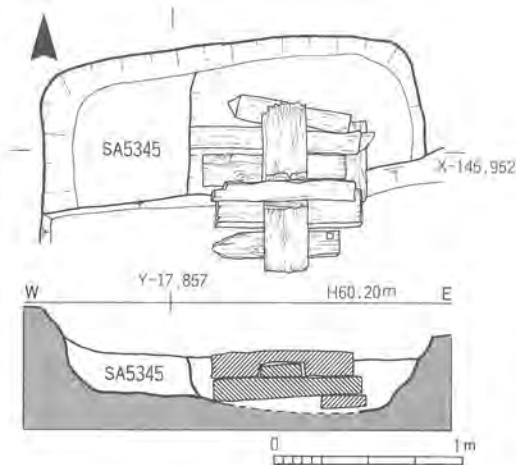
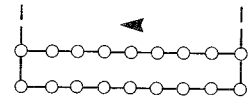


Fig. 47 SB5386の柱穴と礎板 1:40

SB5365 (Pl.36) 6 AFF-J 地区

奈良市の第156次調査区で検出した桁行2間、梁間2間の南北棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行が2.6m、梁間が2mである。D期のSB5346の柱掘形を切っている。



SB5410 (Pl.36) 6 AFF-J 地区

SB5365の北にある桁行2間以上、梁間2間の母屋の東に庇の付く南北棟掘立柱建物である。柱間寸法は桁行が1.8m、梁間は母屋・庇とも1.5mである。東庇の柱列がSB5365の東入側柱列とほぼ揃う。e期のSB5375の柱掘形を切っている。

SB5360 (Pl.36, Ph.31・66・70) 6 AFF-J 地区

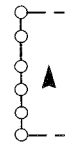
SB5365の東にある5間分の掘立柱穴である。西には関連する柱穴が見出せないで、堀から西へ伸びる南北棟の建物であろう。柱間寸法は1.8m強である。d期のSA5340の柱穴を切っている。

SE5355 (Pl.36・44, Ph.31・80) 6 AFF-J 地区

SB5365とSB5360の間にある井戸である。掘形は一辺3.8m程あり、深さは2.3m遺存する。井戸枠は下半部を円形の縦板組、その上を正方形の横板組としている。縦板組部分は内径約1.4m、1枚の板は12～3cm×5cm、長さ1.7m弱である。横板組部分はまず円形井戸枠上に断面16.5×14cm、長さ1.7mの角材を井桁に組み、交点に18cm角の角材を立てる。角材の2方に小穴をつくり、長さ1.15m、幅27cm、厚さ4cmの板を落とし込んでいる。板は1段分しか残っていない。

SB5260 (Pl.35, Ph.29・66・70) 6 AFF-J 地区

五坪東辺にある桁行8間の南北棟の掘立柱建物である。母屋部分の規模は1間以上で、西に庇が付く。柱間寸法は桁行は2.1m、母屋梁間は2.4m、庇の出は2.7mである。e期のSB5270の柱穴を切っている。柱穴から平城宮Ⅴの土器が出土している。



SX5255 (Pl.32, Ph.29・63) 6 AFF-J 地区

SB5260の南西にある4個の掘立柱穴である。東西・南とも柱間寸法は2.7mで、関連する柱穴は発掘区内には見出せない。建物の一部であろうか。柱掘形から平城宮Ⅱ～Ⅲの土器、抜取り穴からⅡ-2とⅢ-2の軒瓦が出土している。

SB5265 (Pl.35, Ph.29・63) 6 AFF-K・J 地区

SB5260の北にある南北棟の掘立柱建物である。梁間3間、桁行4間以上で、柱間寸法は桁行が2m、梁間が2.2m。掘形は一辺60～70cmと小さい。柱抜取り穴から平城宮Ⅴの土器が出土している。

SB5251 (Pl.32・35, Ph.29・60) 6 AFF-K・J 地区

五坪東辺で検出した幅70cm、深さ30cmの南北溝である。側板を杭で留めて護岸としている。北端は調査区外になる。南端は五坪南面築地近くまで残っているが、北雨落溝との接続は不明。溝の掘形はe期のSC5290、f期のSB5250の柱穴を切っているが、g期の建物SB5250とは共存しない。だが、南面築地の北辺に落下していた瓦群より古いので、g期に比定し、小さな改作があったとみとめる。